

地域連携共同研究所年報

第9号

(2023年度)

地域連携共同研究所年報 第9号の発刊にあたって	1
地域連携共同研究所 所長 星野 敦子	
地域との連携を通じた地場農産物の有効活用 ～6次産業化における大学の役割～	3
曾矢 麻理子、平田 香織、太田 啓亮、尾崎 秀寿、清家 良夫、宇田川 竜児、田中 信夫、 小林 三智子	
学生の個性を活かした地域連携活動 - 子育て支援イベントの参加を通して -	11
星野 祐子、渡邊 孝枝、名達 英詔、安達 一寿	
地域ネットワークによる野火止用水環境保全活動の成果と課題	21
星野 敦子	
世界の文化に視野を広げる実践的な学習活動	
- コンサート「民話と音楽で世界旅行」の企画制作とキャリア教育 -	31
久保田 葉子、狩野 浩二、棚谷 祐一、川瀬 基寛、細谷 忠司、石川 敬史、久保 裕子	
遊びを通じた子ども・地域の居場所支援 - 「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開 -	41
矢野 景子	
健康増進に向けたプラスごはんプロジェクトからの地域への情報発信・交信・共振	
地域住民との共振に向けた取り組みの成果	51
木村 靖子、名倉 秀子、村田 浩子、佐々木 葉穂、菅原 沙恵子、林 典子、伊藤 美穂、星野 祐子	
知的障害特別支援学校卒業生の生涯学習としてのオープンカレッジ	59
細谷 忠司、中西 郁、岡本 明博	
2023年度「3Dフードプリンターを用いたプロジェクトでの取り組み」報告書	69
吉澤 剛士、高谷 和成	
新座市における「ナッジ」を活用した食品ロス削減のための行動変容に関するプロジェクト	77
芝崎 本実、鴨下 澄子、林 綾子、石丸 亜矢子、飯塚 信一、織茂 虎太郎	
フレイル予防のための地域在住高齢者への食支援 ～美味しく作りやすいメニューの提案～	85
岡本 節子、古明地 夕佳	
地域との連携による多様性交流サロン「みんなのひろば☆きらり」の実践	93
人見 優子、山口 由美、川瀬 基寛	
地域の外国人児童が日本語と日本文化を学び、交流できる場の創出	
～「はっちぼっちひろば」と交流イベントの実施報告～	103
稲田 朋晃、新嶋 良恵、松永 修一	
朝霞市公立保育園×十文字学園女子大学	
遊んで学ぶ・探求して遊ぶ「おさんぽ プラス」活動報告 - 初年度の取り組みと課題 -	113
渡邊 孝枝、名達 英詔	
こどもの貧困に対するフードパントリーによる支援活動の実践と効果	123
星野 敦子	



地域連携共同研究所年報 第9号の発刊にあたって

地域連携共同研究所 所長 星野 敦子

2023年度に実施された「地域連携共同研究所プロジェクト」の成果をまとめた「地域連携共同研究所年報 第9号」が完成いたしました。本年報には、継続プロジェクト9件に加えて、新規プロジェクト5件、合計14件（全130ページ）の実践報告が掲載されております。

本学の先生方のシーズを生かした多彩なプロジェクトは、以下の4つの分野に分けることができます。

- ①食品開発、健康づくりのためのメニュー開発、フードロス対策の試みなどの食品系の活動
- ②子どもや多世代のための居場所づくり、コミュニティ構築に関する活動
- ③小学生のための教育活動や教材開発に関する活動
- ④地域の自然環境保全に関する活動

これらすべての活動に共通しているのが「ありのままの素材を生かす」ということです。食材はもとより、子どもたちも地域の自然環境も「ありのままの姿」で受け入れられる場を、教員や学生が地域の方たちと共に創造しようと奮闘している姿が見えました。私自身も、かつて夜の野火止用水で煌めきながら羽ばたいていたホタルの姿を追い求め、5年越しでその姿を再現することに成功したときの想いを忘れることはできません。

もう10年ほど前になりますが、静岡県立大学の先生や学生さんとの交流をとおして、居場所づくりをしようという試みをしたことがあります。静岡県立大学の学生さんたちは「ありのまま会」（通称「あり会」）というサークルをつくっていました。「だれでもありのままで受け入れられる」という場を作ることを目的とした会で、本学の学生たちと一緒に、十文字で「お菓ワークショップ」をやりました。キャンディを自作の「お菓袋」に入れて、悩んでいる人に処方してあげるのです。「やり場のない怒りに効きます」「一人ぼっちで寂しいときに1錠のんでね」という感じで袋に菓の効能を書いて渡すだけです。学生たちがとても楽しそうに、みんな笑顔でゆったりとした気持ちで取り組んでいて、「この不思議な魔法はなんだろう？」と思ったことが、なぜか急に思い出されました。

現代は、いろいろなものが急激に変わっていくVUCAの時代と言われています。このような時代にこそ、私たちは人として何が大切なのか、この本質的な課題と向き合っていくことを課せられていると感じます。

『地域連携共同研究所年報』は第9号をもって終刊となります。今後は情報発信リーフレット『ちいぷら通信』において、いきいきとした学生たちの活動の様子を発信して行く予定です。最後になりましたが、熱心に活動に取り組みまれ、大きな成果を収めてくださった先生方、学生の皆様、地域の皆様に心より感謝申し上げます。

令和7年2月

地域との連携を通じた地場農産物の有効活用 ～6次産業化における大学の役割～

Effective use of local vegetables through cooperation activity with region
～The role of universities in 6th industrialization～

曾矢麻理子¹⁾

Mariko SOYA

平田香織²⁾

Koari HIRATA

太田啓亮²⁾

Keisuke OTA

尾崎秀寿³⁾

Syuji OZAKI

清家良夫⁴⁾

Yoshio SEIKE

宇田川竜児⁵⁾

Ryuji UDAGAWA

田中信夫⁶⁾

Nobuo TANAKA

小林三智子¹⁾

Michiko KOBAYASHI

1) 十文字学園女子大学・食品開発学科 2) 新座市シティプロモーション課 3) 尾崎ファーム

4) ㈱グリーンファームらばん 5) ㈱ユーファーム 6) 田中製茶園

※4), 5)は7月より、6)は2月より研究過程で加えた。

キーワード：地場農産物 6次産業化 地域連携 商品開発

要旨：地場農産物の有効活用として、地場野菜を使ったドレッシングの開発に取り組んできた中、近年では、6次産業化を目指す農業事業者が抱える商品開発に関する課題を解決する活動に展開してきている。食品開発学科の学生たちは農業者と関わりながら、その課題解決のために大学で修得した知識を発揮し、商品開発に取り組んできた。令和5年度は㈱グリーンファームらばんの規格外トマトを用いて、その付加価値の創出に努め、さらにトマトを活用したカレーの開発を行った。また、㈱ユーファームで栽培された埼玉県オリジナル品種いちご「あまりん」の規格外品を活用して狭山茶と合わせた、あまりん紅茶の開発を行った。開発中の製品は、埼玉県農商工連携フェアにて展示し、学生たちが自ら商品化に向けて製造企業を探した。その結果、トマトカレーは食堂での提供が決定し、あまりん紅茶は地域の製茶園にて商品化へと進めることができた。また、これまで取り組んできたドレッシングの販路については、地道に販路開拓を進めた結果、受注発注での製造が可能となり、在庫管理の問題が解決した。地域との連携事業には、賛同する仲間作りが最も重要であり、本活動での成果は仲間の支援により得られたものといえる。

1 はじめに

本研究の背景には、学生が大学での学びを発揮し、地域農業の活性化に貢献することにある。地域農業の活性化の一環として6次産業化が挙げられるが、6次産業化で重要なことは、新しく生じた価値が生産者や産地にプラスの効果を与え、農業の持続可能性を高めることにある(2022 大西ら)。食品開発学科の学生は、「食の6次産業化プロデューサー」の資格を取得することができ、そのため、「食農体験」、「食品加工学」、「フードマーケティング論」などを学んでいる。地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用は、これらの学びを実践的に発揮するよい機会となっている。活動当初は大学起案で地域の特産品となる加工食品を地場野菜で作ることを目指し、贈答品や、地域の土産物として扱えるようドレッシングの開発を進めた。これまでに、にんじん、ごぼう、ブロッコリー、いちごと4種類のドレッシングを製造し販売を行ってきたが、取り組みを進める中で、6次産業化を目指す農業事業者が農産物の加工製造や、農産物自体の付加価値の創出を課題としていることを知り、近年は、その課題解決に学生たちが農業者と関わりながら、協同で商品開発を行っていく活動に展開してきている。6次産業化の取り組みにおいて、最初のハードルが商品開発であることが指摘されており(※1)、その課題解決に食品開発学科での学びは貢献できると考えている。本稿では、これまでの研究成果を農業者に還元し、反映された一例と、学生と農業者協同での6次

産業化を見据えた取り組み事例、ならびに、これまでに多くの労力を費やした大学起案で開発した商品の販売について、取り組みの継続により知見が得られたので報告する。

2 地域農業への研究成果の還元（地場農産物の付加価値の創出）

新座市は、冬にんじんの指定産地に認定されている。冬にんじんの指定産地は茨城県や千葉県にもあり、関東近隣に多い。にんじんは栄養価の高い野菜として知られているが、近年は甘いにんじんを好む消費者が増え、果物と同様に糖度が品質評価の対象になっている。にんじんの糖は品種や栽培条件、環境などに影響を受けるため、栽培地の違いによって含有量や組成が異なるといえる。そこで、新座市で栽培されているにんじんの糖含有量やその組成を明らかにし、他の産地との差別化を図ることを試みた。大学で行った分析結果を農家に伝えることで、これまで掲示していなかった品種の特徴が商品に反映されることとなった（写真1）。甘みが特徴となるにんじんはその天然の糖を活かした調理や、加工を行うことができ、付加価値として表示する意義がある。このように、産地や品種による野菜の特徴を明示することは、野菜の価値としてブランド化を創出でき、単価の向上に繋がると考える。さらには農業者の競争力や向上心を高めることに繋がることを期待したい。

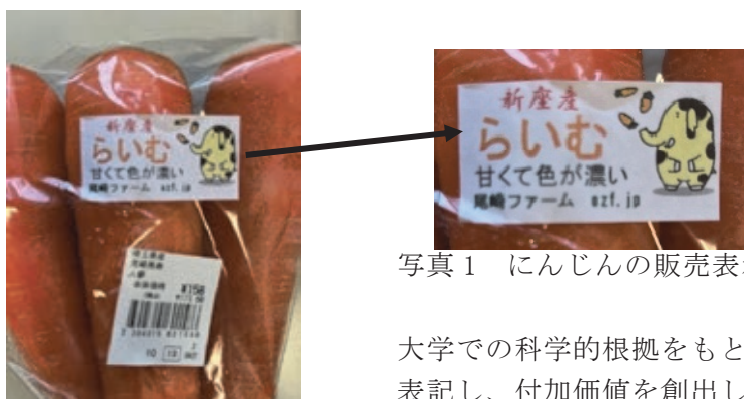


写真1 にんじんの販売表示例

大学での科学的根拠をもとに「甘い」と表記し、付加価値を創出した。

3 埼玉県農商工連携フェアへの出展

令和4年度に続き、令和5年度も埼玉県が主催した「農商工連携フェア」に出展をした。埼玉県内の農業従事者が出展しており、本学の学生はドレッシングをはじめ、開発中の商品を展示、さらに試飲や試食も提供して来場者のアドバイスを聞いた。来場者の率直な意見と、応援する声に学生たちのモチベーションの向上に繋がった良い機会になった。また、埼玉県知事が本学のブースにて、展示したカレーとあまりん紅茶を試飲、試食してくださり、学生にとって貴重な経験になった。

3-1 ドレッシングの販路開拓

令和4年度は地場野菜ドレッシングの販路開拓を目的に出展し、小ロットでの製造が可能な上富食品を埼玉りそな銀行から紹介いただき、令和6年度のドレッシング製造が受注発注で行うことができた。販路の課題に関しては、多くの方の協力を受けながら、8年目にしてようやく方向性が確立したといえる。

3-2 6次産業化における大学の役割

「大学のアカデミックな要素を取り入れたい」、「学生ならではのアイデアが欲しい」という埼玉県内の農業者からの声が挙がり、令和5年度は㈱グリーンファームらぱん、及び㈱ユーファームと協同で、商品の開発に取り組んだ。これまで、農業は自営がほとんどであったが、近年法人農業が増加しており、積極的に自社で生産した農産物を差別化する動きがある。令和5年度の農商工連携フェアでは、食品開発学科で行っている授業内容が法人農業においてニーズがあることを実感し、学生にとって実践的な場となることを確認できた契機といえた。

㈱グリーンファームらぱん（らぱん）との協同開発

埼玉県滑川町に所在するらぱんは、栽培面積41,439 m²と大規模にトマト栽培をしており、ASIAGAPを取得している農業生産法人である。通年ハウス栽培を行っているが、規格外や摘果したトマトなどが大量にあり、すべてを廃棄してしまうという課題があった。この課題に対し、学生たちは、生食には向かない規格外品をピューレにし、トマトの栄養素として注目されるリコピンの含有量に着目をして、その価値の創出を目指した。さらに、リコピン含有量の多いピューレを用いて、「温めなくてもおいしく食べることができるカレー」の開発に着手した。このカレーは、近年の災害の多さを危惧した学生のアイデアで、災害時に常温で簡単かつ、おいしく食べてもらえる普段の生活に馴染み深い食品として提案された。また、災害時だけでなく、火を使わないことから子供やお年寄りが一人でも簡単に食べることができるなど、そのターゲット層は多岐に渡っている。令和5年度の埼玉県農商工連携フェアでは、学生たち自身で開発したカレーを展示し、商品化に向けての協力を仰いだ。その結果、NTTグループテルウェル東日本㈱から食堂での提供の依頼があり、現在、提供日に向けて調整をしている。



写真2 規格外トマトのリコピン量の測定の様子



写真3 ㈱グリーンファームらぱん訪問



写真4 規格外トマトを活用したカレーの開発



写真5 R5埼玉県農商工連携フェアでの様子
(らぱんと同ブースで参加)



写真6 カレーのパッケージデザイン案

(株)ユーファームとの協同開発

ユーファームは本庄市に所在し、埼玉県オリジナル品種である「あまりん」(いちご)を栽培している農業生産法人である。ユーファームのあまりんは、第2回全国いちご選手権において2位を獲得するほど、品質にこだわって栽培されたいちごである。そのため、選定基準が厳しく規格外品も多く出るといった課題があった。学生たちは、この課題を受け、埼玉県の銘茶である狭山茶と合わせ、あまりんの紅茶を開発することにした。あまりんの旬の時期は冬から春であり、夏の時期には市場に出回らないため、端境期にもあまりんを忘れて欲しくないという思いがユーファームにあった。その声から「あまりんと狭山茶のアイスティー」をコンセプトにし、開発に着手した。開発当初は埼玉県茶業研究所協力の下、和紅茶「ほくめい」と組み合わせて配合割合を検討後、令和5年度農工商連携フェアにて展示し、商品化に向けて協力してもらえ企業を探した。その結果、入間市にある田中製茶園との共同開発が可能となり、現在では、田中製茶園で作られている農薬、化学肥料不使用の狭山紅茶を用いてあまりんとの配合割合を検討している。この狭山紅茶は、やぶきたという品種から作られ、「グレイトテイストアワード 2023」ブレンドティー・ティーバック部門にてワンスター金賞を受賞したものである。品質の良いオール埼玉の商品化を目指して産学連携の取り組みを進めている。

また、商品化と並走して、狭山抹茶とあまりんの組み合わせを検討し「抹茶いちごラテ」を考案した。これは、埼玉県産農産物の周知を目的に、学生が取り組んだもので、女子大生の視点から見た目にも美しく、食感や甘酸っぱさにこだわって作製を行った。この「抹茶いちごラテ」は、令和5年に開催された「狭山茶ドリンクレシコンテスト」にて最優秀賞を獲得した(写真13)。



写真7 R5 埼玉県農工商連携フェアでの様子
(株)ユーファームと同ブースで参加)



写真8 フェアにて埼玉県知事が
あまりん紅茶をご試飲



写真9 フェアで展示した
活動の説明



写真10 田中製茶園訪問



写真11 あまりんの加工の様子
(田中製茶園にて)



写真12 製茶の方法を学んでいる様子
(田中製茶園にて)



写真 13 狭山茶レシピコンテストにて
最優秀賞を受賞



写真 14 狭山茶レシピコンテストに応募
した「抹茶いちごラテ」

4 大学起案で商品開発を行うことの販売課題について

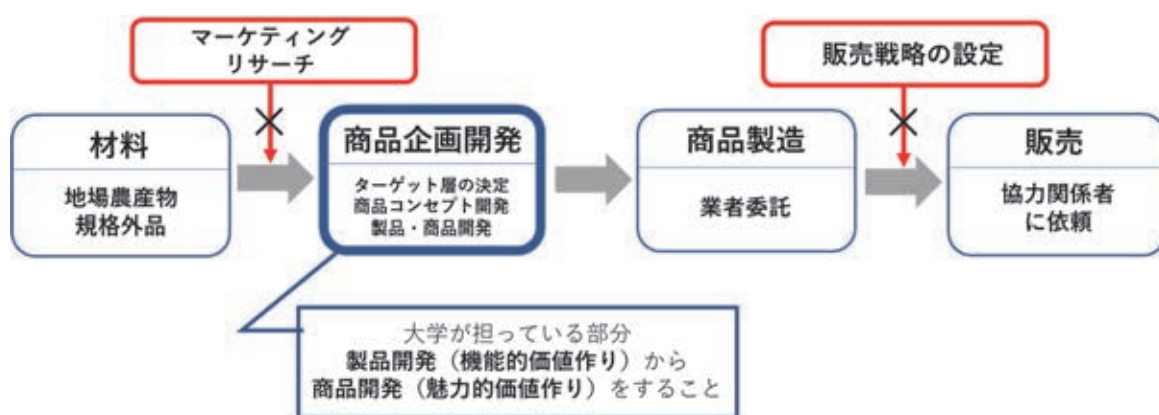


図 1 大学起案の商品開発から販売までの流れ ※2 を参考に曾矢作成

バイヤー視点での営業戦略（赤枠）がないことが課題となった。

令和 4 年度よりドレッシングの販路課題解消のため、外部支援として㈱三百の望月氏に販路に関する見解を得ている。販路については販売当初からの課題であり、ドレッシングの活動において最も労力を割いたところといえる（2019, 2020 小林ら）。望月氏は企業が投資している営業への人材や資金が大学という非営利組織にはなく、大きな課題となったことが要因と考察している。しかしながら、この取り組みを継続し販路開拓に地道にトライしたひとつが埼玉県農商工連携フェアへの参加であり、その結果、「社会共感性」を軸とし、大学を中心としてオール埼玉の商品開発を一つの形にしたと見解している（図 2, 3）。前報（2022 曾矢）で述べた通り、事業の拡充ではなく、小規模でも共感してくれる仲間づくりに重点をおいて進めていった結果、令和 5 年度は受注発注という成果を得ることができ、在庫管理の課題が解消した。

一方で食品開発学科の学びとしては、科学的な根拠を示した魅力的な製品作りをし、販売するまでが商品開発であると考えている。しかしながら、これまで、大学側に販売の知見がなく、販売に関する学びを実践で試すことができていなかった。今後は、有識者による助言や支援を受けながら販売促進まで学びを深められるようにステップアップしていきたい。さらには、販売までを通して行う学生主体の活動に、大学組織が介入してくれることを望んでいる。

地域との連携を通じた地場農産物の有効活用について <これまでの取り組みと課題>

目的	十文字学園女子大学の食品開発に対する、考え方、知見、設備を活用して、地域の「食」に関係する社会課題の解決に貢献する（地域と連携した地場農産物の有効活用 また、教育機関として、地域と連携した取り組みを通して学生の社会経験の場を創出し、 社会人育成の契機とする
アプローチ	地場農産品のエンジン、ゴボウを原材料とした、「ドレッシング」のレシピ開発を大学で行い 地域の農家、食品加工企業に協力を得て、消費者に商品として届ける
課題	- 最大の課題は、開発・製造した商品の販売（販路）であることが、本案件を進めながら明らかになった - 昨年度までは、製造ロット数の関係もあり、商品を製造してから、販売を行うという大企業が行っている在庫販売方式で行おうとした - この場合、販売の仕組みが既に構築されている、または、営業リソースが潤沢にある、ということであれば成立する方法であるが、大学と地場、中小の協力者で進めるのは、かなり負荷のかかる方法であった - そのため、在庫商品をどう解消するか、ということに不慣れな営業（販売）を強いられることとなり、売り切ったものの、この課題が大きなネックになっていたことも事実であった - 本年度は、この課題を解消すべく取り組みを進めた
依頼の目的	上記課題（主に販路課題）の解消のため、外部に支援を依頼をする（依頼先：株式会社三西）

Copyright © 2018/02/24 300 inc. All right reserved.

2

図2 これまでの取り組みと課題のまとめ（望月氏作成）

地域との連携を通じた地場農産物の有効活用について <今年度の取り組みと成果>

<経緯概要>

- ・営業（販売）が大きな課題であることがこれまでの活動で明確化された。
- ・この課題とは、商品を開発する大企業が核（エンジン）となり、大きなサプライチェーン（大量生産・大量消費を前提としたサイクル：商品の開発～製造～販売～消費）を巨大な力（組織、人、資金等）で動かし乗り越えている営業（販売）問題に他ならない。その課題に、大学という非営利組織が直面した、とも言えるものであった。
- ・その課題克服のためには、上記の、「経済合理性」にもとづいたサプライチェーンとは異なる、いわば、「社会共感性」を核として（理念・ビジョン）によって、この活動に何がしかの意義を感じ、その思いで結びついた各組織／個人が、小さいながらもエンジンとなり、自分事として、従来の方法・考え方を打開～工夫しながら、新たなサプライチェーンを構築してゆく活動が、唯一必要なこととなるとの結論を得た。
- ・まずは、賛同者、応援者と出会うことが大切であり、そのための活動を地道にトライしたひとつが、埼玉県農工商連携フェアへの出展であった。埼玉りそな銀行の支援もあり、出会った新たなパートナーの工夫（小ロット～注文販売）は大きなブレイクスルーポイントになった。
- ・その結果、「社会共感性」を軸としてオール埼玉で「地域との連携を通じた地場農産物の有効活用」のひとつのかたち（成果）に至ることができた。

埼玉県農工商連携フェア

- ・2023年2月1日（水）
- ・さいたまスーパーアリーナ
- ・十文字学園女子大学
- ・食品開発学科 出展

埼玉りそな銀行のアレンジ

- ・埼玉県農工商連携フェアで
- ・埼玉りそな銀行のマッチング
- ・様々な会社との面会が実現
- ・製造所と販売者との出会い

極小ロットでの製造

- ・新たな製造所：「上富食品」
- ・極小ロットでの製造が可能
- ・販売者：株式会社 F・D・T
- ・販売サポートも実現

オール埼玉地域連携実現

- ・開発：十文字学園女子大学
- ・アレンジ：埼玉りそな銀行
- ・製造者：上富食品
- ・販売者：株式会社 F・D・T

<気づき（成果に至るポイント）>

- ・営業（販売）が最も大きな課題（「経済合理性」とは異なる「社会共感性」へのトライが鍵）
- ・魅力的なビジョン（理念）を考え抜き、それ（賛同・共感する仲間（パートナー））と出会い全員で問題解決に取り組む

※株式会社三西は、考え方・取り組みのポイント、営業支援、資料作成・レポーティング等を含め、本活動の支援を実施

Copyright © 2018/02/24 300 inc. All right reserved.

3

図3 R5年度の取り組みと成果のまとめ（望月氏作成）

5 おわりに

ドレッシングの取り組みは、令和5年度で着手から8年が経った。曾矢ら（2021）が報告したように、地域における活動には、事業に賛同する「仲間」が最も大事であったことは間違いなく、多くの仲間の支援により継続できた活動であった。地道に地域における課題解決に取り組んだ結果、大学が介入した6次産業化が定着してきていることを実感している。農産物における課題はまだまだ沢山あり、大学の科学的根拠が必要とされている。可能な限りその間口を開き、学生が修得した知識を発揮できるよう、契機の創出に益々努めていきたいと考えている。

謝辞

地域連携推進課の皆様をはじめ、多くの方のお力添えをいただきました。ここに心より御礼申し上げます。

付記

本誌発行時（2025年2月）までに、本研究については以下のような成果が得られた。

＜(株)グリーンファームらぱんとの協同開発＞

2024年7月8日に、NTTグループテルウェル東日本(株)食堂にてトマトカレーの試験販売を実施した。その後、開発したカレーは商品名「やんごとなきトマト The curry」として2025年3月に製造に至り、文部科学省「令和5年度産学官連携活動の主な実用化事例」として紹介された。

＜(株)ユーファームとの協同開発＞

2024年11月3日に、商品名「あまりん紅茶」としてところざわサクラタウンにて先行販売に至った。現在、田中製茶園にてオンライン販売を行っている。

本活動は、十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。

参考文献

- ・大西千絵, 加藤弘祐, 野口周. 2022. 産地活性化と6次産業化-農業の経済的持続可能性に関する評価-. フードシステム研究. 28. 256-261.
- ・小林三智子, 曾矢麻理子, 竹田健次, 生田目公美枝, 小寺勝行. 2019. 地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用-野菜畑ドレッシング「にんじん畑」「ごぼう畑」「ブロッコリー畑」シリーズの完成-. 十文字学園女子大学地域連携共同研究所年報. 5, 11-17.
- ・小林三智子, 曾矢麻理子, 竹田健次, 生田目公美枝. 2020. 地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用-野菜畑ドレッシングシリーズの完成、次のステップへ-. 十文字学園女子大学地域連携共同研究所年報. 6, 3-10.
- ・曾矢麻理子, 加藤茂, 高橋憲行, 小林三智子. 2021. 地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用-持続可能な活動に向けて-. 十文字学園女子大学地域連携共同研究所年報. 7, 3-7.
- ・曾矢麻理子, 加藤茂, 平田香織, 太田啓亮, 小林三智子. 2022. 地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用-新たな6次産業化の創出に向けて-. 十文字学園女子大学地域連携共同研究所年報. 8, 3-8.

参考 URL

※1 一般財団法人 秋田経済研究所.

https://www.akitakeizai.or.jp/journal/20130901_topics.html (2024. 6. 13 閲覧)

※2 食品マーケティング&食品商品開発. 小川マーケティング事務所.

https://www.happystream.net/product_consulting/ (2024. 6. 13 閲覧)

学生の個性を活かした地域連携活動—子育て支援イベントの参加を通して—

Community Collaboration Activities Utilizing Students Individuality through Participation in Childcare Support Events

星野 祐子¹⁾ 渡邊 孝枝²⁾ 名達 英詔²⁾ 安達 一寿³⁾
Yuko HOSHINO Takae WATANABE Hideaki NADACHI Kazuhisa ADACHI

1) 十文字学園女子大学・文芸文化学科 2) 同・幼児教育学科 3) 同・社会情報デザイン学科

キーワード：地域連携 官学連携 子育て支援 コンピテンシー キャラクター

要旨：「プラスちゃんくらぶ」と幼児教育学科の学生有志が、埼玉県で初めての開催となった「SAITAMA 子育て応援フェスタ」に参加した。イベントで従事したことは、学園キャラクター「プラスちゃん」の出動を含むキャラクターイベントの運営協力、ノベルティの台紙デザイン、本学のPRブースの運営、埼玉県運営ブースのサポート等、多岐にわたった。

イベント参加後の学生たちのふり返しには、自分たちの学びや特技を積極的に活かそうとする姿勢、場面や来場者のニーズに応じて適切な対応を選択する柔軟性、今回得られた反省を次回に活かそうとする向上心、などを読み取ることができた。こうした学生たちの姿は、埼玉県庁の担当職員の方にも評価された。今後も、埼玉県の保育・教育を担う人材を輩出する大学として、本学らしい地域連携活動に励んでいきたい。

1 はじめに

コロナ禍以前とほぼ変わりなくイベントが開催された 2023 年度。学園マスコットキャラクター「プラスちゃん」を活用した活動も、前年度以上に活性化した。参加するイベントに規制がないイベントというのは、2020 年度以降に入学したすべての在学生にとって初めての経験となった。

2023 年度は、新たなご縁を得て、さいたまスーパーアリーナで開催された「SAITAMA 子育て応援フェスタ」に参加することができた。2 日間開催で 17,000 人を超える来場者があり、本学からは延べ約 50 名の学生がスタッフとして参加した。同イベントは、埼玉県と（株）ACCEL LINK¹との共催で開催され、埼玉県において、同規模のイベントは 2023 年度が初回となった。

本稿では、2023 年度初めての参加となった同イベントでの活動を振り返るとともに、参加を通して得られた学生の気づきや成長を記述する。

2 「SAITAMA 子育て応援フェスタ」とは

「SAITAMA 子育て応援フェスタ」は、埼玉県の子育て支援の充実をアピールするとともに、官民連携で子育てを応援することをメッセージとして開催された。会場では、子育てに役立つ最新のサービスや商品、さらには、各自治体の魅力的な子育て支援が紹介された。

2. 1 子育てイベント開催の背景

厚生労働省が発表した 2023 年の「人口動態統計（概数）」によると、2023 年の埼玉県の合計特殊出生率は 1.14 で、前年の 1.17 より 0.03 ポイント低下している。日本全体となると 2023 年は 1.20 であり、前年の 1.26 より 0.06 ポイント低下している。少子化の背景には、結婚に対する意識の変化、経済的不安定さ、仕事と子育ての両立の困難さなど、様々な要因が挙げられる。

¹ 日本最大級規模の子育てイベント「マタニティ&ベビーフェスタ」のイベント運営を手掛ける。これまで横浜・大阪での開催実績がある。

こうした状況を背景に、埼玉県は、第4期「埼玉県子育て応援行動計画」（2020年～2024年度）を策定した。その理念は、【「すべての子供の最善の利益」を目指し、「子育て」「親育ち」の支援や地域全体での子育て支援を通じて、子供を生み育てることに希望を持てる社会づくり】というものである。なお、同計画策定時において、2024年に目指すべき合計特殊出生率は、1.59であった。しかし、2023年の「人口動態統計（概数）」によると、埼玉県の合計特殊出生率は1.14であり3年連続の低下となった。2024年においても同程度の値となることは想像に難くない。

次に、「令和2年度少子化社会に関する国際意識調査報告書【全体版】」から、理想とする子どもの数についての調査結果を参照する。2020年調査における理想の子ども数は、平均2.1であった。また、「2人」と回答した人数の割合は52.1%と回答者の半数を超えている。経年変化をみると、2005年2.4、2010年2.3、2015年2.2、2020年2.1で、「2人」と回答した人数の割合は、2005年50.4%、2010年51.8%、2015年54.8%、2020年52.1%となっている。つまり、現状、理想とする子どもの数と現実の間には、大きな乖離があることがうかがえる。もっとも、本調査は、全国調査であるため、埼玉県の調査に限ったものではないが、子育てに関する理想と現実には乖離があることは埼玉県も例外ではない。

さらに、同調査より、「（日本は）子供を生み育てやすい国だと思うか」といった子育て環境に関するアンケートの結果を引用する。「どちらかといえばそう思わない」（47.2%）、「全くそう思わない」（13.9%）と答えた人の割合は6割を超えた（図1の赤枠部分）。経年変化は以下の通りである。

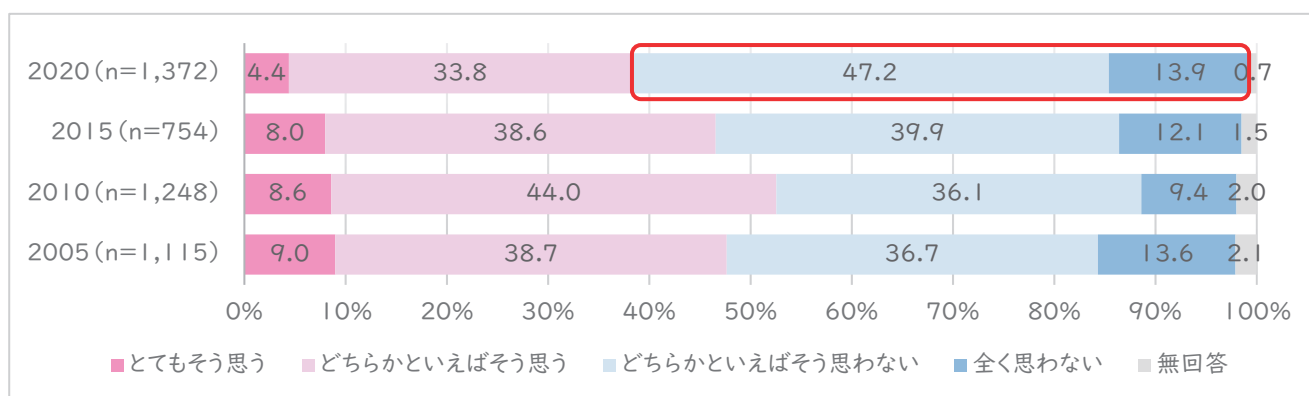


図1 子供を生み育てやすい国だと思うか（日本）

ここまでの調査報告を総合的に捉えると、子どもを複数人育てたいと願う人の割合は、それほど変化はないものの、子育て環境への不安は拭えずに少子化に至っている、ということが想定できる。以上のような状況を憂慮したことが、本イベント開催に至ったきっかけの一つであろう。

2.2 「SAITAMA 子育て応援フェスタ」の実施概要

SAITAMA 子育て応援フェスタ事務局（(株) ACCEL LINK 内）による開催結果報告書から、本イベントについての実施概要を記載する。

表1 実施概要

日程	2023年11月18日（土）・19日（日）
会場	さいたまスーパーアリーナ（コミュニティアリーナ）
主催	SAITAMA 子育て応援フェスタ実行委員会
企画運営	SAITAMA 子育て応援フェスタ事務局（(株) ACCEL LINK 内）
出展団体数・ブース数	55団体・92ブース
来場属性	産前産後ファミリーおよびキッズファミリー
来場者数	11月18日 9,552名 / 11月19日 7,776名 合計 17,328名

開催結果報告によると、8割を超える来場者が埼玉県在住で、会場にアクセスしやすい中央地域（さいたま市、川口市、戸田市など）在住の参加者が全体の6割強を占めていた。

出展団体である55団体は、県、市町村、一般企業など様々であり、自治体の参加団体は、埼玉県、越生町、加須市、川越市、川島町、長瀬町などであった。本学は、営利を目的としない教育機関であることから、自治体に準ずる団体として参加した。教育機関では唯一の参加であった。

3. イベント参加のきっかけとイベントでの役割・担当

ここでは、イベントに参加するようになった経緯と、イベント担当課であった埼玉県福祉部少子政策課²と相談のうえ協力することになった企画について述べる。

3. 1 「SAITAMA 子育て応援フェスタ」ブース出展のきっかけ

本学が「SAITAMA 子育て応援フェスタ」に参加するようになったきっかけは、「プラスちゃん」が所属する「ゆる玉応援団」に届いたメールであった。

「ゆる玉応援団」とは、埼玉県の魅力をPRするご当地キャラクターが加盟する団体である。団長は埼玉県のマスコット「コバトン」、団長補佐は「さいたまっち」で、現在は128体のキャラクターが登録されている。そんな「ゆる玉応援団」宛てに、2023年5月「SAITAMA 子育て応援フェスタ」の参加要請が届いた。依頼内容は、イベント期間中に会場を練り歩きグリーティングをする、というものであった。「プラスちゃん」をきっかけに、埼玉県の保育・教育を支える人材を輩出している本学を知ってもらいたい——そんな願いからまずは本イベントへの参加を決めた。

参加エントリー後、「プラスちゃん」の運営に携わるプロジェクトメンバーに報告をしたところ、本学のPRを兼ねてブースの出展ができないか、ということが希望として挙がった。そこで、埼玉県の担当課である福祉部少子政策課に連絡をし、本学のブース出展を打診した。実行委員会で検討していただいた結果、自治体ブースと同様の扱いで出展させていただけることになった。

3. 2 ブース出展以外の関わり

ももとは、キャラクターの出演に加え、本学のブースを出展したい、ということで少子政策課と連絡を取るようになったが、やりとりを経るなかで、キャラクターイベントを連携して行うことになった。その理由として、本イベントの担当課である少子政策課よりも、「プラスちゃんくらぶ」の方が、キャラクターイベントへの参加経験が豊富である点が挙げられる³。

また、キャラクターイベントの企画協力に加えて、埼玉県ブースの運営においても、学生が一部関わった。学生が関わった活動には以下のものがある。

【キャラクターイベント】

- ・ノベルティとして配布する消しゴムの台紙デザイン・キャラクターイベントの企画協力
- ・埼玉県管轄着ぐるみのスーツアクター

【埼玉県運営ブースのサポート】

- ・クイズの解答チェックと景品配布（少子政策課）・輪投げコーナーのサポート（福祉政策課）
- ・木育おもちゃコーナーのサポート（全国植樹祭推進課）

4. イベントの記録

イベントを振り返るにあたって、「SAITAMA 子育て支援応援フェスタ」HPに掲載された企業・自治体の出展ページの情報、本学運営ブース・キャラクターイベントの様子を記載する。

² 現福祉部こども政策課（2024年度～）

³ 埼玉県のキャラクター「コバトン」「さいたまっち」の広報は、県民広聴課（魅力発信担当）が務め、「ゆる玉応援団」の運営は、産業労働部観光課（DMO支援・観光振興担当）が務める。

4. 1 本学のPRページ

本学のキャッチコピーを「子育てにプラス！～プラスとなる子育て 応援します～」とした。そして、本イベントではじめて本学を知る人もいることを想定し、地域に根ざした大学であること、地元埼玉県を支える保育者・教員を多く輩出している大学であることをPRした。

図2が本学のPR画像であり、子どもたちが大学に訪れスポーツ教室に参加していたり、学内で遊んだりしている場面をイメージ画として用いた。



図2 本学のPRページ

4. 2 本学ブース

本学運営ブースは、幼児教育学科教員の渡邊と名達が担当し、幼児教育学科学生有志と共に準備を進めた。子育て支援に関する本学の取り組みをPRするとともに、ブースに訪れた子どもたちが、参加学生と交流をしつつ、何かしら体験できるような場にしたい——そのような願いを込めてブースを企画した。



図3 本学のブースと「はってつくろう みんなの木」の作成の様子

来場者参加型企画である「はってつくろう みんなの木」では、ブースに訪れた来場者が、壁と床に貼られた白いキャンバスに、枯れ葉や色紙などを自由に貼り付けたり、クレパスで色をつけていったりした。作品を創っていく過程で、枯れ葉や色紙をちぎったり握ったり重ねたりしながら、その感触を楽しんでいる様子が見受けられた。こうして、2日間のイベントで、彩り豊かな立派な大木が完成することになった。また、子どもたちが活動に参加している間、大人の参加者に向けては、本学の地域活動や子育て支援の様子を紹介した。情報の周知は、QRコードでの読み取りをメインとし、ブース内では子どもたちの活動や、学生との交流を中心とした。

当日は、J:COMの取材を受け、ブースの様子は埼玉県内のJ:COM サービスエリアで放送中のバラエティ番組『埼玉の逆襲』で取り上げられた。現在は、YouTubeの「LOVE 埼玉チャンネル」でも観ることができる⁴。

⁴ 埼玉のJ:COM公式チャンネル「LOVE 埼玉チャンネル」にて配信。配信タイトル「【子育て応援フェア】さいたまママ・パパの子育てお悩み相談【埼玉の逆襲】」（2023年12月8日に公開）

4. 3 キャラクターイベント

「ゆるキャラパレード～埼玉県の謎を解け～」と題した謎解き企画をプロデュースした。

用意した謎は4種類で、時間毎に出題される謎が異なる。会場を練り歩くキャラクターが持っているヒントパネルのメッセージを組み合わせると答えを導くことができる。謎解きのモチーフは「ゆるキャラパレード」に参加するキャラクターと埼玉県にまつわることとした。

図4は謎解きのフローで、図5は、クイズシートの一部とキャラクターが実際に会場を練り歩いた際に用いたパネルである。



図4 「埼玉県の謎を解け」の説明パネル

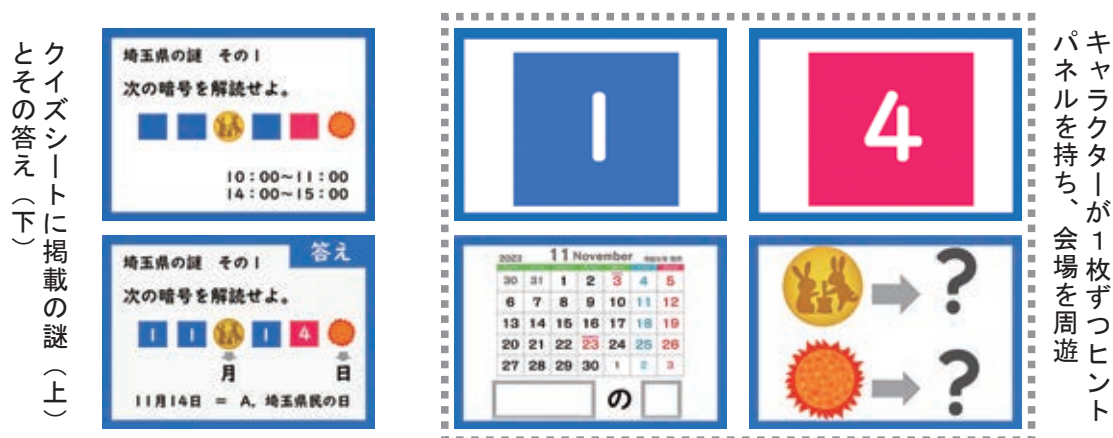


図5 「埼玉県の謎を解け」で出題した謎（一部）

図5で取り上げた謎は「埼玉県民の日」が解答となる。①「1」、②「4」、③カレンダーのパネル、④イラストの「月」と「太陽（日）」、を組み合わせると、「11月14日」の「埼玉県民の日」を導く。謎解きに慣れている人々にとっては難しくないレベルの謎だが、今回は、ファミリー向けのイベントということで、会場には常にヒントを出す「クイズお姉さん」を配置した。

図6は、ヒントパネルを子どもたちに見せている場面と「クイズお姉さん」の様子である。



図6 「埼玉県の謎を解け」のイベント運営に従事する学生とプラスちゃん

また、「埼玉県の謎を解け」のノベルティは、埼玉県が用意した「コバトン」や「さいたまっち」の立体消しゴムで、その台紙に相当する用紙を「プラスちゃんくらぶ」の学生がデザインした。デザインにあたっては、埼玉県から支給いただいた「SAITAMA 子育て応援フェスタ」のロゴと「コバトン」・「さいたまっち」のイラストを組み合わせて、企画の趣旨に沿うようにデザインした。なお、担当した学生は、高校時代はデザイン科に在籍し、その成果を活かすことができたといえる。



図7 ノベルティの台紙

4. 4 その他

県庁の方のご厚意で、学生たちは埼玉県ブースの運営も担当させていただいた。謎解きイベント参加者へのノベルティの配布、わなげ体験、木育おもちゃのサポートなど、来場者への臨機応変な対応やおもてなしが求められる場で、実践的な経験を積むことができた。



図8 埼玉県ブースの運営サポート

以上が「SAITAMA 子育て応援フェスタ」において、本学学生が携わった内容である。

5 学生の振り返りから

イベント終了後「SAITAMA 子育て応援フェスタ」に参加した学生に向け、本イベントについての振り返りを実施した。以下より、学生の所感を取り上げる。

5. 1 本学ブースについて

ブースの企画・運営は、幼児教育学科の教員である渡邊、名達と幼児教育学科の学生が中心となった。学生の記述より、準備から当日に至るまで、学科の学びを活かした活動となっていたことがうかがえる。

- ・準備において、子どもの「自由さ」「想像力」を引き出したり支えたりするための材料を考えたり、どのような環境が望ましいかを考えたりした。一方、安全性について考慮する時間が少なかった。

本学の幼児教育学科では「子どもから学ぶ 子どもと共に学ぶ」ことを大切にしている。この記述からは、子どもの良さを引き出す保育者として、子どもの自由な発想を促すことを意識している姿を読み取ることができる。また、限られたブーススペースにおいてどのような環境を用意したら

よいか考えを巡らせている。対して、安全性について考慮する時間がなかったと振り返っている。では、同じ学生はブース運営を経て、どのようなことを感じただろうか。

- ・子どもが材料と関わる際、どのような言葉掛けで自主性のある活動になるのかを、子ども一人ひとりに接しながら考えることができた。また、子どもの活動に合わせて環境を変化させることで、子どもの安全を守り、ほかの子どもの活動の場を保障することを考えることができた。保護者には、子どもの素敵なおところをたくさん伝えるようにした。

上記の記述から、準備段階で意識していたことは、当日もおおむね意識できていたことがうかがえる。また、準備段階において懸念していた安全性についても、ブースを運営しながら対応することができていた。実際、子どもたちの動きやブースに滞在する子どもたちの人数に合わせて、ブースの展示は柔軟に変更されていた。豊富な実習経験が活かした対応だといえよう。そして、保護者対応においても、子どもの良い点を伝えるということが意識され、保護者に信頼される保育者として、高い意識を備えていることがわかる。

また、ブース運営には、「プラスちゃんくらぶ」の学生も一部関わることもできた。以下のコメントを寄せた2名は、幼児教育学科の学生ではないものの、過去の参加経験を活かしたり、子どもの発想に学び、それを今後のイベント運営に活かそうとしたりする姿勢がみられた。

- ・本学のブースに参加した時、子どもたちの創造力・発想力に驚かされた。この場にあるものを使って自由に木を創るという活動が魅力的だった。用意する材料を工夫する大切さを学んだ。
- ・子どもと直接お話をする時は、目線を合わせるようにし、最後まで話を聞くことを心がけた。また、目線の向いている方向や興味のあることを話の中で探り、会話を楽しんでもらえるよう意識した。

5. 2 キャラクターイベントについて

「プラスちゃんくらぶ」の学生は、これまでも多くのイベントでキャラクターグリーティングを経験している。では、今回は、どのようなことを気づきとして得たのだろうか。

- ・アテンドを担当した時、周りの音に負けないように 声を張ることと高くすることを意識した。通路が狭く障害物も多かったため、細かく方向の指示をした。
- ・アテンドを担当した時、キャラクターの大きさを把握しきれていなかったのでお客さんとの距離が必要以上に近くなってしまったことがあった。アテンドとしてはキャラクターが安全にお客さんに関わることを大切にするので、空間を把握しながら声掛けすることが必要になると思った。
- ・アテンドを担当した時には、アクターの負担を確認しつつ、お客さんと交流できるように対応した。
- ・アテンドを担当した時、キャラクターのかわいさがお客さんに伝わるように関わることを意識した。写真撮影を頼まれた際は、最高の笑顔で撮影できるような言葉掛けや合図を出した。

上述の記述から、アテンドを担当した学生は、キャラクターと参加者の安全を確保しながら、キャラクターの良さを引き出し、来場者に好印象を持ってもらえるよう意識しながら、着ぐるみを誘導したことがわかる。だからこそ、来場者との写真撮影においても、言葉がけや合図に工夫を施したり、来場者とキャラクターが交流できるよう配慮したりしていた。

また、今回は複数のキャラクターを担当したり、複数のブース運営に携わったりしたため、通常のキャラクターイベント時よりも、アテンドに充てられる人数に限りがあった。そのため、アテンドに習熟している4年生の参加者は次のような気づきを寄せた。

- ・キャラクター1人に対してアテンド1人だと、来場者の方への対応が間に合わないと感じる場面

があった。今後私が参加できるイベントは数えられるほどだとは思いますが、その中で後輩たちがどうやったら活躍しやすいのかを考え、サポートしていきたい。

状況を冷静に捉え無理はしない。特に着ぐるみのアテンドは、着ぐるみを安全に誘導し、参加者の安全を守ることが求められる。活動において何を優先すべきか、4年生のメンバーの気づきと後輩の活躍を願う思いに、よりよい組織を志向する学生の成長をうかがうことができる。

続いて、謎解きイベントについては、特にヒントを与えるという役割を担った際の気づきや感想が多く寄せられた。

- ・入口近くでクイズシートを配布した際、なるべくわかりやすいことばでクイズに興味を持ってもらえるよう心掛けた。また、ヒントや場所の案内などには積極的に応えるよう意識した。
- ・クイズに困っていきそうな参加者に自ら声をかけ、ヒントを提示することができた。
- ・「クイズお姉さん」担当の時は、こちらが思っている以上に声を掛けられた。そこで、お客さんとのコミュニケーションを大事にして、正解をお客さんが口にしたときは一緒に喜ぶことを心がけた。

「クイズお姉さん」として、イベントを盛り上げるにはどのようにしたらよいか、自らできることに積極的に取り組んでいたことがうかがえる。

最後に、ノベルティとして配布する消しゴムの台紙をデザインした学生の気づきを紹介する。

- ・自分の経験や知識、好きなことが、地域連携などにつながっていくのだと感じた。また、このようなことをもっとやっていきたいと思った。

「プラスちゃんくらぶ」のモットーとして、「できるときに できることを」というものがある。学生たちは、地域活動への参加を経て、自分の特技を活かすことに意欲をみせる。ここで、安達・星野（2018）より、本学のキャリア科目である「自主社会活動」⁵の参加者を対象に、コンピテンシーの伸長を分析した分析を引用する。以下は活動後のアンケートの分析結果である。

コンピテンシーでは、対人領域の「他者を思う力」と「協働する力」、対自己領域の「自己を理解する力」と「自信を持つ力」の伸長が高い。（略）学外の人々との関わりや交流によって、より効果的にコンピテンシーの育成は行える可能性があることを示唆する（p.211）。

今回の活動は、2日間の活動が中心となり、35時間以上の活動に従事する「自主社会活動」の時間数には及ばないが、参加した学生は、イベントに訪れる来場者を思いやり、来場者のニーズに合わせた対応を意識した。また、主催者である県庁の方や学生同士で協働しながらイベントを盛り上げ、その過程で自分の強みに気づき、自信を持つに至った。つまり、安達・星野（2018）で指摘したコンピテンシーの伸長を、本イベント参加の学生にも見て取ることができる。

5. 3 埼玉県ブースの運営サポートにおいて

計画調整課のコナーでは、SDGsに関するチラシ配布を担当した。担当した学生は、「どうしたらお客さんに興味をもってもらえるのか考えられるいい機会になった」と本コナーでの活動を振り返る。来場者に手に取ってもらうには、どのような声かけをすればよいか、経験を重ねることで対応のコツをつかんでいったのだろう。

⁵ 「自主社会活動」（キャリア教育科目、半期1単位）とは、学生が自らの意志でプロジェクトや社会的活動に参加し、大学の授業では経験できないことを自分の学びとすることを目的とする。無償で35時間以上の活動を行い、活動報告を経て、総合的な評価のもとに単位認定がなされる。

福祉政策課のコーナーにおいては、輪投げ遊びを担当した。担当した学生は、「子どもに楽しんでもらいたいと思って積極的にブースへ誘う声掛けをし、輪投げを楽しむ最中もより楽しめるよう意識した」との感想を寄せた。

全国植樹祭推進課担当のブースでは「木育おもちゃ」の体験をサポートした。ある学生は「子どもだけでなく大人の方にも楽しんでもらえる声掛けを頑張った」と、保護者への対応に工夫したことを述べた。「例えば、木をつまむことで年齢がわかるおもちゃは、大人の方に興味を持ってもらえることが多かった。『意外とつまむことが難しいので、実際にやってみてください』など積極的に声をかけることができた」とその体験を振り返る。声掛けの対象に合わせて、自身の発話内容を工夫していたことがうかがえる。また、木育おもちゃのブースサポートにあたっては、「親子連れの滞在可能時間を考えながら声掛けすることを意識した」との振り返りがあった。親子連れに時間がありそうなときは、おもちゃの体験を勧め、時間がなさそうなときは、クイズやアメニティのプレゼントを勧めるなど、来場者の状況を慮りながらの対応を心がけたとのことである。

6. 埼玉県を担当の方から

県庁の方から、学生の関わりについてコメントをいただいた。コメントを抜粋して示す。

埼玉県ブースの運営サポート

来場のお客様だけではなく、ブース内の県職員にも明るく笑顔で対応してくださったおかげで、県ブースを円滑かつ雰囲気よく運営することができました。

わからないことがあった場合は、そのままにせず、すぐに聞いてくれて、質問したことをすぐに理解し対応していただきました。また、シフトで別の方に替わる際には、学生同士で引き継ぎを行い、県職員側の説明等の手間を減らすことができました。そのような気遣いにも大変助かりました。大学生の若者ならではの活気と明るさで、場也大いに盛り上がったと思います。

県管轄の着ぐるみの出動

県職員だけでは対応が難しかった着ぐるみへの対応も快く引き受けていただき、大変助かりました。初日のオープニングセレモニーや、絵画コンクールなどでのステージ登壇についても柔軟に対応してくださり、大きな問題なく、スムーズに進めることができました。

キャラクターイベントの企画、台紙のデザイン

県職員では考えられない柔軟な発想で、大変素晴らしい企画になったと思います。

当日を迎えるにあたり、まずは景品となる消しゴムの台紙デザインの作成をしていただきました。クイズを解いていく企画に相応しいデザインを考えてくださり、可愛らしい素敵なものができあがりました。また、子どもも大人も一緒になって楽しめる、埼玉県にちなんだクイズを考えてくださり、埼玉県ならではのイベントにすることができました。

当日の流れや運営方法についても、円滑に進むことができるよう工夫してくれました。また、控室では、他キャラクター担当の方への説明・対応をお任せすることができ、安心してキャラクターイベントを運営することができました。

その他の気付き、今後期待すること

当日の運営等の忙しさで、子どもたちが楽しんでいるのか、つい気が回らなくなってしまうことがありましたが、学生さんが景品を子どもたちに渡すときに、ただ機械的に渡すのではなく、子どもが喜ぶような声掛けをしてくれていました。その姿を見て、感銘を受けました。

子ども目線で向き合う姿勢を忘れない大切さに気付かせてもらいました。皆さんは常に子どもたちに楽しんでもらいたいという軸からぶれることなく、熱心に取り組んでいました。

本フェスタは、十文字学園女子大学の皆さんに、準備から運営までご協力いただいたことによって、無事にイベント当日を迎えることができ、フェスタを盛り上げることができました。

学生さんと関わることができ、学生さんの持つ様々な才能、パワーを感じました。これからたくさん可能性がある皆さんかと思えます。どんなことでも無駄なことはないと思えますので、様々な経験を重ね、ご自身のもつ才能をさらに伸ばしていったほしいと思います。

以上、いただいたコメントの一部を抜粋した。ここで、特に注目したい点は下線部である。日頃から子どもたちと接する機会の多い幼児教育学科の学生や「プラスちゃんくらぶ」の学生が、意識的にせよ無意識的にせよ、「子ども」に思いを寄せてイベントの運営に励んでいたという点である。以下より、「子ども中心」という点に関して、幼児教育学科の学生の気づきを取り上げる。

- ・子どもが遊べる場が少ないという声を保護者の方からよく聞いた。育児に関わるものがもらえたり、子どもの写真を撮ったりできるという点では「楽しい」と言っていたが、やはり子どもが楽しんでいる姿を見ることが、保護者にとっては一番喜ばしいことなのではないかと感じた。次回は子どもが自由にブロックやお絵描きなどができるスペースがあると、気軽に長くしやすいのではないか。

来場者がイベントに求めるものは様々であろうが、子どもが楽しんでいることが保護者の喜び、という原点を意識することを、イベント運営に関わる立場の者として、忘れないようにしたい。上記の気づきはそのことを改めて考えさせるものとなった。

7. 今後に向けて

17,000 人を超える来場者があった大規模な子育てイベントに、2023 年度は 50 名を超える学生が参加することができた。活動を経るなかで、学生たちは学科の学びや経験を活かすことができ、達成感や自己有用感をもつことができた。

今後も、子育てイベントに限らず、学生が社会と接点を持つ機会を大切に、学生の学びの場を広げていくことに努めたい。

付記

本活動は、十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。学生に活動の場を提供して下さったみなさま、学生の成長を支援して下さった全ての方に感謝申し上げる。特に、埼玉県福祉部少子政策課の職員の方には、事前の打ち合わせに加えて、来学いただき、学生の活動を知っていただいた。改めて深謝申し上げます。また、本イベント参加においては、大学の広報を兼ねて総務部広報課（2023 年度）にも協力をいただいたことを付記する。

<参考資料・参考文献>

安達一寿・星野祐子（2018）「自主社会活動における評価方法の検討と学生のコンピテンシー伸長の分析」『十文字学園女子大学紀要』48 十文字学園女子大学 pp.203-212

厚生労働省「令和 5 年（2023）人口動態統計月報年計（概数）の概況 結果の概要」

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai23/dl/kekka.pdf>（2024 年 6 月 5 日参照）

埼玉県「埼玉県子育て応援行動計画（令和 2～6 年度）」

https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/15702/kosodateouen_koudoukeikaku_r2-6.pdf（2024 年 6 月 10 日参照）

内閣府「令和 2 年度少子化社会に関する国際意識調査報告書【全体版】（PDF 形式）」

https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf_index.html（2024 年 6 月 10 日参照）

地域ネットワークによる野火止用水環境保全活動の成果と課題

Results and problems of environmental conservation activities for
Nobidome-Yosui River by the local network

星野 敦子¹⁾

Atsuko HOSHINO

1) 十文字学園女子大学教育人文学部・児童教育学科

キーワード：地域ネットワーク、野火止用水、環境保全活動、地域人材育成

要旨：野火止用水における「HUG ネット」の樹木保全に関わる活動について、植生調査や樹木マップの作成、樹木プレートの設置について検証を行った。活動の成果としては以下の4点が明らかとなった。①植生調査を行い、樹木マップを作成したことで、新座市の野火止用水沿い（野火止公園から本多緑道まで）の樹木環境の現状が明らかとなった。樹木の中には、ケヤキやシラカシのような屋敷林由来の樹木、コナラやクヌギのような雑木林由来の樹木のほか、ニガキのような珍しい樹木もあることがわかった。②2015年に樹木プレートを設置し、その後補填、管理等を継続することで、結果的に用水沿いの樹木の状況を継続的に観察し、その結果を保全活動に生かすことができた。③樹木プレートの設置により、地域住民の方に野火止用水沿いの樹木に親しんでいただき、環境保全に対する意識の向上につなげることができた。④継続的な植生調査により美化活動の必要性やホタル再生のための環境づくりに対するエビデンスを得ることができた。

1. はじめに

2015年3月に設立された「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」（通称：HUG ネット）は、新座市内において自然環境保護やまちづくりに関わる活動を行っている地域団体、町内会、大学、ならびにこれらを支援する新座市の関係課により構成されている。「HUG ネット」においては、各団体の活動を支援するとともに、活動開始2年目（2016年より、複数のプロジェクトを構築し、会としてのオリジナル活動を長年展開している。プロジェクト方式を採用したねらいは以下の4点である（星野他、2020）。

- ①毎年継続的に実施する活動の成果を向上させる。
- ②プロジェクトリーダーや主担当となることで、メンバーの活動に対する主体性を高める。
- ③リーダーやサブリーダーが責任をもって人選を行い、活動に中心にかかわるメンバーを増やすことで、組織や活動に対する責任感を高める。
- ④HUG ネットの活動をプロジェクトで表すことにより、活動内容や組織の特徴に関する情報発信を活性化させる。

2024年6月現在、以下の5つのプロジェクトが活動している。

- A. 自然環境保全プロジェクト：野火止用水や雑木林の自然環境保全活動、樹木剪定、プレート管理、クリーン活動他
- B: 子どもの自然体験プロジェクト：雑木林や児童センターにおける工作、遊び、地域の野菜等を生かした料理等の自然体験活動
- C: 研修プロジェクト：川や雑木林等、環境保全活動地域の見学、野火止用水に関わる研修など

- D:ホタル再生プロジェクト：ホタルの幼虫の育成・放流と環境保全を通して、野火止用水におけるホタルの再生指す
- E:黒目川体験プロジェクト：こどものための黒目川における川探検、魚とり、水質検査、水生生物の観察など

このうち、「D:ホタル再生プロジェクト」においては 2018 年から野火止用水における幼虫放流事業を開始し、2023 年には西分地区における自生がほぼ確実な状況とされ（星野他、2023）、2024 年にはより広い範囲において自生が確認された。5 月にはホタル鑑賞を楽しむたくさんの市民の姿が見られた。

本論文は「HUG ネット」の根幹ともいえる 10 年間にわたる野火止用水環境保全活動、特に樹木保全に関わる活動の成果と課題を明らかにすることを目的としている。

2．野火止用水環境保全活動の経緯

表 1 は「ふるさとの緑との野火止用水を育む会」(HUG ネット) のプロジェクトと所属団体（2024 年 6 月 30 日現在）を示している

表 1 「ふるさとの緑との野火止用水を育む会」 プロジェクトと所属団体

	加 入 団 体	A 環 境 保 全	B 自 然 と も の 体 験	C 研 修	D ホ タル 再 生	E 黒 目 川 活 動
1	川爺	○			○	○
2	野火止用水美化ピカ隊	○				
3	環境保全協力員の会	○				
4	新座市グリーン サポーター	○	○			
5	雑木の会	○				
6	野火止ホタルの里を作る会				○	
7	畑中ホタル愛好会				○	
8	チーム・キャロット		○	○		
9	新座市観光ボランティアガイド協会		○	○		
10	サンアール10	○			○	
11	西分町内会				○	
12	新堀一丁目町内会	○		○		
13	新座稲門会	○				
14	特定非営利活動法人 オハナプロジェクト		○			
15	野火止緑道環境保全ボランティア あかねこくらぶ	○				

出典：著者作成

「A. 自然環境保全プロジェクト」に直接関わっている団体は9団体である。「川爺」と「野火止用水美化・ピカ隊」は定期的に野火止用水の清掃・美化活動等を実施している。森林インストラクターの資格を持つ、プロジェクトリーダーの島田副会長は「雑木の会」所属で、植生調査やクリーン化活動における方針を決定し、活動を指揮している。「HUG ネットクリーンデー」では、ほぼすべての団体が参加している。

表2「HUG ネット」による野火止用水環境保全活動の経緯①

年	月	活動テーマ	内容
2015	11	リーフレット作成	「HUG ネット」リーフレット作成
	11	樹木プレートの設置	野火止用水沿いの植生調査に基づいて22種類、計32枚の樹木プレートを設置
2016	2	環境資料作成	『森の四季だより』（「雑木の会」執筆、監修）を冊子としてまとめ新座市内の小学校に配布
	8	環境保全活動	アジサイの剪定
	10	樹木マップ作成	植生調査の結果をまとめ、『野火止用水樹木マップ』リーフレットを作成
	11	樹木プレートの設置	野火止用水沿いの植生調査に基づいて28枚のプレートを追加（紛失のための補填2枚含む）
2017	2	野火止用水ガイド	『野火止用水樹木マップ』に基づいて、十文字学園女子大学 横須賀 薫学長（当時）に野火止用水を案内 ⇒ 朗読詩『野火止用水の水と緑と』（作詞 横須賀 薫）が誕生
	8	環境保全活動	アジサイその他の常緑樹の剪定
	11	樹木プレートの設置	野火止用水沿いの植生調査に基づいて10枚のプレートを追加
2018	8	環境保全活動	アジサイその他の常緑樹の剪定
	10	樹木マップ（改訂版）作成	現状の植生調査の結果に基づき、『野火止用水樹木マップ（改訂版）』リーフレットを作成
	12	野火止用水クリーンデー	東京都等との連携に基づき、都内の6自治体の活動と連動して実施
2019	8	環境保全活動	アジサイその他の常緑樹の剪定
2020	8	環境保全活動	アジサイその他の常緑樹の剪定
	11	野火止用水視察①	清瀬駅から玉川上水駅まで、野火止用水、小川用水の実態について視察、散策
	11	野火止用水視察②	武蔵砂川駅から、羽村取水口まで、野火止用水の源流である玉川上水の実態について視察、散策

出典：著者作成

表3 「HUGネット」による野火止用水環境保全活動の経緯②

年	月	活動テーマ	内容
2021	8	環境保全活動	伊豆殿橋～西分橋の緑道環境の整備
	10	HUGネットクリーンデー	野火止用水清掃とアジサイ・アオキ、シラカシ等常緑樹幼木の剪定、埼玉県プラごみゼロウィークを同時開催
2022	10	HUGネットクリーンデー	野火止用水清掃とアジサイ・常緑樹剪定、埼玉県プラごみゼロウィークを同時開催
	11	野火止用水プラごみ回収作業	埼玉県プラごみゼロウィークの一環として川爺主体で山下通り橋から金木犀までの清掃
	10	美化・ピカ隊クリーンデー	東京都内野火止用水6市共同クリーンデーへの参加 山下橋から伊豆殿橋まで美化・ピカ隊による清掃活動
2023	5	野火止用水植生調査① (プレート調査)	野火止公園から本多緑道まで樹木マップと実態の違いを調査
	9	野火止用水植生調査② (プレート調査)	野火止公園から本多緑道まで樹木マップと実態の違いを調査 プレート補填計画
	10	HUGネットクリーンデー	野火止用水清掃とアジサイ・常緑樹剪定、埼玉県プラごみゼロウィークを同時開催

出典：著者作成

表2および表3は2015年から2023年までの「HUGネット」による野火止用水環境保全活動の経緯を示している。「HUGネット」を設立した2015年の最大の成果が野火止用水沿いの樹木の植生調査、ならびに樹木プレートの設置であった。樹木プレートを設置するために、野火止公園から本多緑道まで、綿密な植生調整を実施して、プレートを設置する樹木を決定した。

その後植生調査の結果を樹木マップとして記録し、広く知っていただくとともに、野火止用水の環境保全に一人でも多くの方に興味を持っていただきたいという想いから、2016年には樹木マップを作成した。用水沿いの樹木は様々な事情により変化していることから、2018年には樹木マップ(改訂版)を作成した。

樹木プレートについては、2015年度から2017年度にかけて設置、補填等を行っていたが、新型コロナウイルスの影響で活動が停止して以来、2023年度に6年ぶりに改めて植生調整に基づいてプレートの補填等を行った。

3. 植生調査と樹木マップの作成

表2で示したように、2015年から2017年の3年間に、野火止用水沿いの樹木の植生調査を継続的に行い、計70枚の樹木プレートを設置した。このうち、カナメモチ、サワラ、ケヤキ、シラカシ各1枚については、紛失や樹木の伐採などにより、「野火止用水樹木マップ(第2版)」(2018)作成前の最終的な植生調査の結果には含まれていない。マップには、441本53種の樹木が掲載されており、プレートを設置した66本の樹木についても明記している。

表4は、2015年の植生調査に基づいて作成した樹木プレートの種類と枚数を示している。プレートに掲載する説明文については、18種類を業者が提供している標準文を用い、6種類については「HUGネット」によるオリジナルを用いた。オリジナル説明文は以下の通りである。

表4 野火止用水沿いの植生調査に基づく樹木プレートリスト（2015）

NO.	プレート名	説明文	枚数
1	コナラ	オリジナル	2
2	シラカシ	標準	3
3	エゴノキ	標準	3
4	クヌギ	オリジナル	3
5	ミズキ	標準	2
6	ニワトコ	標準	1
7	イロハモミジ	オリジナル	1
8	ムクノキ	標準	1
9	ニガキ	標準	1
10	キンモクセイ	標準	1
11	トウネズキモチ	標準	1
12	ホオノキ	標準	1
13	ケヤキ	標準	1
14	クサギ	標準	1
15	ヤマザクラ	標準	1
16	トウジュロ	標準	1
17	クワ	標準	1
18	マユミ	標準	1
19	イヌシデ	標準	1
20	コブシ	オリジナル	1
21	ソメイヨシノ	標準	1
22	ハンノキ	オリジナル	1
23	ナツグミ	オリジナル	1
24	ムラサキシキブ	標準	1
	枚数	計	32
	説明文種類 (計24)	標準	18
		オリジナル	6

出典：「HUGネット」の調査に基づき著者作成

【ナツグミ】夏茱萸。野山に自生する落葉低木。ときにはこの様な高木になります。初夏に赤い実をたくさんつけ食べられます。「グミ」の名は茎の棘の意である「グイ」と「実」の略。



野火止用水に樹木マップ

新都市の野火用水池にある木々の種類を記した樹木マップを、よるこ
との緑野火止用木を育む会（佐藤弘信会長）が作成。市内に干渉を密
閉した、武蔵野の常緑林を今に伝えず貴重で自然の恵みを残す市に干渉を密
閉してしまっている。樹木に頼んでもらうと作った。並木樹市長は、教
育や環境など、いろいろな場面で活用したい」と、感謝の言葉を述べた。

新座の「育む会」、市に1000部を寄贈

「育む会」はこれまで、市民の憩いの場となっている野火用水池の野火止緑道と本を緑道の約3.5で、56本の木に緑道や特徴を記したプレートを取り付けた。子ども向けの自然体学習や、樹木の特定作業なども行ってきた。

マップはA4判のものが1冊ずつ、33冊44本の樹木の位置や種類などを紹介。プレート設置の進行状況を調査に加え、データを集約し、来年度からコナラや雑木林由来の水はけに、ニガキなどの珍しい木もあるとい

ケヤキ・珍種のニガキ……53種紹介

「育む会」のメンバーから樹木マップを寄贈する並木樹市長（右から2人目）。市側が寄贈した。市側が寄贈した。

「育む会」はこれまで、市民の憩いの場となっている野火用水池の野火止緑道と本を緑道の約3.5で、56本の木に緑道や特徴を記したプレートを取り付けた。子ども向けの自然体学習や、樹木の特定作業なども行ってきた。

マップはA4判のものが1冊ずつ、33冊44本の樹木の位置や種類などを紹介。プレート設置の進行状況を調査に加え、データを集約し、来年度からコナラや雑木林由来の水はけに、ニガキなどの珍しい木もあるとい

市は樹木マップを各会館などに提供して、利用してもらいたい」と、（佐藤）

表 5 野火止用水沿いの植生調査に基づく樹木プレートリスト (2016, 2017)

HUGネットプロジェクトAチーム HUGネットプロジェクトAチーム

2016年(計 28枚)

NO.	樹木名	枚数	NO.	樹木名	枚数
1	アカシデ	1	13	サルスベリ	1
2	アカメガシワ	1	14	シラカシ	1
3	イヌザクラ	1	15	ソメイヨシノ	1
4	ウメモドキ	1	16	チャノキ	1
5	ウワミズザクラ	1	17	ニワトコ	2
6	エゴノキ	1	18	ヌルデ	1
7	エノキ	2	19	ハンノキ	1
8	カナメモチ	1	20	ボタンクサギ	1
9	クスノキ	1	21	ムラサキシキブ	1
10	ケヤキ※	3	22	ヤツデ	1
11	コナラ	1	23	ヤブツバキ	1
12	コブシ	1	24	ヤマザクラ	1

2017年(計 10枚)

NO.	樹木名	枚数	NO.	樹木名	枚数
1	コナラ	1	6	ハンノキ	1
2	クヌギ	1	7	ヤマザクラ	1
3	クサギ	1	8	シラカシ	1
4	ムクノキ	1	9	イヌシデ	1
5	サワラ	1	10	ミズキ	1

※ケヤキ1枚については紛失のため再設置

出典:「HUGネット」の調査に基づき著者作成

図1は『樹木マップ(第2版)』(抜粋)を示している。本マップには野火止用水沿いの樹木53種、約400本の名称、位置が記載されている。図1は西分橋付近から伊豆殿橋までの区間であり、黄色で示されているのが樹木プレートを設置した樹木である。野火止公園から本多緑道までの全区間において66枚のプレートを設置した。

樹木マップにおいて、D地点の「キンモクセイ」は、車道と交差する地点にあり、特に近隣住民には親しまれている木であったが、台風の影響で2018年に新座市により伐採されてしまった。その後、残された切り株から「ひこばえ」が生えていることがわかり「HUGネット」として保護育成を続けている。2022年には、萌芽した9本の枝のうち、必要な3本を残し6本を剪定した。

また、伊豆殿橋付近(E地点)の「ケヤキ」は朗読詩『野火止用水の水と緑と』(作詞 横須賀薫)にうたわれており、特に「HUGネット」メンバーにとっては大切な樹木であったが、道路の区画整備のために2020年11月に伐採されてしまった。



出典：ふるさとの緑と野火止用水を育む会（2018）

図1 野火止用水樹木マップ（西分橋付近から伊豆殿橋区間）

4. 2023年度の植生調査と樹木プレート補填事業

2023年度には、6年ぶりに樹木プレートの補填を行うことになり、2023年5月にプレートを設置した樹木を中心に植生調査を行い、10月の再調査を経て、2024年3月にプレートの補填を行った。表6は、植生調査の結果を示している。野火止公園から本多緑道まで、樹木マップに合わせて3区間に区切って調査を行い、地図上のプレートの樹木の状況について確認した結果、新たに発注が必要はプレートが7点（うち2点は新設）となった。2020年に伐採された伊豆殿橋のケヤキについては、近くにあったケヤキを「2代目」と位置づけ、新たにプレートを設置することにした。



キンモクセイのひこばえの様子
(2020年12月)



2代目「伊豆殿橋のケヤキ」



「ヤマザクラ」を「イヌザクラ」に修正

表 6 樹木マップとの比較による野火止用水沿いの植生調査結果（2023）

野火止公園 山下橋	地図上のプレート数（11）異常なし（10）異常あり（1）			
	異常有り		1 現状プレート	追加プレート
	1 ニワトコ	株の伐採	プレート無し	○
	ヤマザクラ	新設		保管プレート利用
山下橋 キンモクセイ	地図上のプレート数（22）異常なし（14）異常あり（8）			
	1 ヌルデ	移動	移動済み	移動済
	2 ウメモドキ	枯死	プレート保管	
	3 ムクノキ	脱落	プレート保管	取り付け
	4 ウワミズザク	伐採	プレート無し	○
	5 ミズキ	伐採	プレート無し	
	6 ヤツデ	伐採	移動が可能	移動
	7 チャノキ	脱落	プレート無し	○
	8 キンモクセイ	伐採後に萌芽	プレート無し	○
キンモクセイ 伊豆殿橋	地図上のプレート数（11）異常なし（5）異常あり（6）			
	1 ニガキ	脱落	プレート保管	取り付け
	2 ボタンクサギ	伐採	プレート保管	削除
	3 ヤマザクラ	伐採	プレート無し	削除
	4 ヤマザクラ	イヌザクラに変更	プレート交換	○
	5 エゴノキ	立枯れ	移動可	移動
	6 ケヤキ	伐採	プレート保管	
本多緑道	地図上のプレート数（22）異常なし（17）異常あり（5）			
	1 ミズキ	除伐	プレート無し	
	2 ナツグミ	倒木除去	プレート無し	
	3 マユミ	脱落	プレート保管	取り付け
	4 ハンノキ	除伐	プレート無し	
	5 コナラ	除伐	プレート無し	

出典：「HUGネット」の調査に基づき著者作成

5. まとめ

「HUGネット」は10年間にわたり、野火止用水環境保全を目的として、環境美化活動やホテルの再生など、幅広い活動を展開してきた。植生調査や樹木マップの作成、また、樹木プレートの設置などを通して得られた成果は以下の4点にまとめることができる。

- ①植生調査を行い、樹木マップを作成したことで、新座市の野火止用水沿い（野火止公園から本多緑道まで）の樹木環境の現状が明らかとなった。樹木の中には、ケヤキやシラカシのような屋敷林由来の樹木、コナラやクヌギのような雑木林由来の樹木のほか、ニガキのような珍しい樹木もあることがわかった。
- ②2015年に樹木プレートを設置し、その後補填、管理等を継続することで、結果的に用水沿いの樹木の状況を継続的に観察し、その結果を保全活動に生かすことができた。例えば「キンモクセイ」の伐採に対しても、その後のひこばえの育成につなげることができた。
- ③樹木プレートの設置により、地域住民の方に野火止用水沿いの樹木に親しんでいただき、環境保全に対する意識の向上につなげることができた。
- ④継続的な植生調査により美化活動の必要性やホタル再生のための環境づくりに対するエビデンスを得ることができた。例えばホタルの上陸には草むらが必要となるが、行政による草刈りの時期をずらしてもらうなど、野火止用水の状況を観察しながらさまざまな働きかけにつながっている。

近年、野火止用水沿いの環境は、良好とはいえない状況が続いている。樹木や草木の手入れが追いつかず、用水を覆ってしまい、日光が十分に入らないことから、水生生物も減少傾向にあり、それらを餌としている野鳥の減少している。「HUG ネット」だけの力では対応しきれない状況の中、地域住民や行政を動かす方策が求められている。

<参考・引用文献>

- 星野敦子（2015） 大学と行政の連携による地域人材育成制度の評価、地域活性学会 第7回研究大会年会論文集. 2015, p219-222.
- 星野敦子（2016） 新座市における大学との協働による人材育成― 地域に貢献する人材を育てる―、産学官連携ジャーナル Vol. 12 No. 2, pp20-22
- 星野敦子（2017） 新座市における人材育成のための生涯学習制度と地域ボランティアの展開、十文字学園女子大学紀要 Vol148, p255-267
- 星野敦子（2019） 地域環境を生かした子どものための自然体験活動の実践と評価、十文字学園女子大学地域志向教育研究プロジェクト研究成果論文集、pp135-144
- 星野敦子、星野祐子、名塚清、佐藤弘信、星野敦子（2020） 地域人材育成と地域環境保全を目指したネットワークの構築、地域連携共同研究所年報 第5号、pp39-48
- 星野敦子、工藤 一、永瀬 巖（2023） 野火止用水におけるホタル再生プロジェクト―HUG ネットによる6年間の取り組みの成果―、地域連携共同研究所年報 第8号、pp19-28
- ふるさとの緑と野火止用水を育む会（2018）『HUG ネット樹木マップ』（第2版）

世界の文化に視野を広げる実践的な学習活動 —コンサート「民話と音楽で世界旅行」の企画制作とキャリア教育—

Practical Learning Activities to Broaden one's Perspective on World Cultures
From Planning and Production of Concert "World Travel with Folktales and Music"
to Career Education

久保田 葉子 ¹⁾ Yoko KUBOTA	狩野 浩二 ¹⁾ Koji KARINO	棚谷 祐一 ²⁾ Yuichi TANAYA	川瀬 基寛 ²⁾ Motohiro KAWASE
細谷 忠司 ¹⁾ Tadashi HOSOYA	石川 敬史 ³⁾ Takashi ISHIKAWA	久保 裕子 ⁴⁾ Yuko KUBO	

- 1) 十文字学園女子大学・児童教育学科 2) 同・社会情報デザイン学科 3) 同・文芸文化学科
4) 同・学生支援課

キーワード：世界の民話 音楽教育 教科横断型学習 ICT の活用 キャリア教育

要旨：本研究では、教職を目指す大学生が世界7カ国の民話と音楽を公共図書館・公共ホールにおいてコンサート形式で発表した。この取り組みを通して学生は、各国の言語や文化に視野を広げ、将来、教員になった際に学級経営や各教科の指導に応用できる、情報を収集して分析する力・表現力・協働して企画を構想する力を身につけた。複数の学科の学生が専門分野の知識を生かして参加した公演・動画作品・展示・チラシの制作過程と成果は、実践的な学習活動がキャリア教育としても有効であることを示している。児童教育学科の学生は企画制作と発表を通して地域連携による教育方法、ICTの活用、多様な児童との関係の築き方について具体的な考えを持つようになった。文芸文化学科の学生は図書館における展示企画を通して選書の仕方や伝える技術を、社会情報学科の学生はチラシ制作を通して企画意図を伝えるデザインについて学ぶことができた。教科や専門の枠を越えた地域連携によるプロジェクト型学習は、学生の専門性を高めるためにも有効である。

1 はじめに

本学と公益財団法人和光市文化振興公社は、平成28年に締結した相互協力協定に基づき、地域連携による教育プログラムを展開している。研究テーマは、児童教育学科の学生が将来教員になった際に授業等に応用でき、音楽を通して主体的に自らの考えを表現できるように選択されている。これまでに、「即興」（令和2年度）、「手づくり楽器によるアンサンブル」（令和3年度）、「音楽科のICT教材制作と活用」（令和2年度）に取り組み、地域の小学校や公共ホールで児童と交流しながら学生が企画制作の知識を身につけ、表現活動の実際について学んできた。令和5年度には「民話と音楽」をテーマに、世界7カ国の文化について調べ、小学校における読み聞かせと、公共図書館及び公共ホールにおけるコンサートの形で発表した。教科横断的に世界の文化に親しみ、その魅力を伝えるにあたり、実技指導や会場の特長に合った進行を可能にするための助言等、学内外の多くの人から協力を得た。本企画では児童教育学科の学生が企画制作・朗読・演奏を、社会情報学科の学生が公演チラシのデザインを、文芸文化学科の学生が関連図書の展示を、児童教育学科及び心理学科の学生がスタッフとして公演当日の受付・誘導を経験した。各専門分野のキャリア教育の側面にも注目し、探究的な学習を通して世界の文化に視野を広げる教育活動と、地域連携の在り方について述べる。

2 研究目的と方法

小学校をはじめ教育現場では一人一台端末を持ち、ICTを活用した学習ができる環境が整いつつ

ある。情報を収集し、離れた場所の人と交流することは難しいことではなくなった。一方で、本を読まない児童生徒の増加が報じられている¹⁾。本プロジェクトに参加した教職を目指す学生は、小学生の頃より図書館に通い、本を読むことを好み、読書を通して知的好奇心を高めてきた。彼女たちは次世代に語り継ぎたい民話・物語について深く学び、その魅力を伝えられる教師になりたいという希望を持っていた。さらに、学生が教職に就いた際には、外国籍の児童やその家族と共に学ぶことが考えられる。得意なことや関心のあることを手掛かりに学生がさまざまな国の文化に総合的に触れれば、相互理解を深める授業へのアイディアを得られると考えられる。

本研究では、「民話と音楽で世界旅行！～みんなで楽しむ七色の文化～」と題して、7か国（ブラジル、アルゼンチン、ドイツ、ウクライナ、ポルトガル、ベルギー、ブルガリア）の民話と音楽を選び、小学校、公共図書館、公共ホールにおける成果発表と企画制作の実践を通して、教科横断型の学習・教育方法の有効性を検証することを目的とする。民話は、矢崎源九郎編『子どもに聞かせる世界の民話』（実業之日本社、1964年）を基に発表し、朗読や動画公開にあたり著作権利用許諾を得て活動した。動画を含む研究成果の公開にあたり、個人情報取り扱いについて参加学生より許可を得ている。

ふるさと新座館における収録と動画編集、小学校における読み聞かせ、和光市図書館におけるコンサートと関連図書の展示、和光市民文化センターサンアゼリア小ホールにおけるコンサート開催を実現するために、以下のスケジュールで協働主催者との打ち合わせや、実技の特別講座等を実施した。

《主なスケジュール》

2023年4月	文献調査・楽譜収集開始、民話・曲目の検討、企画書作成・練習開始
2023年5月	新座市立野火止小学校にて読み聞かせの見学・参加応募 和光市図書館にて読み聞かせのイベントを見学 新座市教育委員会、和光市図書館との打ち合わせ 石川敬史教授による特別講座「公立図書館と連携した教育活動について」
2023年6月	公益財団法人和光市文化振興公社との打ち合わせ 棚谷祐一教授による特別講座「少人数アンサンブルにおける楽器の選択について」 久保裕子氏による特別授業「イメージ豊かに読み聞かせをするために」 アンサンブルのアレンジ、外国語の発音確認、使用する楽譜の選択
2023年7月	ふるさと新座館舞台技師との打ち合わせ
2023年7月～12月	学内にて民話の収録
2023年9月	吉岡理菜氏によるスネア特別講座（打楽器の調律含む） 北澤幸氏によるヴォイストレーニング特別講座 合唱を含む作品のリハーサル（動画作品に出演した協力者と共に）
2023年10月6日及び10月7日	ふるさと新座館ホールにて音楽の収録
2023年10月	川瀬基寛教授によるPremiere Pro 初期設定と編集指導 動画のサムネイル作成、編集開始
2023年11月10日及び12月8日	新座市立野火止小学校にて読み聞かせ
2023年11月	和光市図書館会場下見、音漏れ状況の確認、打ち合わせ 和光市図書館企画のチラシ・デザイン（久保田ゼミ）と印刷、宣伝開始 石川ゼミ・久保田ゼミの学生による企画イメージの共有と打ち合わせ
2023年12月	民話と音楽の動画7本を公開 和光市民文化センター公演のチラシ・デザイン（川瀬ゼミ）と印刷 公演パンフレットのデザイン（児童教育学科3年生）
2024年1月	コンサートの宣伝開始、各国の料理について調査、公演の進行及びMCの検討
2024年2月4日	和光市図書館にて「民話と音楽で世界旅行！～図書館から広がる知の冒険～」

開催。公演前後1か月間、文芸文化学科石川ゼミの学生による関連図書の展示
2024年2月～3月 小城正重氏による朗読指導（計2回）
2024年3月 吉岡理菜氏によるスネア指導「アンサンブルに溶け込むスネアの奏法について」
和光市民文化センター舞台技師との打ち合わせ
2024年3月27日 和光市民文化センター サンアゼリア小ホールにて「民話と音楽で世界旅行！～
みんなで楽しむ七色の文化～」開催

《コンサートのプログラム》

オープニング「Arsenal」

民話「カメのこうらはひびだらけ」、音楽「Atirei o Pau no Gato（猫に棒を投げた）」（ブラジル）

民話「はちみつの好きなキツネ」、音楽「花はどこへ行った」（ウクライナ）

民話「グレーテルとインガ」、音楽「Ich bin ein Musikante（私は音楽家）」（ドイツ）

民話「王子さまの耳は、ロバの耳」、音楽「ソナタ イ長調（C. セイシャス作曲）」（ポルトガル）

民話「四人の子ども」、音楽「El Humahuaqueño（花祭り）」（アルゼンチン）

民話「魔法の笛」、音楽「冬の歌」（ブルガリア）

民話「ブラッセルの音楽隊」、音楽「Panis Angelicus（天使の糧）」（ベルギー）



和光市民文化センター サンアゼリア
イベント案内 2024年1・2・3月号



学生が制作したコンサートのパンフレット挿絵。
民話に登場する動物や、各国の民族衣装を着た
人物が色彩豊かに描かれている。



2024年3月27日に開催されたコンサートの
ライブ映像（大学ホームページより）

民話は、児童に紹介することを前提としていたため、学生の提案により残酷な内容は避け、7つの民話に変化がつくように選択された。朗読を発表するにあたり、来場者も声を出して参加できるよう工夫し（「王子さまの耳は、ロバの耳」）、動物の声を楽器で表現する（「ブラッセルの音楽隊」）など、参加者が物語をイメージできるよう演出も工夫した。朗読については久保氏、小城氏より指導を受けた。学生は練習を重ねる度に上達し、登場人物の置かれた状況や心情の変化を想像しながら読み分けることができるようになっていった。

音楽は、民話のルーツと同じ国の作品を選んだ。子どものかけあい歌（「Atirei o Pau no Gato（猫に棒を投げた）」）、外国語のオノマトペを楽しむ民謡（「Ich bin ein Musikante（私は音楽家）」）、ピアノ独奏、器楽アンサンブルと、編成もジャンルも多彩な内容となった。学生の希望により、原語で歌うことで外国語の響きにも親しめるようにした。選曲にあたりポルトガルの民謡ファドやブルガリアの合唱を視聴してさまざまな発声法や響きに触れたり、音源資料が添付された辞典を用いて楽器について調べたりする中で、一つの国の中でもエリアによって民謡の特徴に違いがあることを学んだ。アンサンブルについてはプロジェクト全体の指導者である久保田（ピアノ伴奏、歌）、棚

谷教授（バスドラム、ウクレレ）と細谷教授（ケーナ）が加わることで重層的な響きにすることができた（6章参照）。今回のコンサートを機に学生が初めて挑戦したスネアドラムは、プロの奏者である吉岡氏より2回の指導を受けた。楽器の扱い方、身体コントロール、リズムの基礎練習、旋律楽器との一体感を生む音の聴き方等、スネアについての知識を得るだけでなく、リトミックを用いたソルフェージュ力の強化がなされ、音楽の指導法の観点からも教職を目指す学生にとって参考になる内容であった。

民話・言語・音楽から始まった本企画だが、次第に地理・気候・食文化・歴史・風習へと参加者の視野が広がっていった。書籍や動画から得た情報を共有しながら分担して調べ学習をしたり現地を詳しく知る人にインタビューをしたりと、学生の持ち前の勤勉さもあり探究的な学習が常に展開された。

動画編集においては、川瀬教授より編集ソフトウェアの操作を学んだ後すぐに実践に移り、必要に応じて技術的な課題を解決しながら動画を完成させた。動画作品が完成する前の段階においても、ICTを活用することにより授業外学習が活性化し、自分たちの取り組みを客観的に振り返る素材となる音源や映像は音響バランス等の検討にも役立った。

次に、和光市図書館にてコンサートの内容に関連する図書の選書・展示を指導した文芸文化学科の石川教授が、公立図書館と連携した大学生の学びについて述べる。（以上、久保田葉子）

3 「ひとハコ図書館」の企画

和光市図書館で開催される「民話と音楽で世界旅行」の広報に留まらず、同イベントで取り上げられる「民話」や「音楽」、さらには各国の文化に対する気づきや学びにつながる資料案内、図書館所蔵資料へのさらなる付加価値を演出することを目的に、文芸文化学科石川ゼミでは和光市図書館の協力をいただきながら、「ひとハコ図書館」を企画した。

3.1 「ひとハコ図書館」

「ひとハコ図書館」とは、「小さな木枠1個（一箱）」を一つの「図書館」とし、一箱毎に担当者（館長）を割り当て、テーマに沿った図書を選書・展示し、利用者と図書館資料を結びつける活動²⁾である。和光市図書館では「みんなのひとハコ図書館」として次のように紹介され³⁾、2020年3月から開始し、2024年4月現在において第16回をむかえている。

小さな箱を小さな図書館に見立てて、市内で活躍する人やグループが「館長」になって、おすすめの本や、活動情報を紹介する展示スペースです。「ひと（人）」と「ハコ（図書館）」をつなぐ場、また、「一箱（ひとはこ）」で展示することから、「ひとハコ図書館」と名前をつけました。この「ひとハコ図書館」の館長には、だれでもなることができます。館長になって、自分のおすすめの本を紹介し、みんなで本のバトンをつないでいきましょう。

本学司書課程においても選択科目「書籍空間論」において同様の実践を積み重ねてきた。近年は同様の取り組みであるシェア本棚を企画する本屋が広がっている。

3.2 設営までの道のり

文芸文化学科石川ゼミでは、第14回（展示期間：2024年1月11日～2月11日まで）の「みんなのひとハコ図書館」として、和光市図書館の本館に展示させていただいた。石川ゼミでは3年生が中心となり2月上旬開催のイベントを射程に入れ、以下の予定で「ひとハコ図書館」の企画・展示の準備を進めた。

- ①11月22日 久保田ゼミと合同ゼミ。イベントの目的や内容の共有。
- ②12月6日 テーマに関してOPACによる検索、選書、資料調査
- ③12月13日 和光市図書館本館にて選書、図書の貸出、展示位置の確認
- ④1月10日 「ひとハコ図書館」の設営（3箱）・展示

①実際にイベントで朗読されるアルゼンチン「四人の子ども」、ブルガリア「魔法の笛」、ベルギー「ブラッセルの音楽隊」の作品と、演奏する各国の音楽について学生間で共有し、選書や展示に関わる方向性やイメージを確認することができた。

②幅広い主題の資料を調査することを視野に入れ、検索キーワードの検討や上位概念を対象とする資料へのアプローチを行うとともに、図書のみならず、絵本や図鑑、視聴覚資料などの選書に留意した。資料調査の過程で、「ひとハコ図書館」に展示する蔵書群・配列についても視野に入れて検討した。

③OPACによる資料調査に留まらず、実際に館内の書架をブラウジングすることによって、各国資料や周辺領域の資料の発見に結びつけることができた。加えて、目次や索引から掲載ページの確認を行うなど、きめ細かい選書を心掛けることができた。

④アルゼンチン：濃い赤、ブルガリア：濃い青、ベルギー：オレンジというテーマカラーを踏まえ、事前に制作したPOPや国旗、案内などを設営した。「一箱」に収まる少ない資料であるが、その配列、展示位置、利用者の目線などに留意した。

3.3 「ひとハコ図書館」づくりの学び

石川ゼミでの展示について、和光市図書館の皆様には数々のご支援をいただいた。展示の位置やさまざまな図書の紹介、団体貸出の手続き方法などである。1月10日に「ひとハコ図書館」を設営していると、来館した市民の方々からお声がけいただいたり、展示図書を眺めたり……その後、「ひとハコ図書館」から多くの貸出があったとご報告があった。

「ひとハコ図書館」とは、企画・設営する者（館長）の思いや意志が資料を媒介に表現されていく場であると同時に、学生との準備や設営の過程で「ひとハコ図書館」を取り巻くさまざまな人々との会話、コミュニケーション、つながりの形成に寄与していくことに改めて再確認することができた。「ひとハコ図書館」づくりを通して、互いの学びの可能性を秘めているといえよう。（石川敬史）



写真）左より、アルゼンチン、ブルガリア、ベルギーの関連図書の展示

4 公演の企画制作及び出演をした児童教育学科の学生の振り返りから

《小学校、図書館、ホールでの発表を通して考えたこと》

- ・小学校の読み聞かせは、人前で朗読を行う初めての機会だったので、聞き手に伝えるように朗読をすることを心がけました。児童に感想を聞いた際に、私には無かった考えが出てきて、物語をさらに深めることができました。
- ・小学校における読み聞かせでは、朗読と範読の違いについて改めて考えました。朗読は登場人物の感情を児童が耳で聞いて感じ取れるほど、感情を込めた読み方をする一方で、範読は登場人物の感情をあらわにしつつも児童が追視できるよう、感情と理性を兼ね備えた読み方をするのだと学びました。
- ・和光市図書館でのコンサートでは、なるべく顔を上げ、観客全員と目を合わせることの大切さを学ぶことができ、今後小学校の教師になった時にも生かせる情報を得ることができました。もっと観客が楽しめるように、私自身が楽しみ、ひとつひとつの朗読、演奏の楽しい部分を見つけてアピールしていくことが大切だと学びました。
- ・和光市図書館企画「民話と音楽で世界旅行！～図書館から広がる知の冒険～」では、これまでに行っていた児童への読み聞かせとは違い、中学生以上の方も参加していて民話に対する意味の理解の仕方や音楽に対する反応の起こり方が全くの別物のように感じました。また、世界地図を後ろに配置することでどのあたりの国なのか安易に想像しやすいため、改めて視覚的な情報と聴覚的な情報が織り交ぜられた教材等はかなり効果的なように考えました。

- ・和光市市民文化センターサンアゼリアでの公演では、リハーサルをきちんと行うことによって本番でいい演奏ができるのだと改めて実感しました。このことは、小学校の教師になってからも生かすことができると思うので、いい経験になりました。観客がとても温かく、参加型のところも全部参加して下さり、本当に感謝でいっぱいです。特に、「王子様の耳はロバの耳」で、一緒に葦笛の役を演じた際に、練習の時とは違う迫力や奥行きを感じ、たくさんの方が加わるとより良い作品になるのだと感動しました。また、最初の方は小さかった声が回数を重ねていくうちに大きくなり、会場の皆さんと一体感を感じることができました。
- ・和光市市民文化センターサンアゼリア公演「民話と音楽で世界旅行！～みんなで楽しむ七色の文化～」では、これまで経験してきた小学校における読み聞かせや和光市図書館企画とは異なり、マイクを通しての発表であったことから小学校の全校集会等の声を出すときの想定にもなり、発声の方法や声量等を考えることにつながりました。また、ホールでの公演だったため、音のバランスや音響など音楽的要素についても学ぶことができました。

《地域連携について》

- ・コンサートはたくさんの方々のお力添えがあり、成功できました。それぞれの得意分野の人に助けを求めより良いものを作ることの楽しさを学ぶことができました。そのためには、日々の努力を見てもらい、助けてあげたい、力になってあげたい、一緒にやってみたいという気持ちを持ってもらうことが大切であり、その人の助言に耳を素直に傾けられることも良い関係を築くために必要なことであると学びました。
- ・今回は、新座市と和光市に協力していただき、動画撮影やコンサートを行うことができました。その時間はとても楽しく、貴重な経験でした。私たちだけでは分からなかったこともアドバイスしていただけて勉強になりました。また、地域のホールは使わないともったいないと改めて思いました。私の地元にも大きなホールがあるのですが、そこではコンサートはもちろん、お笑いライブなど、積極的に活用し、街全体を盛り上げています。このような、地域にあるものを積極的に使っていくことも児童にとっては良い経験になるのではないかと思います。
- ・実技の特別講座では、教師の力で児童の成長の伸びが変わってくることが本当に実感できました。ヴォイストレーニングでは、体の力の抜き方や丹田への力の入れ方、声の飛ばし方、口の形、姿勢など歌う時の基本的な知識を教えてくださいました。特に姿勢は、少し胸を張るだけで声の出しやすさが変わって本番もあまり力むことなく歌うことができました。スネア指導では、最初はできなかったロールも少しずつできるようになり、叩き方も音楽的になりました。いちばん学んだことは、スネアの叩き方で、場所や距離によって音色や音量が変わり、表現することが楽しくなりました。本番でも強弱をつけたり、リズムカルに叩いたり工夫しました。

《自身の気づき・変化について》

- ・コンサートを行う時は、最初とても緊張していましたが、途中からどんどん楽しくなり、実力以上の力を発揮することができました。小学校の先生は前に出る仕事なので、この経験を生かし、人前で話すことが楽しいと思えたらいいと思います。また、私は、いつも周りの人に遠慮してしまい、自分がやりたいことを言い出せず、自分から行動することがあまりできませんでした。そのような自分を変えたくて、ゼミの活動では、率先して自分の意見を言うように心がけました。最初は不安な気持ちもありましたが、ゼミの仲間が私の意見も優しく受け止め、さらに良い案まで出してくれてどんどん良い物になっていきました。この時は、とても嬉しかったです。今後も自分の意見を積極的に伝え、様々な人と良いもの、経験を作っていけたらいいと思います。
- ・自主学習・調べ学習では、七つの国を調べていくうちに国同士の共通点や相違点などがたくさんあり、とても楽しく徐々に主体的に取り組めたと感じました。共通点や相違点を見つけることは、児童や学級の良い点や改善すべき点、指導の際の評価にもつながる部分が多くあると考えました。

- ・一年間を通して「民話と音楽」への取り組みをしたことで、今までは積極的に前に出ることや意見を発することが全くできなかった自分の性格が少しずつ変化したように感じました。少しずつ前に出たり、意見を発したりすることで、今までやりたくてもできなかったことや今まで好きではなかったジャンルに手を出し、好意を持っていくという自分の可能性が広がるものにつながりました。自分の可能性が広がったことから、考え方がほんの少しポジティブに変わり、自分の悪いところだけでなく良いところも探求をしていきました。
- ・一年間を通して「民話と音楽」への取り組みをしたことで、今まで意識してこなかった国際的な問題や国による教育の違いなどに着目し、探究をしました。教育の違いでは、1年生の授業であった学校制度論の中で学んだイギリスやフランス、フィンランドなどに加え、今回行った7つの国の教育に着目して探究していきました。

企画・出演を経験した学生は、児童やコンサートの来場者に物語の情景を想像しながら民話を聴いてもらえるよう工夫し、自分自身が心を開いて他者に意見を伝えたり助言を求めたりすることによってより良い表現が生まれることを経験し、そこに喜びを感じていた。また、ICTを効果的に活用して練習を効率よく進める一方、対面で楽器の奏法や発声法、朗読の指導を受けることにより、体の脱力を意識して声を出しやすくし、楽器の音色の変化を感じ取るなど、将来、児童への指導に生かせる学びを得ていた。さらに、公演準備の過程で意見を述べる機会を多く持ち、舞台上で発表することを通して積極的な自分の一面を発見し、今まで詳しく知らなかった文化との出会いを経験していた。地域のさまざまな専門分野の人と連携した学びの成果であろう。(久保田葉子)

5 公演に参加した教員の立場から

大学で授業をしていると、毎日がんばっている学生たちと出会う。それぞれの夢の実現に向けて取り組んでいる学生とのかかわりはとても楽しいものである。しかし、授業での出会いは週に一度であり、授業内容は次々と代わっていくので、一つの活動に継続してかかわっていくことは難しい。さて、今回の公演であるが、春の打ち合わせから考えると、一年近く一つの活動に参加させてもらったことになる。初めのころは読み聞かせも演奏も漠然とした感じだったが、少しずつ具体的な目標や内容が決まり、リハーサルを通して具体的なイメージができてきたようである。

図書館で行った読み聞かせと演奏はまだ緊張が強く、ドキドキした感じがこちらにも伝わって来た。しかし、3月の公演に向けたリハーサルを繰り返すうちに、少しずつ自信がついてきたようで、話し方も演奏も堂々としてきた。自分たちでやるんだという覚悟のようなものを感じた。本番のオープニングの読み聞かせはこちらが感動して聞き入ってしまった。

教育はともすれば短時間の成果に目が奪われがちであるが、一つのことに向き合い時間をかけて変化していくことも大切なのだと感じる。1年間の学生の成長に感動した1日であった。きっと我々が想像する以上に濃密な時間を過ごしてきたんだろう。努力した日々のことはきっと一生の宝ものになるはずである。

それにしても、学生の成長と比較して、自分の演奏は何と成長のないことだろう。しばし反省の日々である。(細谷忠司)

6 大学生とつくるアンサンブル—head arrangement について

筆者は児童教育学科久保田ゼミが主催するコンサート「民話と音楽で世界旅行」に演奏者・アンサンブル指導における助言者として参加した。今回は head arrangement という手法を用いたので、そのことについて述べたい。

6.1 El Humahuaqueño における head arrangement の試み

本コンサートのリハーサル段階において、「花はどこへ行った」(ウクライナ)では、例年通りピアノ伴奏の編曲を行った一方、「El Humahuaqueño (花祭り)」(アルゼンチン)の編曲においては、楽譜による編曲よりもいわゆる head arrangement (以下、ヘッドアレンジ)の方が生き活きとした

結果を得ることができるのではないかと直感し、この取り組みにおいては初めての口頭による編曲を試してみることとなった。

そもそも「ヘッドアレンジ」とはなにか。通常、編曲者が演奏者に対し、音楽的アイディアを伝達するためには「楽譜」という手段が一般的である。楽譜の有効性は一般に編成が大きくなるほどに高まるとされる。例えばオーケストラの全楽器に対し、各自がどのような音を出し、いかに演奏すべきかを口頭で指示することが、あらゆる角度から見て現実的でないということは容易にご理解いただけると思う。一方で（歴史的経緯は省略するが）、ジャズやロックといったポピュラー音楽のフィールドでは、ミュージシャン間の音楽的コミュニケーションにおいて、楽譜が介在しないケースがむしろ一般的だった。その理由としては、①これらの音楽は口承的な性格が強かったこと②演奏において即興性が重要視されたこと。つまり楽譜による音楽的アイディアの「定着化」と馴染まない③演奏者の自発性が求められたこと④しばしば正規の音楽教育を受けていない演奏者が存在したこと、などがあると筆者は考える。

さて、El Humahuaqueño にヘッドアレンジが適していると感じた理由は原曲がもつ素朴な構造と今回の編成にあった。原曲は哀愁を帯びた力強いメロディと単純なハーモニー構造をもっており、今回の編成は筆者が演奏するウクレレ（アルゼンチンの民族楽器「チャランゴ」の代用として）、細谷教授のケーナ、そして久保田准教授と学生2名による歌と太鼓（フロアタム）というものだった。筆者は即興的にウクレレでコード伴奏をしつつ、太鼓のリズムのイメージを伝え、さらに歌の二人には歌いながら足踏みと手拍子を要求した。曲のエンディングは筆者が簡単なコード進行を提示したのち、ケーナに即興的に加わってもらうことを要求した。

6.2 成果

紙面の都合上、簡単な報告となるが、結果的にヘッドアレンジの試みは大成功といってもいい、自発的で非常に活気のある演奏となった。今後も指導の機会があればこの手法を活かしていきたい。（棚谷祐一）

7 コンセプトを想起できるコンサートのチラシデザインの指導

コンサートのチラシデザインについては、グラフィックデザインを主に学んでいる社会情報デザイン学科の3年生に依頼した。昨年度⁴⁾と同様にコンペ形式として1作品選び採用することとした。結果的には6作品でのコンペとなった。

イベント告知のポスターやチラシのデザインには情報の取捨選択が重要であるが、今回はさらに「7つの国」「世界旅行」という言葉がタイトルにあり、各国の音楽でその国へ旅行した気分や文化に触れた気分になる、というコンセプトがあった。そのため、提供される情報（タイトル・場所・日時・出演者・曲目、公共施設利用に関するルールの明記）だけをデザインの軸にするとコンセプトが見えづらくなる。そこで、情報に対しプライオリティを決めることに加え、いかに「7つの国」と「世界旅行」をイメージするかを指導した。

今回もA4サイズ・縦型のチラシ形態であり、表と裏の2面のフルカラー印刷という設定であるため、「表面：表題とキービジュアルをメイン」「裏面：各種情報」を原則としてデザイン作業を進めた。まずは「7つの国」と「世界旅行」のコンセプトイメージを定着させるため、サブタイトルの「みんなで楽しむ7色の文化」に着目させ、「7色＝7つの国」と解釈してビジュアルに落とし込む作業からスタートさせた。つまり、キービジュアルよりも「7色＝7つの国」のイメージカラーを優先した。なお、「世界旅行」のコンセプトに対し、学生の解釈は様々なため、この部分は自由にデザイン作業をさせた。その結果、「世界旅行＝旅」という文字通りの解釈から「気球」（図1）や「飛行機」（図2）という旅の手段をキービジュアルに選択した学生もいれば、タイトル帯を幅いっぱいまで使い（図3）「広がり＝世界」と解釈した学生もいた。



(図 1)



(図 2)



(図 3)

なお、裏面は出演者・曲目、マップなどの情報の羅列にならないように、エリア・アライメント（領域配列）をデザインの基本とした。結果的にコンペで採用された作品は「7つの国」のイメージを的確にビジュアル化したものであり、かつタイトル帯を幅いっぱいまで使った作品となった。結果的には左右の余白が大きくなり、広がりを感じるデザインとなった。このことから、「形状（ビジュアル含む）」よりも「色彩」がよりはっきりとしている作品が選択される傾向が伺えた。同様な事例も多く、今後の作品制作指導に反映させていきたい。



採用作品（表面）



採用作品（裏面）

なお、デザイン作業に関しては Adobe 社の Illustrator で作成した。使用画像素材は同じく Adobe 社の Photoshop で加工・編集し使用した。PC は Apple 社の MacBook を使用している。印刷に関しては PDF 変換での完全原稿での入稿となるが、印刷所から PDF/X1-a:2001 形式を指定された。この形式は編集方法により画像分割線が入ることがあり、最終調整のことからもデザイン指導している川瀬が担当した。

採用されたデザインは、コンセプトを想起させるデザイン表現として及第点の作品になった。制作者である 3 年生は、この結果からもデザイン理論を概ね習得が進んでいると感じた。（川瀬基寛）

8 地域連携による教育活動の意義

児童教育学科の学生は、日頃から連携市の小学校でインターンシップの機会を得て活動している。大学では各教科の教材や指導法の研究を重ねており、往還的な学びにより目的意識を持って研鑽を積んでいる。本研究に出演者として参加した学生たちもまた、児童一人一人の良さや得意なことに気づき、それを伸ばし、児童と共に成長できる教師を目指している。今回、小学校で児童に朗読を聞いてもらう中で相手が物語の世界を想像するための間が必要であることに気づいたり、静かに本を読みたい人が来館する図書館とコンサートホールではプログラム内容を変えることの必要性に気づいたりした⁵⁾。また、協働主催者の皆様に自分の考えを伝え、助言を得ることができた。学生

が一年間たゆまず研究を続け、表現力だけでなく総合的な企画力を身につけることができたのは、さまざまな専門分野の方による協力と発表の場を得たことが原動力になっている。



「El Humahuaqueño（花祭り）」にスペイン語で挑戦した



朗読の声が表情豊かに客席に届いた



来場者と一緒にかけあい歌を楽しむ様子



スタッフとして参加した学生たちも意欲的に取り組んだ

学生が研究テーマを自ら選択して教科横断的に探究し、さまざまな立場の人と意見交換しながら企画を練り上げ、自分の成長を実感できる学びが本学にはある。学生が教職に就いた際にも、多職種連携により、正解が一つではない学びに果敢に挑戦してくれることを願っている。(久保田葉子)

9 おわりに

世界の民話と音楽に関心を持ち、文献やインタビューなどさまざまな方法を用いてその魅力に迫り、学内にとどまらず地域子どもたちや公共図書館、公共ホールの関係者とも連携して一年間にわたり協働的な学びと表現活動を繰り広げた児童教育学科の学生の探求心を称えたい。社会情報デザイン学科の学生による公演チラシは、コンサートのコンセプトを明確に表現し、出演者を勇気づけた。出演者は文芸文化学科の学生による選書からも示唆を得て、世界の文化をより身近に感じることができた。学科を越えた交流が学生の視野を広げ、自分の意見を持つことにもつながった。

「民話と音楽で世界旅行！～みんなで楽しむ七色の文化～」の動画制作と、コンサートの開催にあたり、新座市教育委員会、ふるさと新座館ホール、新座市立野火止小学校、公益財団法人和光市文化振興公社、和光市民文化センサーサンアゼリアをはじめ協働主催者の皆様、アーティスト・技術者・教育者の皆様より多大な協力を得た。心より御礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 『「本を読むことに興味がない」小中高生の不読率増加 東京都』、教育新聞、2023年4月17日
- 2) 石川敬史ほか「大学図書館における学生協働の意義と課題：十文字学園女子大学ライブラリーサポーターの活動を中心に」『十文字学園女子大学紀要』48(2)、2018年3月、pp. 191-203
- 3) 和光市図書館「「みんなのひとハコ図書館」を展示しています」
https://www.wakolib.jp/oshirase/post_14.html [参照日：2024-04-16]
- 4) 久保田葉子、狩野浩二、棚谷祐一、川瀬基寛、久保裕子、小林愛佳「身体を通して音楽をつかむ実践—学生による初等音楽科のデジタル鑑賞教材制作と対話的な学習活動の探求—」、『地域連携共同研究所年報第8号』、2023年11月、pp. 32-33
- 5) 久保田葉子「民話と音楽による教科横断型学習の研究—地域連携による表現活動と総合的な学習に着目して—」、『児童教育実践研究』17(1)、2024年3月、pp. 27-35

遊びを通した子ども・地域の居場所支援 -「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開-

Play-based Child and Community Support:
Activities and Development of the "Shiawase Ibasho Network"

矢野 景子¹⁾

Keiko YANO

1) 十文字学園女子大学・人間福祉学科

キーワード：子どもの遊び、地域、居場所、子どもの権利保障

要旨：本地域連携プロジェクトは、サービスマーケティングによる学習活動を子どもの権利条約思想及びSDGs 3.0 及びSDGs 4.0 と関連づけ、地域における子どもの権利保障としての場づくりを目指すことを目的とした活動である。地域の子どもの居場所支援活動への学生ボランティアとしての参加及び当該活動に関する継続的な学習活動を通して、学生ボランティア活動経験を対象とするサービスマーケティングのプログラムを開発することを目指している。4期にあたる2023年度は2022年度の活動を継続し、新座栄4丁目「たまりば」におけるフードパントリーと親子支援の場づくり、十文字の森プレーパークの支援に加え、新たに遊びのアウトリーチ活動を実施し、野火止4丁目集会所の「あそびば」へ活動を展開させ、3つを柱として活動を行った。活動の実践事例の検討より、学生間の組織・運営の課題として、年度途中の緩やかな移行体制の工夫により、運営の引継ぎが円滑となった一方、接続・伝承の難しさはあるものの、個々の経験の理解と経験の変換を経験していない学生へ伝達し、新しい経験の理解と変換を生み出していくことにより、個々の経験にとどまらない集団としての省察、具体的経験の集団的意味づけへの価値を見出すためには、参加学生の経験知を集団に共有する仕組みをさらに検討する課題も示唆された。また、新しく活動を発展させた「あそびば」からは、地域における遊びのアウトリーチの需要があることがわかっただけでなく、大人が遊びの原体験を呼び起こし、子どもに戻る経験を通してリラックスして過ごす様子からも、「遊び」が子育てに向かう親をエンパワメントすることにもつながり、それぞれが遊び込むことで、「子どもと親の横並びの関係性」が生まれる可能性が見いだされた。4期の実践の事例検討より、新しいメンバーを迎えながらも1期の学生が設立時に掲げた「ハ(happy:幸せ)、ピ(place:居場所)、ネ(network:つながり)、ス(三単現のS:みんなで創る)」の理念が息づき、4期は「安定・定着の期」となったことが明らかとなった。

I はじめに

1. 活動及び研究の目的と3期までの経緯

本地域連携プロジェクトは、サービスマーケティングによる学習活動を子どもの権利条約思想及びSDGs 3.0 及びSDGs 4.0 と関連づけ、地域における子どもの権利保障としての場づくりを目指すことを目的とし、地域の子どもの居場所支援活動への学生ボランティアとしての参加及び当該活動に関する継続的な学習活動を通して、学生ボランティア活動経験を対象とするサービスマーケティングのプログラムを開発することを目指している。2030アジェンダであるSDGs 3.0 及びSDGs 4.0 の融合として、子どもの権利の観点から乳幼児期の福祉と教育の学習活動をデザインすることは、「地域で学ぶ」「地域を学ぶ」といった地域志向型の教育カリキュラム開発の一部に資するだけでなく、地域への子ども家庭福祉への波及効果に期待できることを実践研究から明らかにしてきた。令和5年度(2023年)は、4期目にあたる。

本プロジェクトの経緯は、学生のサービスマーケティングデザインの機会を通して、卒後に福祉と教育に携わる養成段階の学生の学びの深化を明らかにすることを目的としたことに始まり、2019年度の本学元気プロジェクトの採択研究を発展させ、2020年度に設立した「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開の発展的研究（2期）を経て、3期目は継続的な活動における組織の維持と学年移行と接続の課題をもちつつも、企画・運営を学生が行うことができる組織としての意義を探究することを目的として活動を実施した。地域の子どもの居場所支援活動への学生ボランティアとしての参加及び当該活動に関する継続的な学習活動を通して、学生ボランティア活動経験を対象とするサービスマーケティングのプログラムの開発、実施、評価を試みている。

3期の活動の成果として、「(1) コロナ禍における地域活動として継続性の中で学生を含む地域の交流の場をつくることができたこと (2) 学生主体による運営と企画により、依頼に応える活動ではなく、目的に応じて学生が考え、その場に応じて修正する機会としての経験学習の場となっていること (3) 遊びを通じた多世代交流の場の機会の提供と学生の世代に遊びが伝承されることの意義が見いだされたこと (4) 継続的な活動にみる地域との関係性の変化（学生への信頼と理解によって、学生に任せる機会へ）」¹⁾を見出した。さらに、「学習の場としてのサービスマーケティングの意義にとどまらず、地域における場において、コレクティブ・インパクトの構造を見出し、学生がステークホルダーとしての役割をもつことを明らかにした。さらに、しあわせ居場所ネットワークの運営と個々の主体的な参加が、その重要な要素の一つであること」²⁾から、4期は活動の展開として、新たに遊びのアウトリーチとして、学生たちが移動し、あそびばをつくる活動「あそびば」へ発展した。

2. しあわせ居場所ネットワーク「ハピネス」の組織体制と活動（4期）

人間福祉学科の学生による本活動主体として 2020 年に「しあわせ居場所ネットワーク」を設立した。2021 年度より学生の広報活動が始まり、「ハピネス」の通称をつけた。「ハピネス」とは「ハ（happy: 幸せ）、ピ（place: 居場所）、ネ（network: つながり）、ス（三単現の S: みんなで創る）」の意であり、活動の理念を表している。（本稿では、「ハピネス」と表記する）

本組織の特徴として、運営委員による構成組織がある。世話人、会計、活動リーダー、広報、会員担当の役割分担を担い、教員とメンバーの学生の連絡調整機能をはかるよう組織体制を確立した。広報は、学生が主体的に動画作成および SNS による発信を行い、学内外の活動発信を行っている。年間を通じた組織運営については図 1 に示す。

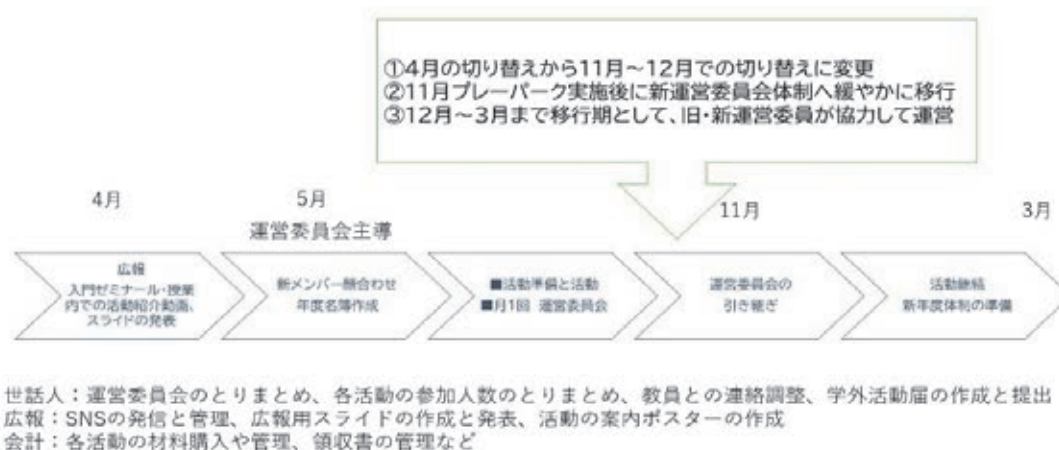
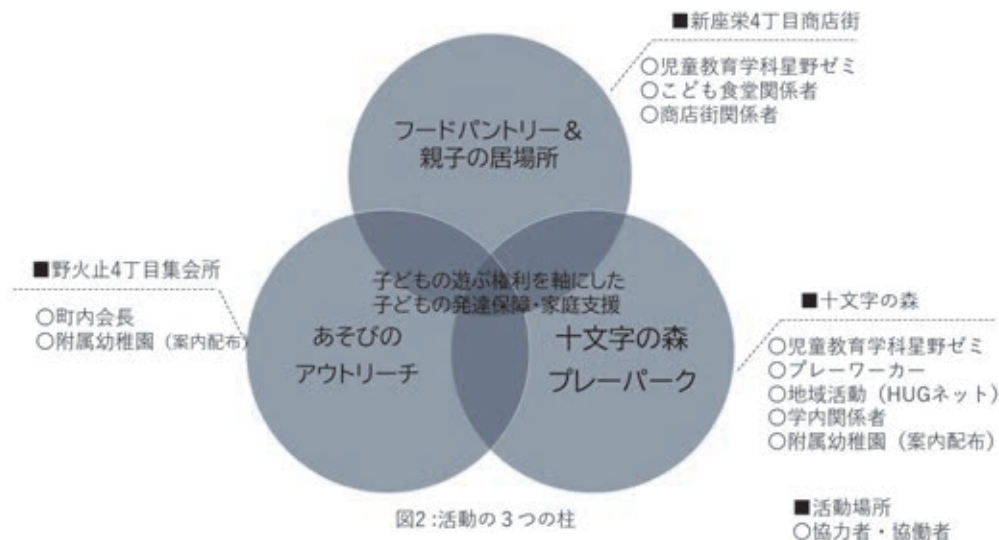


図1：年間の運営と担当フロー

3 期までに課題となっていた組織継続の脆さについては、実習の時期や年間を通した活動の時期を鑑みて 2022 年度に移行時期の変更を試行した。具体的には、年度切り替えの 3 月、4 月ではなく、年度途中の 11 月～3 月に緩やかに新運営委員会体制へ引き継ぐように試みた。さらに、2023 年度も実施したところ、安定的に運営ができるようになったため、年度の途中に運営体制を新体制へと移行することとした。移行のタイミングを暦ではなく、活動の周期と組織の安定の時期にしたことにより、組織が安定的かつ活発である時期にメンバーが主体的に移行を考えることができるようになった。具体的には、11 月には十文字の森プレーパーク第 1 回が実施され、2 回目以降から新運営体制（2 年生が主軸で運営をする組織へ）にて企画・運営を行うように旧運営委員の学生がサポートしながら進めるように修正したことが 4 期の大きな変化である。4 期にあたる 2023 年度はメンバー名簿登録者 35 名であり、2022 年度の活動を継続し、新座栄 4 丁目商店街フリースペース「たまりば」におけるフードパントリーと親子支援の場づくり、十文字の森プレーパークの支援に加え、新たに遊びのアウトリーチ活動を実施し、野火止 4 丁目集会所の「あそびば」へ活動を展開させ、3 つの柱を軸に活動を行った（図 2）。なお、年間計画では、アウトリーチとして、バディウォーク東京 for all における福祉ブースの企画運営を 3 月予定していたが、主催者側の日程変更により、2024 年 4 月 27 日（日）に開催されることとなったため、2024 年度活動報告にて報告する。



また、本活動の特徴として、学生たちの主体的な学びを重視する観点から、勉強会も年間計画に取り入れてきたが、2023 年度は地域のニーズと支援者を理解することを目的に、「こども未来フォーラム」（7 月 16 日）に参加した。



写真 1：勉強会に参加する様子

子どもに携わる支援者とのグループディスカッションや、学生による活動内容の発表を通して、「ハピネス」の活動を振り返る機会となっただけでなく、9月に予定していた野火止集会所4丁目のアウトリーチへの企画の原動力となった。

Ⅱ. 活動の実際と考察

1. 実践報告1「フードパントリーと親子の居場所づくり」

新座栄4丁目商店街フリースペース「たまりば」でのフードパントリーと親子の居場所づくりも「ハピネス」の継続的活動の一つである(写真2,3)。星野敦子教授のゼミや子ども食堂の支援者などと協働で行われるこの取り組みの成果としては、2022年度の報告書³⁾に整理したが、4期は参加経験のない学生が参加する際に馬場(2021)⁴⁾の示す経験学習モデルの経験の変換と経験の理解が課題となった。表1に示すとおり、参加学生が少なく、個の経験をどのように集団に共有するのか、の検討が必要となった。

表1：活動日と参加学生数

2023年4月16日	参加学生 2名
2023年6月11日	参加学生 2名
2023年9月17日	参加学生 2名
2023年11月12日	参加学生 4名



図3：経験学習モデル

(馬場, 2021. p. 90 を基に筆者作図)

試案として、SNS (LINE) のアルバム機能を活用し、過去の活動の記録を残すようにしていたことを活用することとした。年度ごとに新しくグループLINEを作成するのではなく、継続的に同じLINEを使用することで、新規メンバーや活動に参加しなかった学生も活動の様子を写真記録で共有できるようにした。また、しあわせ居場所ネットワーク設立時からの過去の活動も確認できるようにし、具体的経験の前に視覚的理解によって、「伝承・伝達」を補うようにした。

筆者らが3期までの活動で示したとおり、「接続・伝承の難しさはあるものの、個々の経験の理解と経験の変換を経験していない学生へ伝達し、新しい経験の理解と変換を生み出していくことにより、個の経験にとどまらない集団としての省察、具体的経験の集団的意味づけへの価値を見出すことができる」⁵⁾ ためには、参加学生の経験知を集団に共有する仕組みをさらに検討する必要があることがわかった。



写真2：さかなつり



写真3：パクパクお菓子つかみ

2. 実践報告 2「十文字の森プレーパークの活動」

十文字の森プレーパークの活動は3期目となった。「ハピネス」は森の仕事を継続して企画し、経験のある学生から初めて経験する学生へと内容の継承が行われながら、どのような工作をするのか、材料を用意するかなどの打ち合わせが行われ、2023年度は①森のマラカスづくり②森のクリスマスツリーづくりを行うことになった。3回目は参加者が2名であり、工作コーナーの運営が難しいとの判断から、竹あそび（矢野ゼミ学生運営コーナー）に合流して参加した。

表2：活動日と参加学生数

2023年11月3日	森の工作コーナー： 森のマラカスづくり	参加学生 7名
2023年12月23日	森の工作コーナー クリスマスツリーづくり	参加学生 7名
2024年1月27日	森の工作コーナー：※参加人数が少ないため、矢野ゼミと合同竹工作を運営	参加学生 2名

(1) 森の工作

森のマラカスづくりでは、子どもたちは思い思いにカップに色付けや絵を描いた後、カップを片手に森の中で葉や木の実を探しながら入れ、カップの蓋をして完成である。2期までに森のビンゴを経験した学生を中心に、自然遊びと工作を融合した形で計画し、子どもたちが思い思いに工作できるよう描画の材料やカップなどの検討を行い準備を進めていた。プレーパークは11月の第1回時に新メンバーが参加することになるため、経験のある学生が当日の環境構成を考え、準備をしながら伝承をしていく様子がみられた（写真4）。2期までに子どもの遊ぶ権利や子どもの権利条約についての勉強会を経験した学生が4年となりプレーパークへの参加がなくなったものの、子どもたちの自由な発想と想像性を重視した関わりと準備は運営の主担当となる3年生に継承されていた。また、開催の時期の季節やその時期のプレーパークの落ち葉の量や木の実の量を把握してきた経験を活かし、11月ではどんぐり等の木の実を利用してできる工作、12月は、落ち葉は増える一方、どんぐりは少なくなるためクリスマスツリーづくりへと準備物を変えていることも特徴的であった（写真5,6,7）。経験知としての「環境への見通し」が、企画運営に活かされ、新メンバーを迎えての活動でもその考え方が伝承されていくことがみられた。



写真4：準備をしながら伝承する様子



写真5：森のマラカスづくり



写真 6：森のマラカス



写真 7：森のクリスマスツリーづくり

(2) 森の子どもの権利条約イラストパネル展

2021 年度より子どもの権利条約の普及啓発を目的に森のイラストパネル展として、学生たちとプレーパーク内に展示を行ってきた。これまでも親子でイラストパネルを眺める様子がみられていたが、2023 年度はじっくりと子どもが立ち止まって条文を読みながら一つひとつみている様子もみられた。プレーパークの一角に展示されたパネル展であるが、令和 5 年 4 月に施行された「こども基本法」は日本国憲法および児童の権利に関する条約の精神にのっとり、全てのこどもが、将来にわたって幸福な生活を送ることができる社会の実現を目指し、こども政策を総合的に推進することを目的とされている。子ども自身が自身の権利を理解する機会になるよう、今後も展示を続けていきたい。



写真 8：子どもの権利条約
イラストパネルを眺める児童

(3) 十文字の森の自然と子どもの経験

「ハピネス」の森の工作は、十文字の森の自然物を遊びに取り入れながら、子どもの自由な発想や想像力に委ね、思い思いの工作を楽しめることを大切に企画準備を進めている。十文字の森の自然物は 11 月～1 月の開催の 3 か月で景色も色も素材も変化がみられるが、その自然環境を資源として、遊びにとりいれていく子どもの遊びの姿をイメージしながら企画していく姿からは、これまで課程教育にて学んだことを基盤としながらもサービスラーニングにおいて、応用・展開する往還性を捉えることができる。

一方、学生たちの予想する子どもの遊びの姿を超えた姿もみられるのが“プレーパーク”であり、自由に遊ぶ子どもたちの想像力は、学生たちの事前の準備や心構えを超えることもある。例えば、第 3 回の森の工作は、「ハピネス」からは参加人数は少なく、2 名とも矢野ゼミに在籍していたこともあり、矢野ゼミ企画の“竹工作（竹鉄砲づくり）”に合流して運営を行った。矢野ゼミ生の企画では、竹鉄砲をつくって遊ぶことであったが、「竹を切りたい」子どもたちが多く、列ができるほどで

あった。多くが竹に触れるのも、のこぎりを使うのも初めての子どもたちであり、学生が竹を支えたり、親がサポートしたりする中、夢中で竹を切っている様子がみられた（写真 9, 10）。子どもの生活体験の中で、自然物との出会いと道具の使用は、限られた経験となっている。十文字の森の豊かな自然は、子どもたちの遊びの感覚を呼び起こし、「使いたい」「やってみたい」意欲を沸き立たせ、遊びの保障としての場、環境、時間と大人の在り方が成立する。子どもの遊びの原体験としてのプレーパークの意義は大きいといえるだろう。



写真 9：竹を切るこどもと支える親



写真 10：ハートの形に喜ぶ

プレーパークでは、道具の選定や用意も重要な技量であるが、竹用のこぎりは、昨年度のプレーパーク中にプレーワーカーが竹を切るのに使っていたことから、筆者が竹用のこぎりの助言を受け、新たに購入したものである。遊びの指導者としての技術と知識をもつプレーワーカーからスーパーバイズを受けられることも協働的な関係性の利点である。

さらに、竹をつかった遊びについては、昨年度もプレーパークに来ていただいていた山賀氏や友人の方が、第 1 回時に学生が竹をつかって活動している様子を見て、道具の使い方を直接学生に指導してくださった。また、昔は竹をつかって色々なものを作り遊んだ経験から、第 2 回、第 3 回では竹を削り、竹とんぼを自ら製作してくださった。

体験の希薄化は生活環境の変化によるものであり、伝承に必要な見て学ぶ「周辺参加」⁶⁾の機会が希薄していることの影響は否めないが、遊びの伝承は、世代から世代へ経験の伝承として引き継ぐことができる。竹の事例からわかるように、プレーパークに多世代が集まることによる「コミュニティの再構成」は、遊びの伝承の場として機能している。また、親世代も竹から竹とんぼを作って遊んだ世代ではなくなり、山賀氏のように遊ぶものは自分たちで作り、作りながら道具の使い方を理解していった世代と異なり、工具や道具の使い方も学校教育の中で学んだ世代である。子どもとともに作り方や道具の使い方を見て学ぶ親子の「周辺参加」の場面がみられ、プレーパークにおけるコミュニティの再構成は、親世代への伝承にも一翼を担っていた。



写真 11：竹から竹とんぼを製作している山賀氏（本学交通安全指導員）



写真 12：竹から竹とんぼを製作している様子

3. 実践報告 3「野火止 4 丁目集会所あそびば」

4 期にあたる活動として、新しい試みとなるのが「あそびば」である。遊びのアウトリーチを目的に、大学の町内である野火止 4 丁目集会所で実施した。町内での実施については、学生の参加のしやすさとともに、野火止エリアの課題として高齢者の孤立と子育ての交流の場があることが西部圏域協議体でもあがっていたことから、野火止 4 丁目集会所を使用することとした。

表 3：活動日と参加学生数

2023 年 9 月 23 日	野火止 4 丁目集会所 あそびば開催	参加学生 10 名
2024 年 1 月 20 日	野火止 4 丁目集会所 あそびば開催	参加学生 5 名

室内での活動として、様々な素材や道具、製作の材料を用意し、「子どもの選び」を重視しながら、事前準備を行う様子がみられた。事前の準備として、スライムでは学生が集まり、実際につくることを通して、当日の手順や援助の方法を考え、当日を迎えた。



写真 13：コマまわし対決



写真 14：自分でバルーンをつくる子どもと隣で折り紙を折る大人



写真 15：ソルトマラカスづくり



写真 16：スライムづくりに夢中になる父親たち

兄弟や同じ時間に遊びにきた子ども同士でコマに色をつけコマ回しの対決をしたり（写真 13）、好きな色を選んで、手を動かしながら、自分でバルーンを作ったり（写真 14）とそれぞれが自由に遊ぶ様子がみられた。ソルトマラカスでは、乳幼児も保護者と一緒にビーズを選び、振ることで色がついていく様子や鳴る音を喜ぶ様子がみられ（写真 15）、学生は月齢に合わせて、子どもや親子を援助する様子がみられた。特徴的であったことは、大人自身も遊びに夢中になっていたことである。「兄弟の習い事を待っている間に来ました」や「週末は近所で遊ぶ場所がなくて」と父親が「あ

そびば」に連れてくることあり、町内の子育て事情も垣間見ることができた。子どもが遊びに夢中になりはじめると、大人も一緒にあそび始める様子がみられた。スライムづくりでは、量を変えたり色を混ぜたりと、童心にかえって大人も遊び、その様子を学生や子どもたちが微笑ましくみていることもあった。大人がうまく作れないと、子どもがコツを教える様子もあり、いろいろな色のスライムを作っては捏ねたり伸ばしたりと感触を遊んで楽しむ親子の様子があった。また、子どもが遊ぶ隣で大人自身がリラックスしながら折り紙を折っていたり（写真 14）、学生と遊ぶ子どもの様子を微笑ましくみっていたり、学生と話したり、とゆったりと過ごす様子がみられ、遊びを通したコミュニティにつながっていた。

地域における遊びのアウトリーチの需要があることがわかっただけでなく、大人が遊びの原体験を呼び起こし、子どもに戻る経験を通して「親として」の大人ではなく、一人の人としてリラックスして過ごす様子からも、「遊び」が子育てに向かう親をエンパワメントすることにもつながり、それぞれが遊び込むことで、「子ども一親の横並びの関係性」が生まれる可能性がみられた。遊びを通しての居場所づくりを次年度も続けていきたい。

Ⅲ. 総合考察

4 期となる 2023 年度は活動の広がりと発展がみられた 1 年となった。「ハピネス」は 2021 年に「ボランティアを依頼されて行くのではなく、自分たちで活動を企画して運営したい」という学生たちの声から始まった活動である。その理念として「ハ（happy: 幸せ）、ピ（place: 居場所）、ネ（network: つながり）、ス（三単現の S: みんなで創る）」を置いてきたが、4 期の振り返りにおいても、新しいメンバーを迎えながらも 1 期からの理念が息づいていることがわかる。理念は変わらないものの、継続性の中でその理念を可視化した活動は 4 年の継続によって発展し、活動はより多くの人たちの「ハ: 幸せ」となり、1 期よりも多くの場「ピ: 居場所」と、多様な関係性「ネ: つながり」をもち、作り上げる共同体「ス: みんなで創る」として、学生も「システムリーダー」としてのリーダーシップを図るようになった。そして、「ハピネス」の活動を通して、一人ひとりの「ハ: 幸せ」の場となっており、4 期は「安定・定着の期」となったといえる。

次期は、遊びのアウトリーチの質（素材や道具の検討）を高め、継続的な参加によって作り上げられていく遊び（木工等）を取り入れながら、「あそびば」を楽しみに待つ、ことや、その場の関係性で創って遊ぶことの楽しさも感じられる遊びを考えていきたい。子どもの遊びの保障は、大人が大人としてあることも大切にする必要がある。子どもの権利の保障のためには、大人自身が幸せであることが大前提であろう。子どもの遊びをまんなかに置き、「ハピネス」の理念を発展させることが課題である。

<引用文献>

- 1) 矢野景子・大山博幸（2023）子ども・地域の居場所支援を対象とするサービスラーニングのデザイン～「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開（3 期）～地域連携共同研究所年報第 8 号 p. 48
- 2) 同上
- 3) 矢野景子・大山博幸（2023）子ども・地域の居場所支援を対象とするサービスラーニングのデザイン～「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開（3 期）～地域連携共同研究所年報第 8 号 p. 39-48
- 4) 馬場洸志（2021）サービス・ラーニングにおけるリフレクションの理論と手法
基盤教育論集; Bulletin of Institute of Liberal Arts, OttemonGakuinUniversity (8), pp. 89-99
- 5) 矢野景子・大山博幸（2023）子ども・地域の居場所支援を対象とするサービスラーニングのデザイン～「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開（3 期）～地域連携共同研究所年報第 8 号 p. 42
- 6) ジーン レイヴ, エティエンヌ ウェンガー, 佐伯 胖（訳）福島 真人（解説）（1993）状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加. 産業図書

＜参考文献＞

- (1) マーク R. クラマー/マーク W. フィッツァー (2017)「コレクティブ・インパクト」を実現する 5 つの要素. ダイヤモンド社 p. 226
- (2) 矢野景子 (2023)「保育者養成における子どもの権利条約—子どもの権利意識の醸成を超えた先へ」p. 67「発達 No. 174 いま、0 歳からの子どもの権利を考える」ミネルヴァ書房
- (3) 令和 5 年度厚生労働省白書 [zentai.pdf \(mhlw.go.jp\)](https://www.mhlw.go.jp/content/0006202308300.pdf) (検索日 20230830)

謝辞

本活動及び研究にご協力いただいた、新座栄 4 丁目商店街関係者の方々、プレーパーク関係者の皆様、野火止 4 丁目集会所管理運営町内会長高石様、活動の企画運営に関わった学生の皆さん、そして多大なるご指導とご支援をいただきました本学星野敦子教授に、心より感謝申し上げます。

健康増進に向けたプラスごはんプロジェクトからの地域への情報発信・交信・共振 地域住民との共振に向けた取り組みの成果

Information, communication, and resonance to a positive meal project for health promotion to
the community

Results of efforts to resonate with local residents

木村 靖子 ¹⁾	名倉 秀子 ¹⁾	村田 浩子 ¹⁾	佐々木菜穂 ¹⁾
Yasuko KIMURA	Hideko NAGURA	Hiroko MURATA	Naho SASASKI

菅原沙恵子 ¹⁾	林 典子 ¹⁾	伊藤 美穂 ¹⁾	星野 祐子 ²⁾
Saeko SUGAWARA	Noriko HAYASHI	Miho ITOH	Yuko HOSHINO

1) 十文字学園女子大学・健康栄養学科 2) 同・文芸文化学科

キーワード：健康増進 学生食堂 シニア健康教室 地域住民との共振

要旨：本プロジェクトは、健康づくりのために昼食に焦点を当て、本学学生食堂（以下、学食）のメニューコンテストによる学食メニューづくりをとおして、地域への食の情報発信の仕組みづくりを学生主体で企画・運営していくとともに、学生および教職員等の学食利用者自身の健康増進に寄与することが目的である。2020年度よりプロジェクト活動を開始したが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、3年間は学内の学生、教職員に対する活動が中心になり、近隣地域など学外への情報発信は、大学ホームページ等の情報提供にとどまっていた。2023年度は、3年間の学内等での活動の成果をもとに、本学健幸づくり協働研究所主催の「シニア健康教室」に参加する近隣地域の高齢者と学生が学食メニューをとおして、直接関わり合う活動に取組み、地域への積極的な情報発信、交信、共振に向けた活動を学生が主体となって企画、運営できる1つの仕組みづくりが展開できた

1 はじめに

国民の健康づくりをめざす「健康日本 21（第二次）」を受けて、埼玉県、新座市では、健康増進の仕組みや体制づくりの具体的な内容と目標、達成年を示している。「栄養・食生活」については、食品や料理における食塩含有量の低減や給食施設等での栄養・食事管理により、バランスのよい食事を摂る人や生活に生きがいややりがいを持つ人の増加を令和6年達成として目標を掲げている。

本プロジェクトは、この目標の達成に寄与するために、健康増進に関する分野を専攻する学生とその他の専門分野の学生により、大学内外（地域）へ「健康課題」の解決を発信し、地域との交信により、学生と地域の共振を生み出す取り組みとして、2020年度より開始された。2022年度までの3年間は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う食事提供や共食の活動制限の影響を受け、特に学外への働きかけは皆無であった。メニュー提案をテーマとして実施可能な本学学生食堂（以下学食とする）におけるメニューコンテストを主な活動として取り組み、2022年度までに通算5回のコンテストを企画し、応募メニュー数も定食、めん類、単品料理などあわせて100を超えた。本プロジェクトの内容が理解され、教職員の昼食をとおしての健康増進への意識づけの効果が窺えた。また、応募した学生が給食利用者にアピールするメニューのコメントや料理写真の撮影技術などは回を重ねるごとに上達し、給食販売におけるプロモーション活動について実践を通して習得することができ、学生への教育的成果も得られた。また、3年間のメニューコンテストにおいて良質な料理献立が集積されたため、食関連学科学生の企画、構成により、料理レシピ集（冊子）「おいしく食べよう 健康メニュー」を作成した。料理レシピ集（冊子）は、近隣地域の高齢者等への配付も想定して

紙媒体での情報提供としたが、動画の QR コードをレシピ集に載せ、メニューを作った学生が料理の作り方を動画で紹介する新たな試みも実施した。今後、料理レシピ集は紙媒体とともに、デジタルブック形式のもの、さらには学生の動画による料理の作り方の紹介など電子媒体を活用した発信を積極的に取り入れる。

2 プロジェクト継続のための取り組み

2023 年度は、3 年間の学内等での本プロジェクトの主な活動であるメニューコンテストをとおして集積した情報を、学外（地域）に向けた食・栄養の情報発信を紙および電子媒体など多角的に実施し、学生と地域住民とつながりを積極的に創出することを目標とした。このような取り組みにあたり、新座市など地域自治体とつながりを持つ教員を迎え、新たに 7 人のプロジェクトメンバーに再構成した。

なお、本プロジェクト活動の継続ができるのは、学食のコントラクトフードサービスの株）グリーンハウス様およびその店長の多大なるご理解と協力によるものである。

3 2023 年度プロジェクト活動報告

本年度は、これまでの本プロジェクト活動の成果をもとに、地域住民と学生が食生活と健康に関する情報の交信および共振をはかることで、地域住民の健康増進に寄与できる仕組みづくりを構築するための活動を展開することとした。学生が近隣地域の住民と関わることは、日頃の大学での専門的学びの意味を再確認すること、将来社会に貢献するうえでのコミュニケーション力などを身につけられる貴重な機会になることが期待される。

まずは、本学健康づくり協働研究所主催の「シニア健康教室」に参加する新座市及び近隣市に在住するシニア層への取り組みを計画、実施した。「シニア健康教室」は、人生 100 年時代、健康で長く活躍できる社会を実現するため、近隣地域のシニア層の食と運動への意識を変え、運動を習慣化することにより、近隣地域の健康寿命の延伸に寄与する活動である。

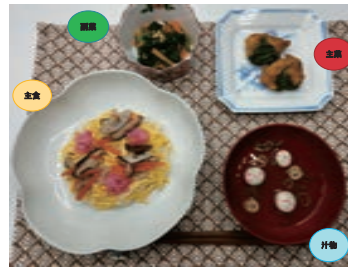
本年度のシニア健康教室は、2023（令和 5）年 11 月～3 月の月 1 回土曜日の 10 時～12 時、本学メインアリーナにて開催された。新座市や所沢市、清瀬市など近隣地域の 60～80 才代のシニア層が毎回 30～40 名参加した。毎回のプログラムは、当日の参加者の健康チェックから始まり、食や栄養、運動等を専門とする教員により、健康維持増進のために役立つ情報を提供するミニ講義を 30 分程度実施し、その後ストレッチ、チェアエクササイズ、ダンスムーブメントなどをとおして、日常生活での継続可能な運動を実践するものである。ミニ講義と運動を組み合わせたプログラムにおいて、学生スタッフが活動をサポートし、参加者は学生との出会いを楽しみにし、学生も活動を通してシニアの方々とかかわることで、大学での学びを再確認する場となっている。

第 1 回の教室は、11 月 11 日に実施され、ミニ講義において、本プロジェクト教員が健康増進のための食事（食生活）について講話を行った。前年度に健康増進に関する分野を専攻する学生の企画、構成により作成した料理レシピ集（冊子）「おいしく食べよう 健康メニュー」（図 1）を参加者に配付し、国民の健康づくりをめざす「健康日本 21（第二次）」の「栄養・食生活」に関する情報発信を行った。「栄養・食生活」の項目では、主食・主菜・副菜を組み合わせた食事が 1 日 2 回以上の日がほぼ毎日の者の割合の増加、食塩摂取量の減少、野菜や果物の摂取量の増加の目標が掲げられている。メニュー集に掲載した定食メニューをもとに、主食、主菜、副菜をそろえることで野菜や果物の摂取量を増やし、減塩を心がける食事について説明した。そして、その食事を実践する試みとして、12、1、2 月それぞれのシニア健康教室終了後に、料理レシピ集に掲載されている定食メニューを昼食の例として学食で有料（450 円）にて提供し、参加者に健康増進のための食事を体験してもらう企画を伝え、喫食希望を調査した。



ちらし寿司
・鶏もも肉と大葉の味噌焼き
・ほうれん草とにんじんの梅和え
・鮎と三つ葉の清汁

ちらし寿司は十文字女子大学のキラキラとしたイメージを表現するために
彩り豊かな食材を用いました。



～ちらし寿司～	
主菜 材料は 1 人分 米 75g にんじん 30g れんこん 20g すいすい 5g 鶏もも 25g みょうろ 3g 梅でんぶ 1g 醤油 0.4g	副菜 材料は 1 人分 鶏もも肉 80g 大葉 1枚 しょうゆ 10g 味噌 5g 砂糖 0.4g
汁物 材料は 1 人分 ほうれん草 80g にんじん 20g しょうゆ 2g 砂糖 0.4g	主菜 材料は 1 人分 鶏もも肉 80g 大葉 1枚 しょうゆ 10g 味噌 5g 砂糖 0.4g

図 1 2022 年度作成の料理レシピ集「おいしく食べよう健康メニュー」

提供される定食メニューは、写真 1 に示すとおり、12 月 9 日油淋鶏唐揚げ定食、1 月 27 日ビビンバ定食、2 月 17 日ちらし寿司&鶏の味噌焼き定食であった。油淋鶏定食はプラスごはんプロジェクトメニューコンテスト第 3 弾、ビビンバ定食は第 5 弾、ちらし寿司定食は第 4 弾にていずれも上位に選ばれ、学食にて提供された人気メニューである。

表 1 に、それぞれの定食 1 食分の栄養量を示した。シニアのかたの 1 食の栄養量としては多くなっているが、学食メニューとしての提供であり、学生と一しょに会食することから、シニアのかたへの栄養量の変更は加えなかった。そのため、食事後の感想の中に、量が少し多かった、日頃食べている量よりも多く感じたが、皆さんと一しょなので完食しました、などの意見があった。



12 月 9 日 油淋鶏唐揚げ定食



1 月 27 日 ビビンバ定食



2 月 17 日 ちらし寿司&鶏の味噌焼き定食

写真 1 昼食に提供された定食メニュー

表 1 提供メニュー 1 食分の栄養量

実施日	献立名	エネルギー (kcal)	たんぱく質 (g)	脂質 (g)	炭水化物 (g)	食塩 相当量 (g)
2023/12/09	油淋鶏唐揚げ定食	753	30.0	34.0	82.3	4.5
2024/01/27	ビビンバ定食	607	24.0	17.7	90.5	4.3
2024/02/17	ちらし寿司&鶏の 味噌焼き定食	644	26.5	16.7	99.3	6.8

希望調査において、いずれの月も参加者の8割を超える喫食希望があり、シニア健康教室の参加者は健康増進のための食事への関心が高いことが示された。

各月のシニア健康教室において、健康増進に関する分野を専攻する学生5～10名が、運動のサポートを行い、健康教室終了後、サポート学生のうち3～5名の学生が、参加者とともに学食に移動した。参加者がいくつかのグループに分かれて食事をとっているところに、学生が1人入り、メニューの感想などを聴くことをきっかけに、日常の食事や栄養で気をつけていること、気になっていること、運動の習慣など健康に関する情報交換を行った。写真2は、学生と参加者の交流の様子を示したものである。



写真2 学生と参加者との交流の様子

毎回、食事が終わった際に、参加者には意見や感想を用紙に記載してもらった。以下のような意見や感想が出された。

- ・とてもおいしかった。
- ・栄養のバランスがとれた献立だと思った。

- ・学生さんが考案した献立を食べるのは初めてですが、とてもおいしかった。
- ・味つけが男性にはちょうど良かったが、女性には濃く感じる人がいた。でも、おいしかった。
- ・油淋鶏ソースはあまり食べたことのない味でおいしかった。
- ・ビビンバ丼は、外食で食べてみようと思ったがなかなか手が出せなかった。今日食べてとてもおいしかったので、外食でもぜひ挑戦してみる。
- ・やはり和食が受け入れやすく、今日のちらし寿司がいちばん美味しかった。
- ・1食分は、いつも食べる量よりも多かったが、みんなと一緒に食事をすることで完食できた。
- ・ミニ講座でたんぱく質の講義を聴きましたが、動物性、植物性たんぱく質ともに摂取することを心がけたい。
- ・ミニ講義で習った栄養のことを学生さんと食事をする事でより理解が深まり、自分の食生活にいかしていきたいと思った。
- ・昼食を学食で食べられると、家に帰ってからゆっくり休養がとれるので、運動後の体力回復には助かる。
- ・学生さんと話しをすると食欲が増す。
- ・昼食があると思うと、毎月のシニア健康教室が一層楽しみになる。
- ・学食に来て、いつもこのような食事をとることができるとうれしい。
- ・このような学食での企画をもっと増やして欲しい。
- ・学食がいつも開放されていることを市の広報に宣伝して欲しい、公開講座などの参加の際に利用したい。
- ・料理メニュー集に紹介されている料理など学生さんと調理実習などもやってみたい。

また、参加者と交流した学生には、食事をとりながらの話題について報告してもらった。報告の一部を以下に示す。

①参加者からの昼食のメニューの感想、要望（今後も続けてほしいか、など）

学生 A：昼食メニューについては、参加者のかたから、学生が発案した料理と知りとても興味が湧く、特にイベント食の食事は見た目も綺麗で楽しくなると話されました。この企画の継続を希望する意見が多かった。

学生 B：食事の量に関して、「普段はこの半分程度の量しか食べない」など、量が多いと感じている方が何人かいました。私自身も普段の自分の食事よりも多い量に感じました。シニアのみなさんを前にして残すわけにはいけないと思い、頑張って完食しましたが、シニアの皆さんも同じように感じたのか、完食しようとしている方が多くみられました。また、「ちらし寿司」については、酢が効いている食べ物が好きと話されていました。

学生 C：

- ・家では作らないような手間のかかるメニューが手軽に食べられて嬉しい。
- ・運動した後にご飯を作る気力がない時があるので、すぐに食べられて助かる。
- ・学生さんと一緒に食べられて嬉しい、女性には少し量が多いことがある、などの意見が出ました。

学生 D：

- ・とても楽しかったです、運動後においしいご飯を食べられるのはよいイベントである。
- ・今後も実施するのであればまた参加したい。
- ・色々な種類の料理が食べられてよかった。
- ・ちらし寿司がとてもおいしかった。
- ・値段も高すぎず、ちょうどよかった、という意見が多かった。

②メニュー以外の参加者との話題について

学生 A：参加者のかたとの話題については、いつからシニア健康教室を継続してくださっているのか、なぜ知ったのか、その日のプログラムで何を学べたか、今後シニア健康教室でどのようなことをやりたいかやシニア健康教室以外での日々の生活の話をしました。

学生 B：6 人前後のグループのかたと一緒に食事を取りましたが、どんなコミュニティか尋ねたところ、おひとりが体操の先生で、その先生が生徒さんたちを誘い集まったと話されていました。プラスごはんプロジェクトについても楽しみにされており、「次回はないの？」など 3 回で終わることが残念そうでした。

学生 C：私は、シニア健康教室にて、運動プログラムを考え、運動を実施させていただいたので、そのことについての感想やご要望などを聞きました。「今日の運動は、足の筋肉をよく使って疲れた！」との感想や、帰宅後の体のケアについても話をしました。

学生 D：若いときにやっていたスポーツについて聞いたり、シニア健康教室をどこで知り、誰と友達なのかなどを聞きました。私がやっていたスポーツ（剣道）をお孫さんがやっていたので、とても話が盛り上がりました。大学で習っていること、栄養士の勉強内容やどういったお仕事に使えるかなどについても聞かれました。友達同士で参加していたようで、皆さん会話もとてもはずみ、楽しみながら食事をされていました。

以上のとおり、シニア健康教室参加者と学生の間で、積極的な情報交換がなされ、ミニ講義で学んだ知識を提供メニューと関連づけ、学生と話すことで理解を深めることができた、運動後みんなと食事することでいつもより食卓量が増えた、学生と話すと食欲が増す、元気になる、学生が作成したメニュー集の料理を学生と調理してみたい、などの健康増進に向けて前向きな意見が示された。

4. 今年度の活動の成果

プラスごはんプロジェクトは、2020～2022 年度の 3 年間は、学食における昼食のメニューコンテストの実施をとおして、学内において学生、教職員の健康増進に寄与する食生活の仕組みづくりを浸透させることができた。2023 年度は、そのノウハウと成果をいかして、本学健康づくり協働研究所主催の「シニア健康教室」に参加する近隣地域のシニア層と学生が学食メニューをとおして、直接関わり合う活動に取り組むことができた。シニア健康教室の参加者と、健康増進分野を専攻する学生とともに学食で食事を取りながら交流することで、健康、栄養や食、運動に関する情報発信及び交信、共振の機会となることが参加者や学生の意見から明らかとなり、本プロジェクト活動は、近隣地域のシニア層の健康増進への意識づけに極めて有効であることが示唆された。今後、シニア健康教室以外の本学の地域連携活動に積極的にに関わり、地域への積極的な情報発信、交信、共振に向けた活動を学生が主体となって企画、運営できる仕組みづくりを展開することで、地域住民の健康の維持増進に寄与できると考える。

また、学生は学内の授業等では体験できない専門性の学び、また社会性を身につける場としてプロジェクト参加の手応えを感じており、3 年間のコロナ禍の影響にて学内のみの活動では習得することができない学生への教育的な効果を見出すことができた。

学生に参加者との交流をとおして、学んだことや感じたことを報告してもらった。以下にその一部を示す。

①私たち学生スタッフと笑顔でいつも話していただき、今日すごく良かったよと言葉を頂けるところにすごく力をもらいました。また、私の知らない話題もたくさん聞くことができたので、たくさんの交友関係を持つことができ、自分自身の成長にも繋がりました。

②みなさんの普段の食事や運動習慣について質問をしながら食事ができたので、シニアのかたの生活習慣等の実態を知ることができ、学びがとても多くありました。バランスのとれた食事を提供

することで、給食と同様にシニアのかたには生きた教材となり、一食の量の目安等を知っていただく機会になっていると感じました。若い人と食べると楽しいと言って頂き、私たちにとっては学びになり、参加者のかたにもとても楽しむことのできる場となっているのに喜びを感じました。なお、食事をとる際に、私は端の席に座りましたが、参加者のかたの間に座ることで、満遍なくコミュニケーションを取ることができたのではないかと反省しました、次回に生かしていきたいです。

③食事をともにすることで、普段の学校で学んでいることや、将来のことなど、運動中にはできなかったお話を聞くことができました。私たちよりずっと長く人生経験のある皆さんから、就職のことなど貴重な話を聞く機会もあり、とても勉強になりました。

④シニア健康教室では動いていることが多いので、ゆっくり話を聞くことができませんでした。食事を一緒にすることでシニア健康教室に対する思いや要望、こういった運動を好まれているのかなどを直接お聞きすることができて良かったです。私がご一緒させていただいたグループはとても話が盛り上がり、私自身の知らないことなど色々な話をすることができ、有意義な時間を過ごすことができました。

また、今回参加した学生に、今後この企画をもっと広めていくためのアイディアなどを質問したところ、以下のような回答が得られた。いずれも本プロジェクト活動をとおして、地域のかたと積極的に関わりたいという意識を感じることができ、大学の専門的学びや経験に基づいた提案がされていることから、今後、さらに学生主体の企画・運営にて、地域住民とつながる活動を展開できることが示唆された。

①学食で提供する際、学生が作ったメニューであること、どこがアピールできるメニューか！など、メニューをもっと宣伝するポップを大きい文字で作り、食堂に掲示するとよい。また、提供する献立について、給食だよりのような献立の魅力をアピールする資料を学生が作り、配布することを提案します。栄養指導論実習で学んだ媒体作りなどをアウトプットでき、大学で学んだことをシニアのかたに伝える機会になると考えます。学生の経験や自信につながることに加え、シニアのかたに食事の大切さや栄養について理解を深めていただくことができると考えます。

②シニア健康教室は月1回のイベントなので、毎回昼食を食べる機会を作ってもいいと思います。参加者のかたからのリクエストにも応える回があるとより楽しみになり、参加者も増えると思います。おやつや軽食とお茶など軽めに食べられるものも受け入れやすく、時間もあまり取らないので、利用が増えると思います。

③今回のプラスごはんプロジェクトに参加したかたは、次回以降もきっと参加してくださると思いますので、シニア健康教室が始まる前にプラスごはんプロジェクトの宣伝ちらしを送付することで、参加者も増えると思います。可能ならば、事前に食べてみたいメニューを調査するのもいいと思います。自分自身では作るのが面倒なメニューでも、シニア健康教室に行けばおいしく食べられるということになれば参加意欲も上がります。

④参加者のかたは、新座の広報誌を見てシニア健康教室を知ったというかたもありました。広報誌にシニア健康教室のことを載せるときに、プラスごはんプロジェクトの企画もあることを載せると参加者も増えるのではないかと思います。

5. まとめと今後の課題

プラスごはんプロジェクトにおける活動は4年目を迎え、地域への積極的な情報発信、交信、共振に向けた活動を学生が主体となって企画、運営する1つの仕組みづくりが展開できた。近隣地域住民と学生の情報交換をとおして、地域住民の学食を含めた大学施設等の利用のニーズが高いことも示された。今後は、学食はもとより大学の昼食、飲食を提供する施設とも協力して健康増進のた

めのメニュー等の提案および提供を行い、大学 HP や SNS の発信、地域の広報紙の掲載など広報活動を活発にすることで、地域住民の利用者を増やし、地域住民の健康づくりに寄与する仕組みづくりを学生の企画、運営のもと検討する。また、料理レシピ集で掲載したメニュー等を学生が地域在住者とともに学内の実習施設でできる料理教室の開催などを学生主体で企画・実施する。それをきっかけに、学生と地域在住者との交流を深め、地域在住者が実践している料理のノウハウを学生に伝える場を設けることで、さらに地域との交信、共振をはかっていく。

最後に、本活動は、十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。「プラスごはんプロジェクト」に関係する学生に活動の場を提供いただき、その成長を支援して下さった給食会社様をはじめ、すべての方々に感謝申し上げます。

今後とも、学内外の地域イベント活動に「栄養・食生活」をテーマとして積極的に参画し、大学の地域連携活動に貢献していきたい。

（参考文献）

- 1) 木村靖子、名倉秀子、村田浩子、佐々木菜穂、菅原沙恵子、岡本節子、中岡加奈絵、石井和美、鴨下澄子、星野祐子、2022、健康増進に向けたプラスごはんプロジェクトからの地域への情報発信・交信・共振 ―学食メニューコンテスト実施による成果―、地域連携共同研究所年報 第8報、49-59
- 2) 木村靖子、名倉秀子、村田浩子、佐々木菜穂、菅原沙恵子、岡本節子、中岡加奈絵、星野祐子、2021、健康増進に向けたプラスごはんプロジェクトからの地域への情報発信・交信・共振 ―第2報 コロナ禍での学生食堂のメニューコンテストの取組み―、地域連携共同研究所年報 第7報、87-96

知的障害特別支援学校卒業生の生涯学習としてのオープンカレッジ

Open college of lifelong learning for Special support school graduates

細谷 忠司¹⁾
Tadashi HOSOYA

中西 郁²⁾
Kaoru NAKANISHI

岡本 明博³⁾
Akihiro OKAMOTO

1) 2) 3) 十文字学園女子大学教育人文学部・児童教育学科

キーワード：特別支援学校 生涯学習 オープンカレッジ 余暇

要旨：特別支援学校を卒業した生徒が卒業後充実した余暇を過ごせるよう埼玉県で就労している 9 名の特別支援学校卒業生を対象にライフカレッジを実施した。就労や余暇などの実態についてアンケート調査を行い、実態と課題を把握した。

前回のライフカレッジのアンケートをもとに内容を修正した結果、このような学びの機会に非常に高い満足度を示し、今後とも学ぶ機会を欲するという意見が多かった。

1 はじめに

知的障害の人にとっての余暇とは、就労と同様に社会参加の一つであり、自立の基礎となり得るものである。生活の質（QOL）を考えると、仕事のようにある一定の決められた時間以外の生活の余暇時間の過ごし方についても充実していることが大切である。しかし、そのような余暇の過ごし方について、一人で探ることや一人で実行することが難しかったり、余暇の内容に偏りがあり過ぎたりすることも、時折見受けられる。

これまで育ってきた環境が大きく余暇の興味や活動に影響してくることもわかってきた。学校、職場やデイケアなど、他の人と一緒に過ごしている知的障害のある人は、多少、人とのくい違いがあったとしても、周りの理解のもとで余暇を見つけられるとの報告もある。

しかし、見つけられたとしても、実行に移すには周りの支援が必要な場合が多い。知的障害のある人にとって、余暇活動を定期的な生活の一部にしていこうとしても、興味・関心だけではなかなか結びつかないことが多い。

2 実施に至る経緯

(1) 対象

県内の知的障害特別支援学校 A 校・B 校の卒業生にオープンカレッジの案内文を配布し、条件を満たし希望する者を参加者とした。9 名の希望者があり、全員男性であった。参加者の平均年齢は 20 歳であった。一緒に学習するのは本大学の学生であり、3 日間で延べ 22 名であった。

参加の条件は次の 4 点である。

- ・知的障害特別支援学校の高等部を卒業して 5 年以内の人。
- ・大学のキャンパスで勉強してみたいと思っている人。
- ・スマホ等を使ってメールで連絡ができる人。
- ・公共交通機関を利用して大学まで来ることができる人。

(2) 募集方法

A校B校の同窓会を通じてチラシを配布し希望者を募った。応募は個人のスマホから Googlefoam により行うようにした。特別支援学校に在籍しているときはイベントの申し込みは紙で行ったり保護者が代理で行ったりすることが多かったが、申し込みについても大切な社会参加の体験と考え、参加者個人で行えるようにした。

以下は案内文である。

高等部を卒業した皆さんへ		令和5年9月	
<u>十文字学園女子大学 ライフカレッジ（案内）</u>			
高等部を卒業して、それぞれの場所で仕事をがんばっていることと思います。 楽しく仕事はできていますか？ 友達はできましたか？ さて、十文字学園女子大学では、高等部を卒業した皆さんが、大学で勉強できる機会を作りました。大学で勉強してみたい人は、以下の説明をよく読んで、申し込んでください。男女は問いません。			
1 日時と内容 令和5年10月～12月 全3回 すべて無料です。			
	日程	時間	内容
1回目	10月28日(土)	10:00～12:30	開会式 全体説明会 施設体験、キャンパスツアーなど
2回目	11月11日(土)	13:00～15:00	大学の活動を体験してみよう。 スポーツと音楽
3回目	12月16日(土)	10:00～12:30	Zoomを使って会議をしてみよう。 閉会式
※大学の学生食堂で食事をします。（実費）			
2 対象			
(1) 特別支援学校の高等部を卒業した人 (2) 大学のキャンパスで勉強してみたいと思っている人 (3) スマホを使ってメールで連絡ができる人 (4) 一人で大学まで行き、講座に参加できる人			
3 場所 （申し込んだ人には新座駅から大学までの地図を送ります。） 〒 352-8510 埼玉県新座市菅沢 2-1-28 十文字学園女子大学 7号館 1階ホールに集合			
4 申し込み方法と締め切り			
(1) 申し込み方法 QRコードより申し込んでください。			
(2) しめきりと定員 10月14日まで。 ※先着10名とします。早めに申し込んでください。 参加可能となりましたら、10月15日以降に連絡をします。			
5 問い合わせ 十文字学園女子大学			



(3) オープンカレッジの主な内容

オープンカレッジは3日間にわたって実施した。主な内容は①あいさつや発表等のコミュニケーション活動、②音楽やゲームなどの余暇活動の体験、③講義、の3つで構成されている。大学生とグループを組み、共に相談し工夫しながら活動できるようにした。毎回、大学生と一緒に学食で食事をしながらコミュニケーションを取る時間も設定した。

内容を決定するにあたっては、先行研究より明らかになった課題を基に、いくつかの新しい取り組みを入れることにした。

- ・zoom などオンラインの取り組みの学習。
- ・応募や連絡は ICT を活用して実施する。
- ・将来の余暇につながるよう、音楽等の活動を取り入れる。
- ・レジリエンスについて学ぶ。
- ・異性と適切な距離関係をもってかかわる。
- ・大学での活動を楽しむ。等である。

知的障害者の場合、突然の発表を求められると緊張してイメージをまとめられないことがある。発表の際には事前に発表シートを配布し、大学生と一緒に発表シートに考えをまとめたうえで意見交換をするように配慮した。初めは緊張していたものの、少しずつ慣れてくると、短いアドリブも入れることができるようになり、他者の前で落ち着いて発表することができるようになった。

自己紹介メモ

名前

今の仕事

好きな食べ物

趣味（しゅみ）

好きなアイドル

その他なんでも

(4) 実施するうえでの配慮点

個人情報の扱いには特に気を付け、表に記入してもらうとともに、一人ずつ聞き取りをして、写真撮影や掲載などについての許可を得ることにした。

全参加者から個人情報についての調書を得られた。1名から新聞やテレビなどに写真を写すことについては了解を得られなかったので、一枚ずつ確認をするようにした。

写真について

写真を写しても良いかを教えてください。

名前や会社名は出しません。

名前

1 記録のために写真を写す。 ☐よい ☐わるい

2 新聞やテレビが来た時に、写真を写す。 ☐よい ☐わるい

3 活動内容と活動の様子

(1) アンケート

特別支援学校の卒業生の余暇を知ることを目的として、令和5年10月にライフカレッジに参加した特別支援学校卒生に対して今の仕事の満足度や余暇に関するアンケートを実施した。また、令和5年11月にライフカレッジに参加した感想についてアンケートを実施し、同じくライフカレッジに参加した十文字学園女子大学の学生にもアンケートを実施した。参加者のアンケートは10項目とし、【とても思う、少し思う、どちらともいえない、あまり思わない、思わない】の5段階で評価してもらった。自由記述欄は2つの項目とした。

(2) 参加者のアンケートのまとめ アンケートの項目からいくつかの例を以下に示す。

	とてもあてはまる	あてはまる	どちらともいえない	少しあてはまらない	あてはまらない
今の仕事に満足していますか。	2人	3人	1人	0人	0人

	とてもある	ある	少しある	どちらともいえない	ない
今困っていることはあるか	0人	0人	2人	3人	1人
とてもある、ある、少しあると答えた方はどのような困り感ですか。	・職場に話し相手がいない。 ・作業の効率化と給料。				

	はい	いいえ
将来の夢はありますか。	4人	2人
どのような夢ですか。	・友達とルームシェア、石油王、カーデザイナー、車を買う、	

(3) アンケートの結果

- ① 仕事の満足度は「とてもあてはまる」と「あてはまる」をあわせると80%であり、今の仕事におおむね満足していることが伺えた。しかし、職場で困っていることが「ある」「どちらともいえない」を合わせた割合が50%であり、満足はしているものの何らかの悩みを抱えていることが分かった。具体的な記述では、「職場の人とうまく話せない」「作業スピードが日によって違う」等、コミュニケーションや急な変化への対応などで困っていることが明らかになった。
- ② 将来の夢に関する項目では、「夢がある」と答えた人は60%、「夢がない」と答えた人が40%であり、日々の生活に追われて、将来のことをイメージできない人がいることが分かった。
- ③ 余暇に関する項目では、休日にしていることは「ゲーム」が多く、他には「SNS」「映画」「カラオケ」等が多かった。休日にしてみたいことに関するアンケートでも、同様の回答が多く、趣味に関する広がりが出なかった。
- ④ 仕事の後の余暇についてのアンケートも同様で、職場と家庭生活の往復が多く、社会的な広がりを感じた。

アンケートの結果からは、仕事に関する悩みでは、障害の特性への配慮も必要であることがわかり、職場の中で相談役となってくれるキーパーソンを作る必要がある事が分かった。また、余暇に関する調査では、レパートリーが乏しいことが分かり、オープンカレッジのような生涯学習を通して、豊かな人生についても積極的に学んでいくことの必要性がある事が分かった。

(4) 実際の活動の様子

① 第 1 回 2023/10/28 (土)

時刻	内容	留意点
9:00	学生集合 会場準備	・ 正門で案内、看板は無し ・ 7 号館 4 階の案内 ・ 741 教室での案内
9:30	7 4 1 会場の準備	
10:00	開会式	・ 写真掲載の有無 ・ 写真撮影
10:10	自己紹介	・ 担当の参加者と内容を一緒に考えてから自己紹介をする。
10:20	連絡	・ ライフカレッジの目的などの確認
10:30	ゲーム	・ カードゲームでコミュニケーション
11:00	音楽体験 プロのキーナ 奏者と演奏	
11:40	アンケート	個人情報の保護とアンケート
12:00	昼食 各自相談をする。	・ 学生食堂を利用 ・ 買ってきた人は飲み物を買いに行く ・ 各自いろいろな話をする。
12:20	昼休み	・ 参加者同士自由に懇親を図る。
12:30	解散	
	片付け 反省会	



②第2回

2023/11/11(土)

時刻	内容	留意点
12:00	学生集合 会場準備	・正門で案内、看板は無し ・7号館4階の案内 ・教室での案内
12:30	741会場の準備	・コロナ対策で密にならないように ・前回と同じ席につかせる
13:00	はじめに	・写真掲載の有無 ・写真撮影
13:10	太鼓体験	・チームで移動する。 ・音楽に合わせて太鼓の体験 ・発表会
14:00	サッカー	・準備体操 ・キックとパス練習 ・ミニゲーム
14:40	講義「大切な力」とは レジリエンスについて	・教育学の講義
15:00	アンケート	・個人情報の保護とアンケート
15:20	次回予告	
15:30	解散	
	片付け 反省会	



③第3回

時刻	内容	留意点
9:00	学生集合 会場準備	・正門で案内、看板は無し ・7号館4階の案内 ・教室での案内
9:30	7 4 2 会場の準備	・コロナ対策で密にならないように ・前回と同じ席につかせる
10:00	本日の予定	・初めての参加者もいるので写真撮影のことについても再度確認をする。
10:10	パソコンを使った勉強とゲーム	・チームと教室を発表する ・各教室で LINE グループの設定 ・LINE を使って会議とゲーム ・活動が難しい時には大学生が援助をして任された仕事を完了させる。
11:50	昼食 各自相談をする。	・ローソンで相談をしながら。 ・買って来た人は飲み物を買に行く ・各自いろいろな話をする。 ・購入金額については参加者が中心になって決めるが、学生も相談に乗るようにする。
12:30	アンケート 閉会式	
	片付け 反省会	



(5) 倫理的配慮

本研究では、アンケートの回答は任意であることについて、本人に対して文書と口頭で説明した。個人の情報について配慮し、アンケートはこの研究以外で使用することはせず、使用後は処分することについても説明し、同意を得て回収した。

また、研究で使用する写真についても本人の同意を得て承諾書を書いてもらうことにした。

4 まとめ

本学の学生もライフカレッジにとっても楽しんで参加していた。同世代の障害のある男性と話す機会となり、このことも新鮮に感じたようである。特別支援教育を学んでいても実際に障害のある人とかかわることは経験が少ないので、とても良い機会だった。

知的障害のある人は一般的な自立した生活が苦手で意見交換をすることは難しい思っていたようだが、実際にかかわってみてこれまでの思いとは大きく変わったようである。

障害のある人の社会参加を積極的に増やすことの重要性を再認識するとともに、学生たちの成長が大きく感じられた実践であった。

ライフカレッジを終了した後の本学の学生からは以下のような感想が出された。

- ・創造性豊かで元気ある人ばかりで楽しかった。
- ・楽しかった。いろいろな経験をしている人のお話を聞くことができて知見が広がった。
- ・メンバーで和気あいあいと過ごすことができた。苦手なことや得意なことが分かってきた。
- ・初めて参加してみて、スポーツやグループワークを通してコミュニケーションが取れて楽しかった。自分が思っている以上に素直な人達で素敵な時間を過ごすことができた。
- ・太鼓もサッカーも全力で楽しんでくれて、運営している側としてもうれしかった。
- ・ライフカレッジに参加してみて、想像している以上にしっかりした方々だと感じた。身体能力やしゃべることについては個人差が大きいようでした。コミュニケーションに大きな支障はなく、生活する分には問題なさそうで楽しいひと時を過ごすことができました。

参加した特別支援学校の卒業生にとっても、本学の学生にとっても、共に意義のある活動だったと言える。

ライフカレッジについて埼玉新聞より取材があり、活動の様子が掲載された。充実して活動していることが伝えられ、障害のある人の生涯学習として大学での活動が有効であることを広めることができた。



2023年12月28日付 埼玉新聞

本活動は十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。

<参考文献>

- (1) 文部科学省 (2019) 特別支援学校高等部学習指導要領 (平成 31 年告示) .
- (2) 文部科学省 (2018) 学校基本調査.
- (3) 鈴木恵太ら (2010) オープンカレッジにおける知的障害者の生涯学習支援の取り組み. 東北大学教育ネットワークセンター年, 2010, 10, 15-25.
- (4) 岡野智ら (2010) オープンカレッジにおける知的障害者の生涯学習支援に関する意義. 東北大学教育ネットワークセンター年2010, 10, 27-36.
- (5) 野崎美穂・栗林睦・和田充紀 (2018) 知的障害特別支援学校に求められる教育課程編成の視点の検討. 富山大学人間発達科学部紀要 第 13 巻第 2 号, 319-333.
- (6) 文部科学省委託調査 (2021) 令和 2 年度「生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究」
- (7) 長谷川正人・田中良三・猪狩恵美子 (2015) 知的障害者の大学創造への道. 株式会社クリエイツかもがわ.
- (8) 障害者基本計画 (第 4 次) 内閣府.
- (9) 鈴木洸平・細谷一博 (2016) 成人知的障害者の余暇生活における現状と課題. 北海道教育大学紀要, 第 37 巻第 1 号, 181-190.

2023 年度「3D フードプリンターを用いたプロジェクトでの取り組み」報告書

Report on the 2023 “Project using 3D food printers”

吉澤 剛士¹⁾

Takeshi YOSHIZAWA

高谷 和成²⁾

Kazunari TAKAYA

1) 十文字学園女子大学人間生活学部 食物栄養学科 2) 同・食品開発学科

キーワード：3D フードプリンター、SDGs、地域連携、フードロス、食育

要旨：本学に導入された 3D フードプリンターの、授業、産学連携、保育園での食育活動など地域共同研究への応用を報告する。本プロジェクトは、2022 年度からの継続プロジェクトであり、本報告は、これまでの成果を踏まえて報告する（2022 年度の本学紀要と重複する部分は参考文献¹⁾として引用を明記した）。フードプリンターは、色々な食材や食べ物を通常の 3D プリンターと同じように造形する機械である。3D フードプリンターは、介護食、人工肉、昆虫食、防災食など幅広い分野への適応が見込まれている。しかし、実用化に関しては、フードインクの形状、かたさ、付着性の検討、事前調理方法、廃棄部位の利用などの研究が必要であり、本学学生が 3D フードプリンターを使いこなすことによって活動範囲が広がることが予想される。

1. はじめに

3D フードプリンターを用いたプロジェクトは、2022 年度からの継続プロジェクトである。本報告は、これまでの成果を踏まえて報告する。

2. 3D フードプリンターの概要の説明

3D フードプリンターは、世界的に急速に進展している「食のデジタル化」のキーデバイスとなる装置として注目されており、新たな食の価値を提供するとともに、食品廃棄や食料難といった社会問題解決にも期待されている²⁾。しかしながら 3D フードプリンターは一部の食材（フードインク）で実用化されているものの、様々な食材への利用は未だ研究途中の分野であり、3D フードプリンターの普及には様々な食材に利用できる汎用性フードインクの開発が不可欠である。

3. 本学における 3D フードプリンターの活用事例

1) インクの応用研究

現在実用化されているフードインクは、クッキー生地、パイ生地、アイシング、チョコレート、飴等がある。食材はペースト状のフードインクとして「ノズルから線状に吐出できる物性」と「吐出線が接着・積層して造形物を形成し、自重で崩れない形状を保持できる物性」が必要である³⁾。出力方法は、チョコレートのように加熱により流動性を持たせて吐出し、冷却により造形物を形成・保持させる食品とクッキー生地のように造形物と同じ物性で吐出する食品がある。実用化されているフードインクは水分含量が低く、ある程度のかたさがあるという特徴があるが、食材の多くは水分含量が高く、フードインクとして利用するには水分のコントロールが必要で、増粘・ゲル化材料の使用が不可欠になる^{4) 5)}。

増粘・ゲル化材料を利用したフードインクは、チョコレートのように加熱により流動性を持たせて吐出し、冷却により造形物を形成・保持させる出力方法が考えられるが、フードインクの原料となる食材、増粘・ゲル化材料は温度による物性変化は様々であり、各種食材のフードインク毎に適

正な温度設定が必要になり、条件設定が煩雑になるとともに吐出温度である 30～60℃の温度帯で長時間食材を保持することは衛生管理上好ましくない⁶⁾。

2) インクの調整「吐出・造形・調理」の方法

増粘・ゲル化材料を利用したフードインクを調整方法で3つに大別した。タイプⅠはチョコレートタイプで、加熱溶解後ゾル状態で吐出し、冷却によりゲル化造形しそのまま喫食する。タイプⅡはマッシュポテトタイプで、加熱溶解後冷却しゲル状態で吐出し、ゲル状態で造形しそのまま喫食する。タイプⅢはクッキータイプで、非加熱のゾルを吐出造形し、造形物を加熱調理して喫食する¹⁾。

ゼミでの研究では、出力時に温度管理の必要がなく、衛生面での安全性が確保できるタイプⅡとタイプⅢの汎用性フードインクの開発に取り組んでいる。タイプⅡは軟らかい料理であるソフト食やベビー食への利用、タイプⅢは一般食に近いテクスチャーで、様々な料理やパーソナル食への利用研究を進めている。水分含量 70%以上の TypeⅡ、TypeⅢフードインクの 3D 造形試験とテクスチャー解析をおこなった結果、フードインクとして利用できる物性値は、かたさが 3800N/m²以上でかつ付着性が 500J/m³以上の領域であることが先行研究と同等であることが確認された⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。

テクスチャー解析による「かたさと付着性の散布図」を図 1 に示す。

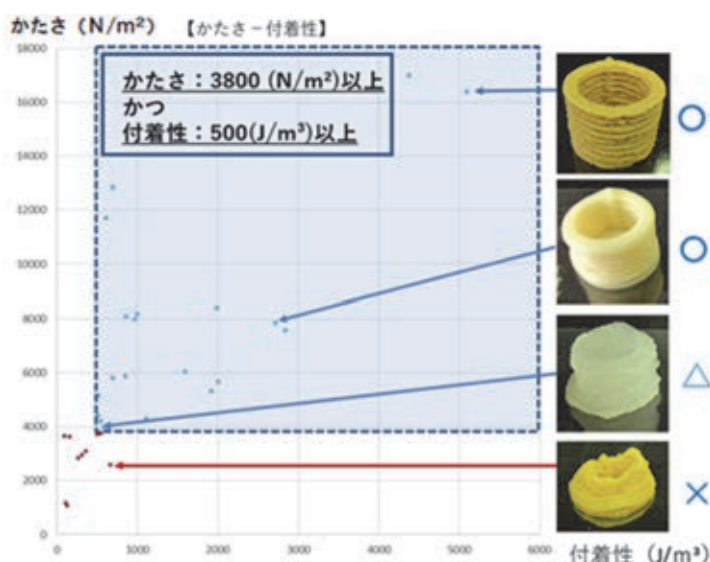


図 1 かたさと付着性の散布図

3) 産学連携

ゼミ研究で進めている汎用性フードインクの技術を応用した産学連携活動を説明する。2023 年 9 月に開催された FOOD 展 2023（惣菜・デリカ JAPAN）にて、IHI エアロスペース社は、協働ロボットを活用した 3D フードプリンターの技術紹介を初めて行った。将来的には宇宙ステーションでの調理器具としての利用を目指すプロジェクトである。

造形料理は十文字学園女子大学の学生たちが提案したメニューが 4 種類採用され、フルーツ、野菜、芋類、乳等計 16 種類の食材フードインクの開発を行った。各種食材毎にゲル化剤、増粘剤の添加量を調整し硬さと付着性をそろえることで求められる物性を発現できた（図 2）。

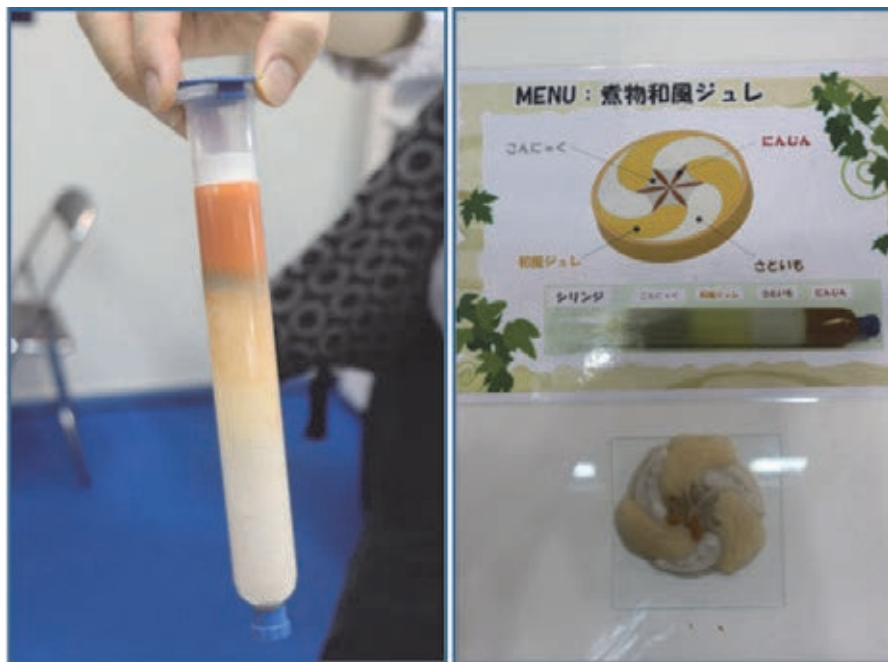
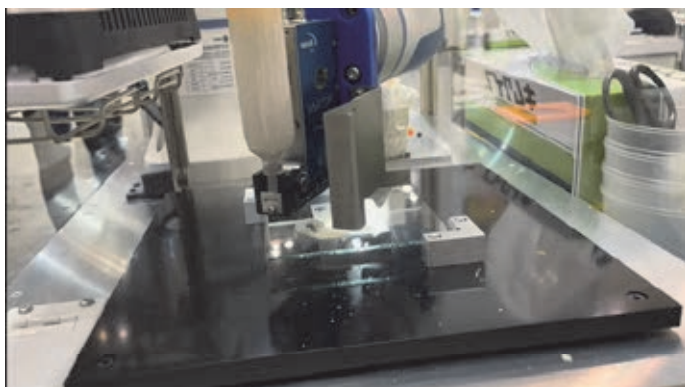


図 2 FOOD 展 2023 (IHI エアロスペース社) 展示物

2023 年 10 月に開催される食品開発展には三菱商事ライフサイエンス社との共同研究で得られたプラントベース食品の 3D 造形料理の紹介を三菱商事ライフサイエンスブースでおこない、十文字学園女子大学ブースではゼミ研究で得られた汎用性フードインクの応用技術を紹介する（図 3）。

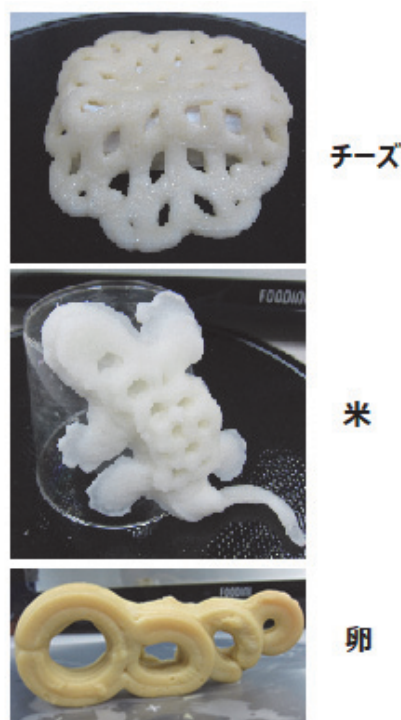


図3 食品開発展 2023 十文字学園女子大学 展示物

4) 地域での活用

次に上記で示した3Dフードプリンターの技術、スキルを活かした地域での活用を説明する。

①地域の保育園における食品廃棄の実態

地域の保育園における食品廃棄の実態を説明する（以下は参考文献からの引用となる）¹⁾。食品廃棄には3種類が存在する。1つは、食べ残し（残飯）や作り過ぎの余りである。1つは、本来食べられるにも関わらず捨てられているもの（必要以上に分厚く皮をむいている部分など）である。

もう1つは、じゃがいもの皮やバナナの皮など本来であれば食べない（食べられない）部分、つまり常用的には可食部とはみなされない部分である。地域の保育園では出来るだけ園児たちには好き嫌いを無くし、食べ物を残さないという食育に日々取り組んでいる。また地域の保育園では出来る限り食材を無駄にしないよう、可食部の最大活用に日々切磋琢磨している。よって保育園の給食の食品廃棄の大部分は、常用的には可食部とはみなされない部分であり、これが大量の廃棄物となっているのである。

②廃棄食材の3Dフードプリンター用フードインク化への試み

3Dフードプリンター用のフードインク化への試みを以下に報告する。単純に廃棄食材（バナナの皮やじゃがいもの皮など）をそのまま使用しようとしてもうまく行かないため、参考文献などの情報から、水分や小麦粉、キサンタンガム、グアーガムなどを配合することによる廃棄食材のフードインク化への試みを行った¹¹⁾¹²⁾。

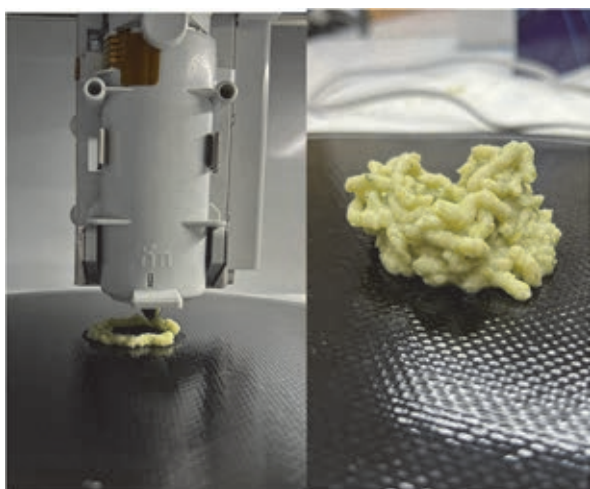


図4 廃棄食材のみ

廃棄食材のみでやってみたところ（図4）、形となって抽出されたものの所々詰まっていまい、途切れ途切れになってしまった。詰まってしまうのは食材の水分が足りなく、ペースト状になっていないからだと考えられた。

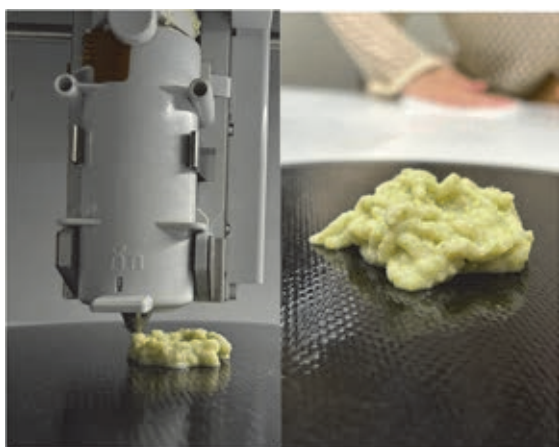


図5 廃棄食材+水

廃棄食材のみでは固くて少し詰まってしまったため、水を加えて実験したところ、途切れる回数は減ったが、反対に柔らかすぎてしまい、全体的につぶれたような形になってしまった（図5）。

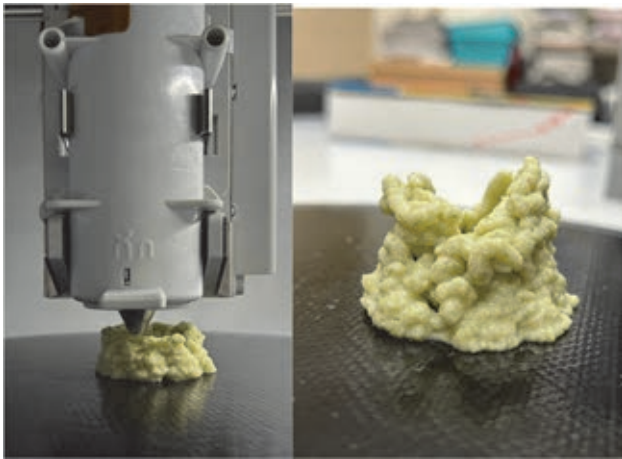


図 6 廃棄食材＋小麦粉

固形に形成するには粘弾性が必要と考え、グルテンが多く含まれる小麦粉を使用した。水を加えるよりは固まった（図 6）。



図 7 廃棄食材＋（キサンタンガム＋グアーガム：食材に対し 15%）

廃棄食材にキサンタンガムとグアーガムを 15%の割合で加えたところ、硬くなりすぎてしまい、3D フードプリンターが詰まり、出でこない状態となった（図 7）。

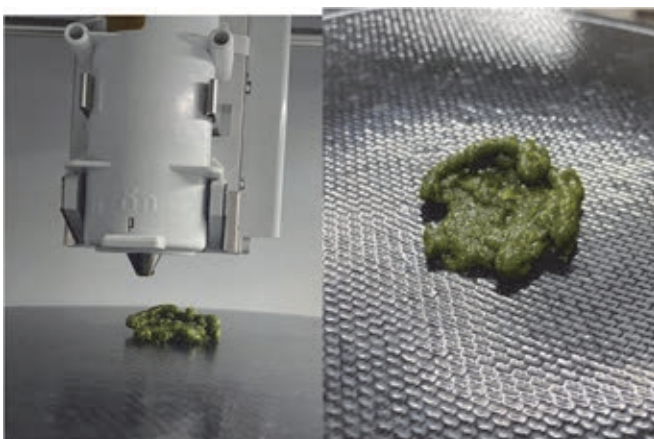


図 8 廃棄食材＋（キサンタンガム＋グアーガム：食材に対し 0.1%）

廃棄食材にキサンタンガムとグアーガムを 0.1%の割合で加えたところ、3D フードプリンターから出力してから時間が経つと崩れてしまい、立体的にならない結果となった（図 8）。

③食べ物を大切にするという食育に関して

3D フードプリンターを用いた廃棄物の再利用は、食材量の経費削減、食品廃棄の削減効果のみに留まらず、それらの工程を体感することにより、食べ物を大切にするという食育にも繋げて行けると考えられる。そういった新しい食育を行うことができることは、今後大きなアドバンテージの一つとなり得る。作成を試みている食育用の紙芝居の進捗状況を以下の図9に示す。

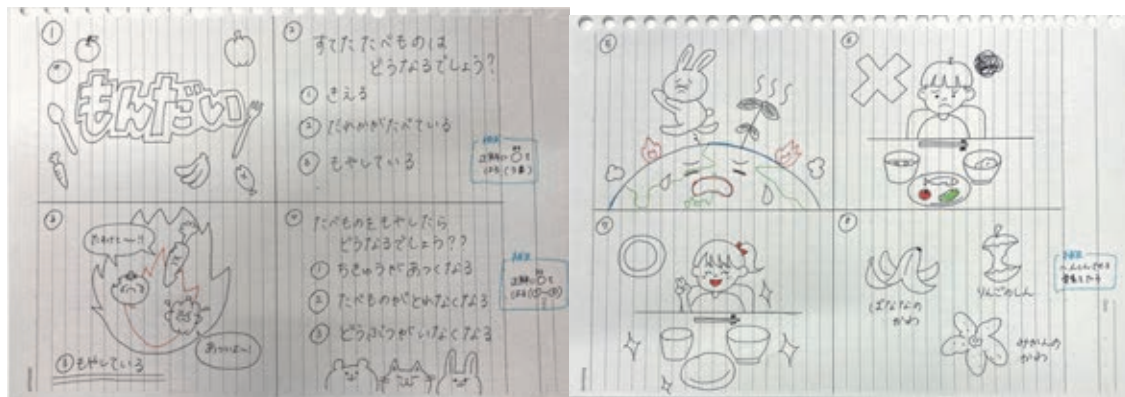


図9 食育用紙芝居の構想

4. おわりに

3D フードプリンターの活用はまだ始まったばかりである。3D フードプリンターで使える食材は現時点ではまだまだ限られており、何でもかんでも使えるという訳ではないため、廃棄食材を直ぐにそのままフードインクとして使うことは出来ないのが実情である。廃棄食材をどのようにしてフードインクとして使用可能にして行くかは、試行錯誤をまだまだ進めて行く必要がある。廃棄食材を再利用して行くことにより、SDGs2 番目の目標である、飢えをなくし、貧しい人も、若い子ども、だれもが一年中安全で栄養のある食料を、十分に手に入れられるようにすること¹³⁾¹⁴⁾の大切さを、食育を通して伝えて行くことは、地域における食品ロスの解決に繋がって行く可能性がある。

参考文献

- 1) 吉澤剛士、高谷和成(2022)「2022年度 3D フードプリンターを用いた地域連携プロジェクト実践報告」十文字学園女子大学紀要 vol. 53 121-127
- 2) 農林水産省 政策 OpenLab Food Tech チーム(2019)「FoodTech (3D フードプリンタ) の社会実装にむけて」
- 3) 堀内真美 (2021)「3D フードプリンタによる介護食の造形および造形物評価」化学工学 84 巻 5 号 239-242
- 4) 武政誠 (2019)「大豆たん白質を利用した食品 3D プリンタ用フードインクの開発」大豆たん白質研究 22 巻 35-39
- 5) 武政誠 (2020)「大豆たん白質を利用した食品 3D プリンタ用での高たん白質食の立体構造」大豆たん白質研究 23 巻 52-56
- 6) 設楽真理子(2015)「食品用 3D ゲルプリンタを用いた食の創成」日本機械学会論文集 81 巻 829 号 15-00008
- 7) 堀内真美(2021)「介護食などに適した軟質食品の 3D フードプリンティング：ごぼうピューレに添加したタンパク質とゲル化剤が吐出線と造形物の保形に与える影響」日本食品工業学会誌 22 巻 1 号 27-38
- 8) 堀内真美(2021)「3D フードプリンターで造形される巨視的な 3 次元構造による介護食品などに適した軟質食品の食感設計とその効果」日本食品工業学会誌 22 巻 4 号 119-134

- 9) 船見孝博(2011)「ハイドロコロイドを利用した食品のテクスチャーデザイン」日本バイオレオロジー学会誌 25 巻 3 号 149-159
- 10) 船見孝博(2012)「ハイドロコロイドによる食品のテクスチャーデザイン」日本食品工業学会誌 13 巻 1 号 1-12
- 11) 中村愛美 (2012)「食材の物性に及ぼす影響から見た市販とろみ調製食品の分類」栄養学雑誌 vol.70 No.1 59～70
- 12) 山崎ひろみ (2013)「半固形化した介護・治療食品の粘弾性挙動」東海大学工学部紀要 vol. 53, No1, 2013, pp. 7-12
- 13) 牧瀬稔 (2020)「地方自治体における SDGs の現状と展望」社会情報研究 第 1 巻 1 号 23-36
- 14) 荒井義則 (2019)「SDGs に関する一考察」国際経営論集 第 58 83-94

新座市における「ナッジ」を活用した食品ロス削減のための行動変容に関するプロジェクト

Project on Behavior Change for Food Loss Reduction with "Nudge" in Niiza City

芝崎 本実¹⁾ 鴨下 澄子¹⁾ 林 綾子²⁾ 石丸亜矢子³⁾
Motomi SHIBASAKI Sumiko KAMOSHITA Ayako HAYASHI Ayako ISHIMARU

飯塚 信一⁴⁾ 織茂 虎太郎⁴⁾
Shinichi IIDUKA Kotaro ORIMO

1) 十文字学園女子大学・食物栄養学科 2) 同・健康栄養学科 3) 一般社団法人循環型経済研究所
4) 新座市市民生活部環境課

キーワード：ナッジ 食品ロス削減 フードドライブ 行動変容 消費者行動 子ども食堂

要旨：フードドライブ活動を通して、「ナッジ」を活用した食品ロス削減のためのアンケート調査を行った。地域に根差したイベントを通じて、参加者からのアンケートより食ロス削減の改善策や問題点などを抽出することができた。さらに、食に関わる環境問題の意識や貢献度、関心度、フードドライブへの参加意欲などを評価することで、食品ロス削減の意識定着の啓発だけでなく、自らの意思で環境問題に取り組むきっかけ作りや寄付量の増加に繋ぐ知見を得ることができた。プロジェクトに参加した学生は、学内外のフードバンク活動を3回実施し、地域と関わりながら、食と環境問題がつながる学びを深めることができた。

Abstract: Through food drive activities, a questionnaire survey was conducted on food loss reduction using "nudges". Through the community-based event, we extracted improvement measures and problems in food loss reduction from the participants' questionnaires, and evaluated their awareness of food-related environmental issues, their level of contribution and interest, and their willingness to participate in the food drive, thereby gaining insight into how to establish awareness of food loss reduction, create opportunities to address environmental issues on their own initiative, and increase donations. The project also provided insight into how to increase the amount of food donations. Students who participated in the project were able to deepen their knowledge of environmental issues while engaging with the local community through three food bank activities both on and off campus.

1 はじめに

日本の令和4(2022)年度の食品ロス量は21年度比51万トン減の472万トンとなり、政府の目標(489万トン)を8年前倒しで達成したことがわかった。家庭系食品ロス量の減少は8万トンにとどまった。家庭から出る生ごみの中では、手つかず食品(直接廃棄)の割合が102万トンで食品ロス量全体21.6%に上り(農林水産省, 令和4年度推計値)、手つかずで廃棄されている食品を、フードドライブやフードバンクなどを通じて困窮者支援に活用する余地があると考えられる。

食品ロス対策では、フードバンクの活動団体数が近年増加しているにも関わらず食品取扱量は横ばいとなっており、支援ニーズに対応できていない現状を実感した。このような現状では、参加するインセンティブが働きにくい食品ロス対策や貧困支援に、市民参加を促すメカニズムや仕組みの解明が必要である。

そこで、社会課題の解決手段として注目されている「ナッジ」の活用に着目した。ナッジは行動科学の知見活用により、人々が自分自身にとってより良い選択を自発的に取れるように手助けする政策手法で、日本では環境省の日本版ナッジ・ユニット（BEST）を筆頭に省エネやごみのポイ捨て防止、がん検診の受診促進などで試行され始めている。食品ロス対策分野におけるナッジの活用では、ホテルのビュッフェで取り皿を小さくすることで食べ残しが 20%削減されたとの事例報告がある¹⁾が、日本でナッジの取組が始まったのは 2018 年とまだ日が浅いため事例自体が少なく、事業系ではなく家庭系の食品ロスにおいては、ナッジによる介入はまだ進んでいない²⁾。

本プロジェクトでは、新座市と本学学生が協力し、地域住民や本学在校生において、「ナッジ」を活用したフードドライブへの参加意識改革と行動変容に関して検証することを目的とし、地域におけるフードバンク活動に有用な知見を得るためにアンケート調査を行った。

2. 方法

2023 年 6 月より、新座市フードドライブ常設窓口（9 月～11 月）を含め、本学桐華祭（10 月）、新座快適みらい都市市民まつり第 48 回収穫祭（11 月）、高大連携プロジェクトエココロンチイベント（2024 年 3 月）などで自治体と地域住民、本学学生との関わりを持ちながら、フードドライブ活動を行った。その活動の中で、参加者にアンケート調査を実施し、どのような目的や理由で寄付品を提供したかなどの実態調査を行った。そして、フードドライブに関する意識調査、およびナッジを取り入れたポスターの啓発効果について検証した。アンケート調査では、フードドライブに参加した目的、家庭における食品ロス削減、フードドライブの取り組み、食品ロス削減の意識や行動変容についての 17 項目を設定した。

アンケートは Google forms を用い、任意で回答に協力した 225 人を対象に分析を行った。

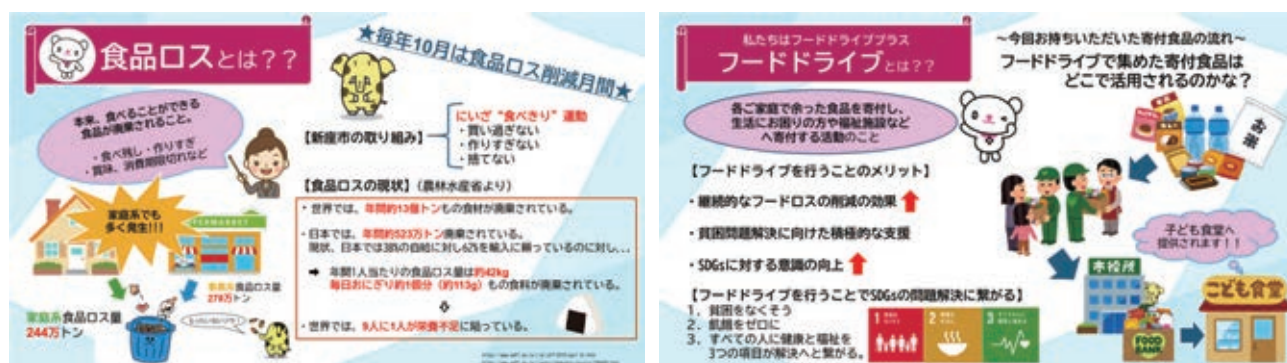


図 1 食品ロス削減の現状とフードドライブ活動についてのポスター

3. アンケートの集計結果

対象者は 10～20 歳代が多く、次いで 30～40 歳代と 50 歳代以上が同程度であった。さらに、本学で実施したイベントが多かったため、参加理由が学内の HP や SNS、知人や友人から誘われたという回答が多く、いずれの年代も女性が多く参加していた（図 2）。家族構成は、核家族が 70.2%、一人暮らしおよび三世帯家族が 11.6～12.0%であった（図 3）。

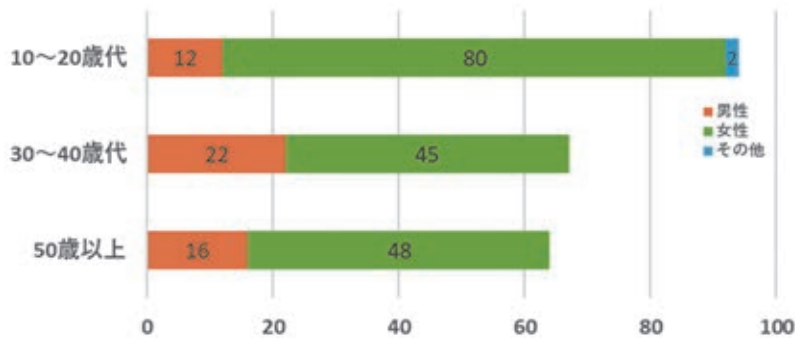


図2 参加者の性別および年齢

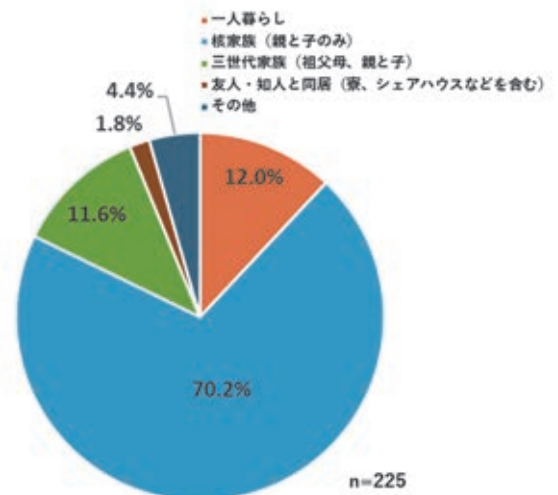


図3 家族構成

日本の食品ロス量について、事業系(工場や店舗など)ゴミと家庭系ゴミでは、どちらが多いかという調査では、事業系ゴミは 84 ポイント、家庭系ゴミは 104 ポイント、どちらも同じくらいが 25 ポイント、わからないが 12 ポイントとなり、家庭系ゴミと回答した人が最も多かった。昨今、SDG s の目標達成のために、環境省や農林水産省などの官公庁やメディアでは、環境問題に関するわかりやすい情報発信がされ、家庭における食品ロス削減方法や食材の無駄を見える化するアプリ、ツールの開発も進み、一般消費者がそれらの情報を容易に入手できるようになった。家庭内の食品ロス発生原因についても、自分自身と回答する人が 73.7%と最も多く、次いで、販売店が 16.9%となった。食ロス問題においては家庭内、さらに自分に要因があることを認識しており、行動変容や意識改革により、改善が図れる可能性があることが推察された(図4)。

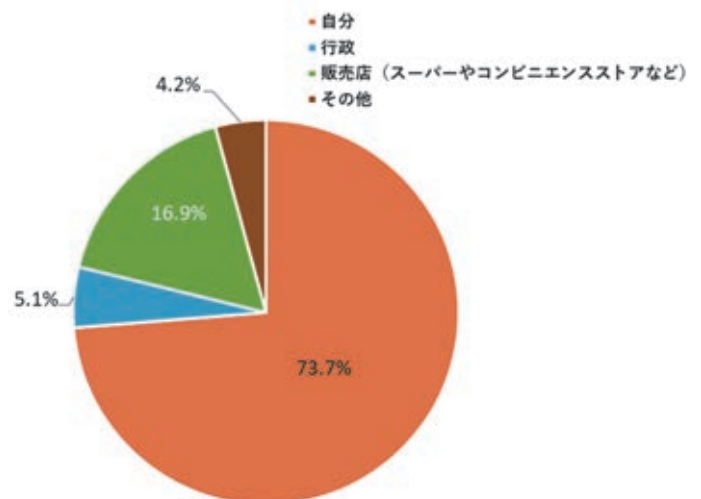


図4 家庭内の食品ロス発生原因は誰か？

次に、家庭で食品ロス削減を意識した行動を取ったことがあるかという調査では、「はい」が 91%、「いいえ」が 4%、「わからない」が 5%で、ほとんど人が食ロス削減のために何かしらの行動を取っていることが明らかとなった。「はい」と回答した人の具体的な行動は、「家にある食材は計画的に使うようにしている」や「必要な量を考えて食材を購入する」、「残さず食べるよう心がけている」、「料理が余った時は、次の食事で食べたり、作り直しをしている」と回答した人が 14~16%となり、必要な食材を購入し、食べる量を把握して料理を作るなど、計画的な食事を作ることで食ロス量を減らす努力をしていた。さらに、量販店での食材購入もお勤め品や消費期限の短いものを積極的に購入したり、購入した食材を長く保存できるための保管方法を実践している人も見受けられた(図5)。

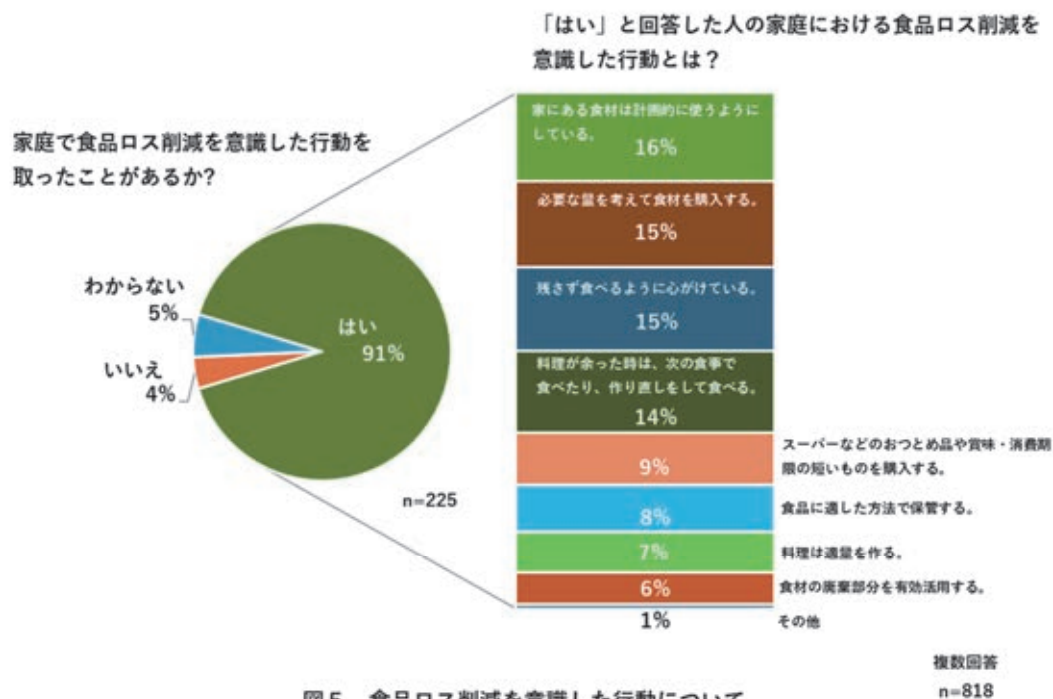


図5 食品ロス削減を意識した行動について

実際にフードドライブへ寄付品を持参した人の入手経路は、自分や家族が購入したものが多く、買いすぎた、買いまちがえたもの以外にも、寄付をしたいという回答も多くみられた。

寄付行動については、国際比較の視点からも日本の寄付行動の低調さは指摘されており、意識が低いと言われている³⁾。その中で、金銭的なインセンティブがなく、社会的圧力を与えないほうが寄付行動を促進できるとされている。寄付品を持参した人は、食ロス問題について意識が高く、集客性のあるイベントに参加することも目的に、フードドライブに寄付品を持参したと話していた。

食品ロス削減のための啓発方法として、本研究ではナッジ理論を活用したポスターを4種類作成し、参加者にフードドライブに参加したいという意欲が出るポスターを選択してもらった。

ポスターは、フードドライブ実施中という文言のあとに「ご家庭で不要な食品をフードドライブにお持ちください。」を見本とし、それに対して、Aは「日本の食品ロス量は年間522万トン、家計系からは247万トンにのぼります。」と実際の食ロス量を提示した。Bは「日本の食に関する温室効果ガス排出量は12%にのぼります。」と環境問題を訴求する文言とした。Cは「年間1世帯あたりの食品ロスによる損失は金額換算で約60,000円にのぼるといわれています。」と家計に直接的な影響が出ることを示した。Dは「世界では約8億人以上が飢餓に直面しており、日本の相対貧困率は15.7%にのぼります。」とし、世界の飢餓人口と日本の潜在的な貧困率を示した(図6)。



図6 フードドライブへの参加意欲を促すナッジを活用したポスター

フードドライブへの参加意欲を促すポスターとして、Aが58ポイントと最も多く、次いで、Cが46ポイント、Dが38ポイントとなり、Bは14ポイントと低かった。

AやBのポスターのように、食ロス量や食ロスによる家計に直接反映する金額を具体的に示すことで、個人の食ロス問題の意識を再認識し、家庭で食べきれない食品をフードドライブに寄付する行動へとつながる可能性が示された。飢餓や貧困率についても、フードドライブへの参加意欲を示すものだが、参加者からは「身近に貧困を感じられない。」や「世界の飢餓についての知識が乏しい。」などの意見があった。環境問題については、食ロス量と温室効果ガスの関連性がわからない、ガスの排出量が増えることによる環境へ影響を示した方が良いなどの意見があった。

各ポスターでは、「フードドライブに参加する意欲が高まった」という回答もみられたが、全てのポスターにおいて「世界の問題を知り、自分も何とかしなければと思った。」という回答が最も多く、次いで食品ロス削減対策において「様々な取り組みから始めることができることを知った。」となった。食ロス問題について、様々な媒体を通して、個人レベルの具体的な事例や数字を示し、取り組み方法を掲示することで、食ロス削減対策への行動変容や意識改革につながる可能性が示唆された(図7)。

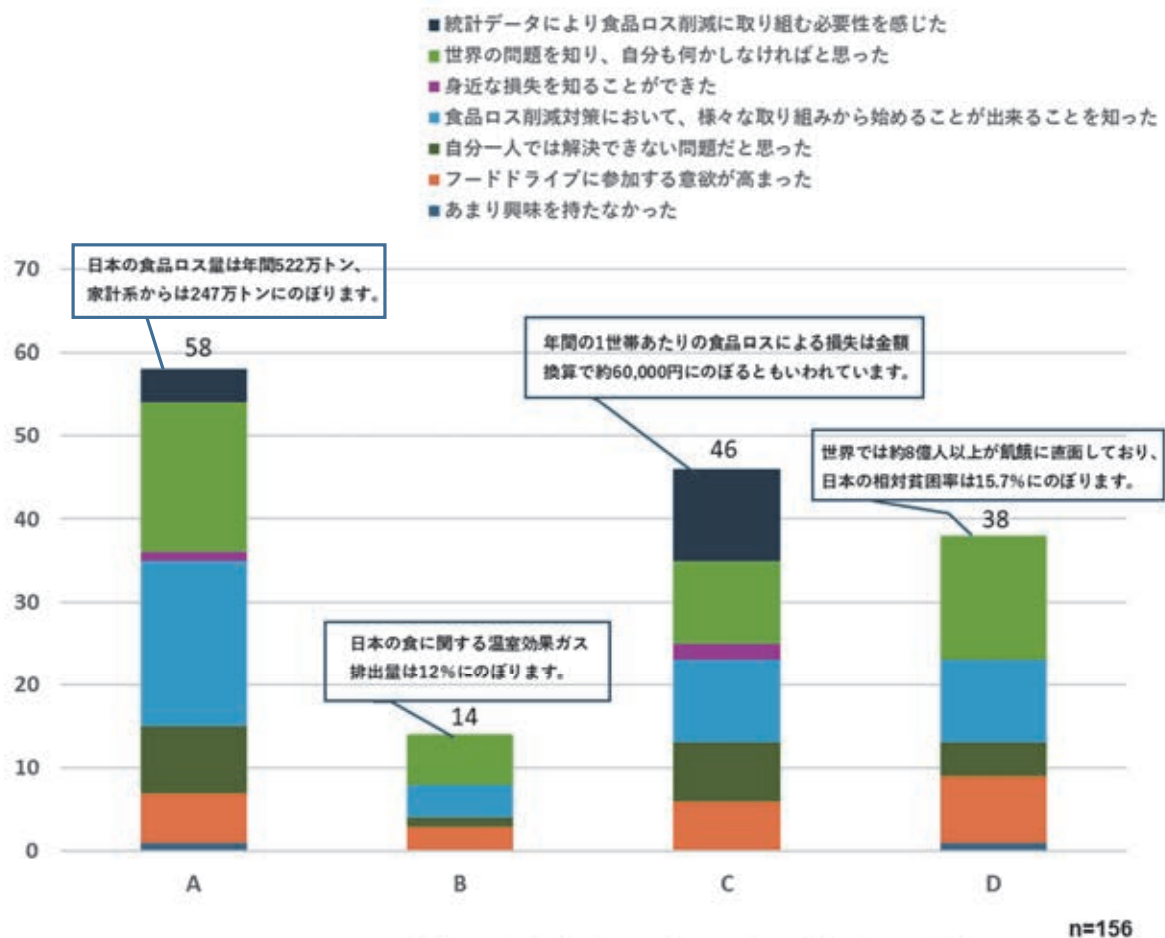


図7 フードドライブに参加しようと思えるポスターの選択

4. フードドライブ活動を通じた地域と学生とのかかわり

桐華祭（2023年10月）では、学生が主体となり、1号館ピロティーにて、国内外の食品ロス事情やフードドライブの仕組みを示したポスターを掲示し、寄付品の受け取りブースやパンフレット等を配布する会場を設置した。準備を進めていく過程で、食品ロス削減に向けた解決策や国内外の事情、ナッジ効果への期待を学修し、それらを桐華祭当日の参加者へ説明をしながら、寄付品の回収を行っていた。初めての参加者には、ポスターやパンフレットを活用しながら説明し、次のフードドライブへの参加を促していた。さらに、本学学生だけではなく、高校生や教職員の方との交流をしながら、フードドライブ活動の意義や有用性について、説明をしていた（図8）。

新座快適みらい都市市民まつり第48回収穫祭（11月）では、一般来場者として、幅広い年代の方が市政や市報を見て、フードドライブに寄付品を届けに来ていた。高齢者の参加もあり、自宅に寄付したい食品があるが、重くて持ち歩けないなどの理由も伺えた。フードドライブは基本的には自身が持参するか、団体へ郵送するかである。誰でも気軽に食品を寄付できる回収方法を構築する必要があると思った（図9）。

高大連携プロジェクトの「エココロランチタイム」（2024年3月）では、フードドライブで寄付品を持参した方へ、エココロランチを提供するプロジェクトに協力した。

教職員を対象に、改めて食品ロス削減の喫緊課題を提示し、SDGs達成に向けての個々人の努力を促した（図10）。

将来、食に関わる職業人となる学生は、この活動を通して、食に関わる環境問題を深く理解し、地域に根差したイベントで多くの人と触れ合いながら、フードドライブ活動を行っていた。

寄付品数は、合計で 45,000 食以上となった（企業協力あり）。新座市役所が回収し、新座市内のフードバンク団体を通して、子ども食堂へ配布された。

食品の寄付は年々減少傾向が見られ、子ども食堂の運営や貧困家庭への食支援も切迫しているといわれている。この活動を通して、学生はナッジによる食品ロス削減への行動変容や意識改革の有用性を認識し、産官学が協働でフードバンク活動を実施することで、効率化や寄付品の収量増、環境問題への意識定着などの利点もあることを理解できた。



図 8 本学桐華祭におけるフードドライブと寄付品を預けている参加者



図 9 新座みらい快適都市市民まつり第 48 回収穫祭におけるフードドライブ活動



図 10 高大連携プロジェクト「エココロランチタイム」におけるフードドライブ活動

今後、栄養士・管理栄養士の視点から環境・栄養・調理を踏まえたオリジナルレシピを作成、媒体物として配布する予定である。新座市からの情報やフードドライブで寄付された食品を基に、新座市役所環境課、子ども支援課と意見交換しながら、食品分類別の活用しやすいレシピを考案する予定である。

5. 参考文献

- 1) 野々村 真希「家庭の食品ロスと消費者一意識・行動の実態と行動変容のための介入」
廃棄物資源循環学会誌 (31) 4, pp253-261 (2020)
- 2) 村上 智美, 細井 菜穂子, 太田 雅規「健康的な食品の選択をナッジする：食堂における効果の検証と倫理的課題の一考」日本食育学会誌 (16) 3, pp121-128 (2022)
- 3) 善教将大・坂本治也「何が寄付行動を促進するのか-Randomized Factorial Survey Experiment による検討」公共政策研究 (17) , pp96-107 (2017)

フレイル予防のための地域在住高齢者への食支援 ～美味しく作りやすいメニューの提案～

Dietary support for community-dwelling elderly people to prevent frailty
～Delicious and easy-to-prepare menu suggestions～

岡本 節子¹⁾
Setsuko OKAMOTO

古明地 夕佳¹⁾
Sekika KOMEIJI

1) 十文字学園女子大学 食物栄養学科

キーワード：地域在住高齢者 サルコペニア フレイル 食支援 メニュー

要旨：新座市の自主的体操教室で活動する、単身者世帯、高齢者夫婦世帯の地域在住高齢者を対象に、美味しく作りやすいメニューを提案し、低栄養、骨粗しょう症等のフレイル予防のための食支援を目的に、「災害時におけるフレイル予防」、「大豆製品を使用した高血圧予防」の2つをテーマとした「高齢者向けレシピ」を考案し、レシピ集を作成した。

本プロジェクトは2023年度が1年目であり、対象者が限られていることから課題が多いが、本学科では、卒業後、高齢者を対象に栄養管理、栄養食事指導を実践する学生も多く、高齢者に対する理解を深めるきっかけとなることを期待し、今後も研鑽しつつ学生とともに地域での活動を継続したいと考える。

1 はじめに

総務省が発表した人口推計（令和4年10月1日現在）によると、総人口に占める高齢者人口の割合（高齢化率）は29.0%（前年28.9%）となり、今後さらに高齢化率は上昇を続け、令和19年に33.3%となり、3人に1人が65歳以上の高齢者となることが予測されている。高齢者の増加に伴い、身体機能の低下、認知機能の低下により要介護高齢者が増加している。65歳以上の高齢者がいる世帯のうち過半数が単身者世帯及び高齢者夫婦世帯であることから、個々人が自立した高齢者でなければ在宅で生活することは困難な状況である。75歳以上の後期高齢者が増加する我が国では、健康寿命と平均寿命の差は、男性8.73歳、女性12.06歳であり、「21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）」においては、介護を必要せずに自立した生活を送れる健康寿命を延伸し平均寿命との差を縮めることが重要な課題となっている。

健康寿命の妨げになるものには、サルコペニア、ロコモティブシンドローム、フレイルが挙げられる。サルコペニアとは、加齢による骨格筋量の減少に、筋力の低下あるいは身体機能の低下が併発した状態であり、加齢、運動、疾病、エネルギーおよびたんぱく質の摂取不足による栄養が起因し、サルコペニアは身体的フレイルの要因となる。よって、高齢者はサルコペニアに陥らぬよう、十分な栄養摂取や運動によって筋肉量を増やし、筋力を強くすることでサルコペニアの進行を抑制することは重要である。

2 新座市自主的体操教室

新座市では、地域在住高齢者が自主的に集会所を利用し、野火止四丁目集会所（いきいきシニア）、東一丁目集会所、東三丁目集会所（百歳体操会）などで体操教室を週1回開催している。そこでは、レジスタンス運動を取り入れた筋力の維持・増進のための体操を行っている。2015年から2018年まで、十文字学園女子大学長澤伸江名誉教授は、野火止四丁目集会所（いきいきシニア）の自主的体操教室に通う高齢者を対象に、身体計測（身長、体重、体脂肪率、四肢骨格筋量、骨密度等）、身体機能調査（5m歩行速度、Timed up & Go、30秒立ち上がりテスト、ファンクショナルリーチ等）

及び3日間食事調査研究を年2回実施し、結果を報告して地域在住高齢者の健康の維持増進のための一翼を担っていた。その後2020年2月の新型コロナウイルス感染症が蔓延するまで身体計測等の調査を岡本らが継続していた。

新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行後、2024年9月に調査研究再開のための予備調査を行った。その際に、体操教室に通う地域在住高齢者の方々の世帯については、「ひとり暮らし」が最も多く全体の33.3%であり、普段の生活の中できになること・億劫になったことでは、「体力の衰えを感じる」52.4%、「買い物（重いものを持つのがつらい）」33.3%、新型コロナウイルス感染症の流行前と比べてこの3年間で変わったことについては、「体力が落ちた」61.9%、「外出の回数が減った」52.4%、「散歩に行く回数が減った」47.6%、「友人や他者と集まる機会が減った」42.9%であった。ひとり暮らしが多く、体力の衰え、買い物が億劫、外出の機会が減少した該当者が多いことから、低栄養や筋力の低下の恐れがあり、地域在住高齢者への新型コロナウイルス感染症の影響は大きいものであったと考えられる。

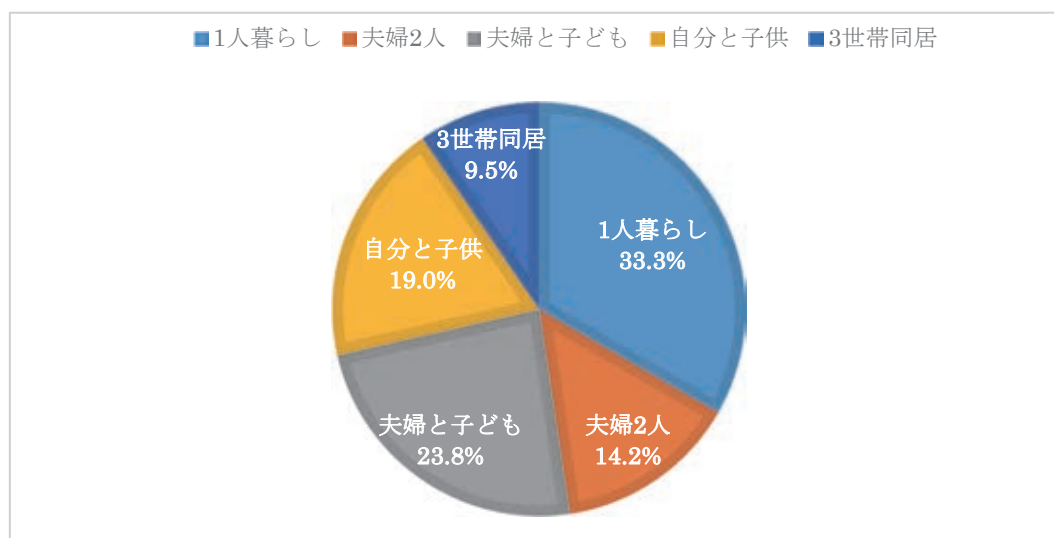


図1. 世帯構成

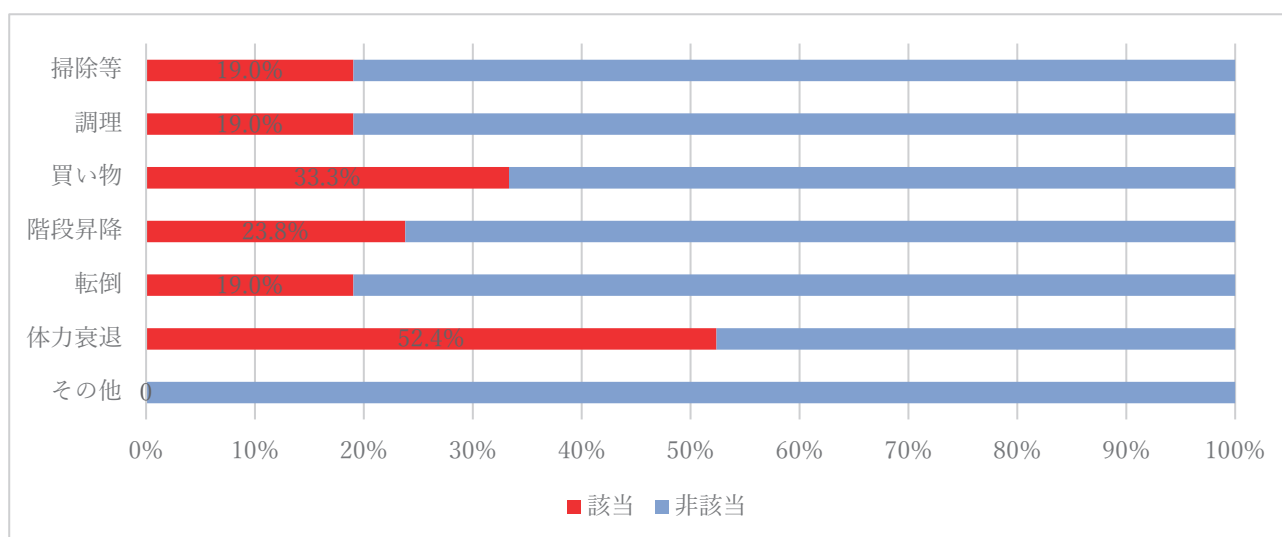


図2. 普段の生活の中で億劫になったこと

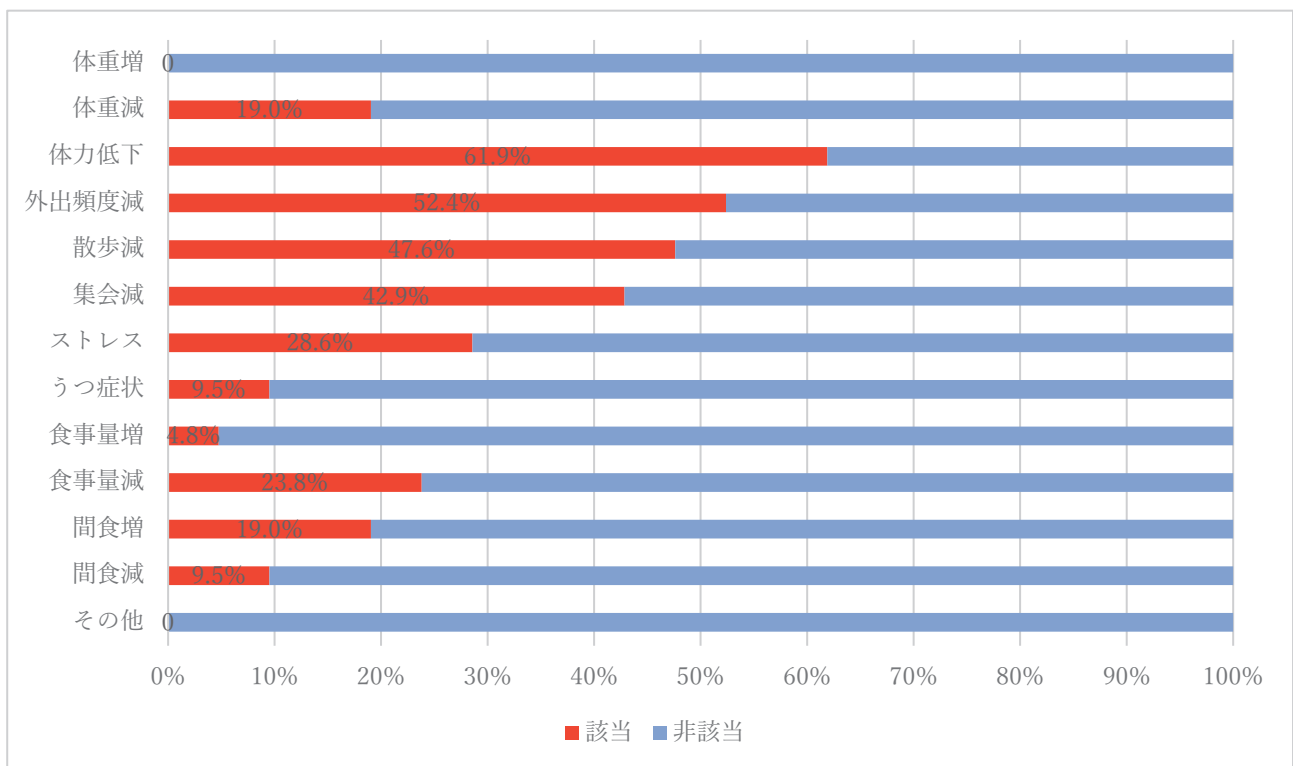


図3 新型コロナウイルス感染症の流行前と比べてこの3年間で変わったこと



写真1 自主体操教室の様子



写真2 身体機能調査



写真3 聞き取り調査の様子

3 プロジェクトの目的

本プロジェクトは、新座市の自主体操教室で活動する地域在住高齢者、特に単身者世帯、高齢者夫婦世帯を対象に、前述した調査をもとに、現状に即した美味しく作りやすいメニューを提案し、低栄養、骨粗しょう症等のフレイル予防のための食支援を目的としている。高齢者の食生活の特徴として、独居や高齢者だけの世帯になると、同じものばかり食べる、買い物や調理が億劫(おっくう)になる、食事そのものへの関心が薄れ、食生活が単調になってしまう、食事の回数が減る、といったことが挙げられる。フレイルに陥る前に食生活の改善を図る必要があることから、メニューの提案は、地域在住高齢者が介護を必要とせずに自立した生活を送れる健康寿命の延伸に寄与すると考えられる。今後は地域在住高齢者のみならず、対象者を広げていくことを検討している。

4 方法

今年度は学生の2グループがそれぞれ献立のテーマを決めて、主食、主菜、副菜、汁物などの1品料理を考案し、試作を繰り返してレシピ集としてまとめた。

災害時におけるフレイル予防のレシピ

①背景・目的

大地震や水害などの災害時には、災害からは助かったものの長期にわたる厳しい環境下での避難生活で体調不良により亡くなる方が多くいた。特に高齢者は食形態が適していないことから食事摂取困難になり低栄養となり、身体活動の減少によって筋力が低下すると身体的フレイルが進行しやすくなることが問題であると考えられる。また、災害時にはライフラインが止まった状態で限られた調理器具を用いて使用可能な食品を効率よく使用することが求められる。特に生鮮食品については、冷蔵保存ができなくなることを考慮し、災害発生後すぐに使用することが望ましい。そこで、災害時にわずかな調理器具を用いて貴重な食材を無駄にすることなく、高齢者を対象としたフレイル予防に繋がるレシピを考案した。

②災害時の調理・食事

1) 最初に冷蔵庫・冷凍庫にあるものを食べる。

停電になると冷蔵庫が使用できなくなるため、冷蔵庫内の肉や魚など痛みやすいものから食べることが望ましい。食材料を調理するカセットコンロを用意しておくことが必要である。また、断水となることも予測されるため水は多めに備蓄しておく。農林水産省「災害時に備えた食品ストックガイド」では、飲料水と調理用水を一人当たり1日3リットル備蓄することが推奨されている。備蓄の目安は1日3リットル×7日×家族の人数分とされている。

2) 次に普段買い置きをしている食材を食べる。

乾麺（パスタ、そうめん、うどん、カップ麺など）、乾物（のり、ひじき、わかめ、ドライフルーツ、切り干し大根、干しシイタケなど）、日持ちのする日常食を食べる。

3) 非常食を食べる。

普段食べている食材が全部なくなったらカレー、パスタソース、牛丼、親子丼などのレトルト食品や、フリーズドライ食品災害用食品を食べる。

③調理方法

ライフラインが止まった時でも、少ない調理器具を用いて簡単に温かい料理が作れるパッキング方式を用いた。生活用水の使用を控えつつ衛生的に調理ができるように工夫をした。使用器具は高密度ポリエチレン製ポリ袋、サランラップ、鍋、水、コンロ、キッチンばさみ、まな板のみを使用した。

【パッキングの基本手順】

1) 空気をしっかり抜く。

高密度ポリエチレン製ポリ袋に食材料、調味料を入れ、袋からしっかりと空気を抜く。食材を入れた袋を鍋の水に沈め、水圧を使って空気を抜く。

2) 袋に食材を入れすぎない。

ひと袋に入れる食材は 1~2 人分を目安とする。袋がふくらむため、食材を入れ過ぎないようにする。たくさん作るときは袋の数を増やす。

3) 袋は上の方で結ぶ。

加熱の際に空気が膨張してふくらむため、袋の破裂を防止するよう上の方で結ぶ。空気を抜いたポリ袋をくるくるとねじって袋の上部を結ぶとよい。

4) 食事を入れた袋の厚さを均一にする。

熱が通りやすいよう、袋の厚さが均一になるように広げる。

5) 鍋底に熱で袋に穴が開かないように注意する。

袋を二重にする、もしくは鍋底に皿を敷いて穴があくのを防止し、水を張った鍋に袋を入れる。

6) 沸騰したら弱火~中火で加熱する。

長時間の高温加熱を行うと袋が破れる恐れがあるため、沸騰後は弱火もしくは中火で加熱する。

④結果

【主菜】

米飯、鯖缶のトマトカレー、蒸しパン（プレーン、抹茶、紅茶）、トマトパスタ、ツナ和風パスタの 5 種類。

【主菜】

ハムとほうれん草のオムレツ、鶏肉のトマト煮、鶏ハム（プレーン、カレー味）、バンバンジー、デミグラス風ハンバーグ、ミートボール、肉豆腐、豚バラ大根、煮魚、南蛮漬け、鮭のちゃんちゃん焼き、肉じゃがの 12 種類。

【副菜】

大根とにんじんの煮物、高野豆腐の煮物、茄子の煮浸し、なます、コールスローサラダ、塩昆布キャベツ、粉ふきいも、ポテトサラダ、かぼちゃとコーンのサラダ、かぼちゃの煮物、大豆と桜エビのマヨネーズ和え、大豆とひじきの煮物、中華きゅうり、きゅうりとわかめの酢の物、もやしナムル、切り干し大根の煮つけの 16 種類。

【汁物】

中華スープ、ミネストローネ、ポトフ、鯖缶の冷汁、けんちん汁、しめじと豆腐の味噌汁、豚汁の 7 種類。

【デザート】

豆腐と抹茶のういろう、卵プリン、水ようかん、パインゼリーの 4 種類。



写真 3,4 学生によるレシピの試作

大豆製品を使用した高血圧予防のレシピ

①背景・目的

わが国における死亡原因は、老衰を除いて悪性新生物、心疾患、脳血管疾患で約半数を占めている。これらの疾患は生活習慣と深いかわりがある。生活習慣病のなかでも高血圧は病院での受診者数が最も多いが、自覚症状がないため放置しやすく心筋梗塞や脳梗塞を引き起こす原因となる。

高血圧はナトリウム制限を必要とするが、高血圧と大豆製品の摂取に関する研究に、大豆に含まれるイソフラボンが血圧を低下させる効果があると報告されている。大豆製品は日本人には身近な食材であることから、高齢者にとって手軽に美味しく食べられる食品であると考えた。よって、大豆製品を用いた高齢者向けのレシピを考案した。

②大豆について

大豆たんぱく質の摂取は、動物性たんぱく質の摂取に比べ、血清総コレステロール、LDL コレステロール及びトリグリセリド値を有意に低減する。さらに、大豆イソフラボンが血管の弾性を高め、動脈硬化を低減し、血圧の上昇を抑制する。その効果はいくらか低いが豆腐としても同様の効果が期待でき、血圧の上昇を抑えるといわれている。納豆は納豆キナーゼが血液凝固を抑制するため、血栓防止に役立つとされている。

③方法

高齢者向けの食事であることから、次の点を注意してレシピの考案をした。

- ①筋肉量の維持増進のため、たんぱく質量の多い料理とした。
- ②酸味の強いもの、喉に張り付きやすいものは誤嚥のリスクがあるため除外した。
- ③作りやすく手間のかからない料理にした。

④結果

大豆、豆腐、厚揚げ、納豆、豆乳を使用したレシピを考案した。

【大豆】

大豆のトマトカレー、にら大豆餃子、キャベツとチキンと大豆のトマト煮込みスープ、大豆の卵とじの4種類。

【豆腐】

なめこと長いもの豆腐グラタン、ささみと豆腐の唐揚げ、豆腐のぐにゃ煮、木綿豆腐のデザート、豆腐のマフィンの5種類。

【厚揚げ】

厚揚げのきのこあんかけ、厚揚げのごまみそ焼きの2種類。

【納豆】

納豆とチーズの焼き春巻き、納豆焼きの2種類。

【豆乳】

豆乳かぼちゃスープ、豆乳プリンの2種類。

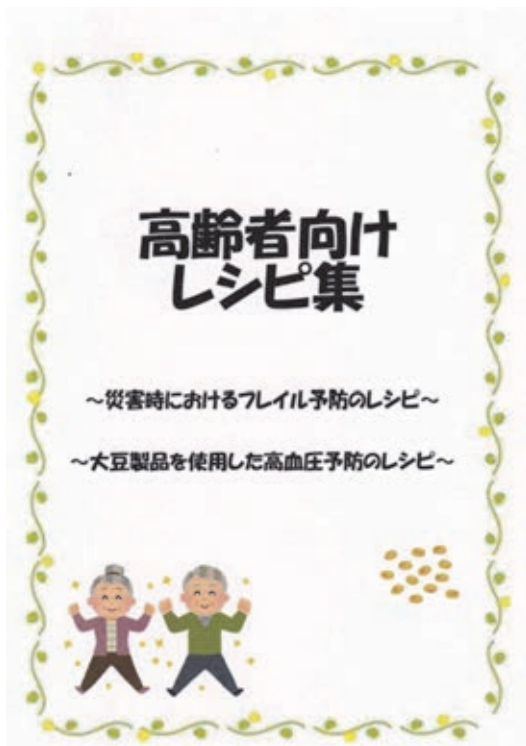


図4 高齢者向けレシピ集

5 まとめ

新型コロナウイルス感染症は5類となったが、それまでは自主的体操教室で活動する地域在住高齢者と交流することができず、2023年9月に3年ぶりに予備調査を行った。コロナ禍での3年間は高齢者にとっては、感染防止のための不要不急の外出自粛などの結果、高齢者の健康面への影響が考えられ、地域活動が中止に追い込まれて人との交流も少なくなっていた。必然的に刺激のない生活不活発に陥りやすいなどの課題も多かった。ようやく地域活動の再構築が進められてきた。2年前から、コロナ禍で地域在住高齢者にどのようなフレイル予防の支援ができるのかを検討し、高齢者向けのレシピ集を作成して配布することとした。

「災害時におけるフレイル予防のレシピ」については、東日本大震災レベルの大震災が起こることを想定して、災害時であっても栄養面を考慮した高齢者向けフレイル予防のレシピを作成した。

「大豆製品を使用した高血圧予防のレシピ」は高齢者に多い高血圧予防のレシピを作成した。学生が高齢者のレシピを考案するにあたって難しい思われたことは、嗜好、ニーズが実際に高齢者に見合っているのか、また高齢者にとって本レシピは本当に手軽に作れるのかという点であった。試作をしながら、試行錯誤で行われているが、今後はレシピ集を配布した地域在住高齢者から意見を伺いながら検討していきたいと考えている。レシピ集は、2024年9月に実施予定の自主的体操教室に通う地域在住高齢者の身体計測、身体機能調査時に配布を予定している。

本プロジェクトは2023年度が1年目であり、対象者が限られていることから課題も多い。本学科は卒業後、高齢者を対象に栄養管理、栄養食事指導を実践する学生も多く、高齢者に対する理解を深めるきっかけとなることを期待している。今後も研鑽しつつ学生とともに地域での活動を継続したいと考える。

《参考・引用文献》

- 1) 厚生労働省：国民生活基礎調査, 2022
- 2) 厚生労働省：令和元年簡易生命表, 2019
- 3) 農林水産省：災害時に備えた食品ストックガイド, 2019
- 4) 農林水産省：要配慮者のための災害時に備えた食品ストックガイド, 2019
- 5) 農林水産省：時短にも非常時にも！パッククッキング
<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/foodstock/imadoki/imadoki01.html> , 2024.6
- 6) 菅野道廣、高松清治：大豆の生理活性成分とその効用, 2004

地域との連携による多様性交流サロン「みんなのひろば☆きらり」の実践

Practice of the diversity exchange salon "Minna no Hiroba ☆ Kirari"
in collaboration with the local community

人見優子¹⁾
Yuko HITOMI

山口由美²⁾
Yumi YAMAGUCHI

川瀬基寛³⁾
Motohiro KAWASE

1) 十文字学園女子大学・人間生活学部人間福祉学科 2) 同・人間生活学部人間福祉学科

3) 同・社会情報デザイン学部社会情報デザイン学科

キーワード：居場所づくり、多様性、地域連携、主体性、持続可能

要旨：多様性交流サロン「みんなのひろば☆きらり」は、持続可能な地域のサロンとして、月1回の活動を実施している。本研究では、「学生運営委員の実践活動状況」「学内連携における活動実践の効果」「地域のニーズを反映した活動」の3点に着目し、今後のあり方を検討していくことを目的としている。

本報告では、2023年度の活動内容と地域との連携の実際からみた活動状況について整理した。「みんなのひろば☆きらり」が、地域のニーズに応え、だれでもが集える居場所となるよう今後も継続していきたい。

1 はじめに

「みんなのひろば☆きらり」（以後、「☆きらり」）は、2019年～2021年、地域の居場所づくりを視野に「地域の一員として大学から地域に出て活動する」「多世代、多様な人々と交流する場を設ける」ために、地域の理解を得ながら活動を検討してきた。A市内B地区にある「Cひろば」は、D市E団地にも隣接しており、高齢化がすすんだ地域である。地域の方からは、引きこもりや防犯上の課題、都市部への交通が不便なことなどをヒヤリングし、2022年に「Cひろば」での活動を開始した。月1回の活動を継続し、2024年3月には、第23回を迎えることができた。

「☆きらり」では、地域の方々のニーズを把握し、だれでもがぶらっと立ち寄れるサロンであることを大切にしたい。毎月、作品作りや健康体操、季節の行事など、「Cひろば」に集まった方々と実施しているが、平行して、地域住民全体でできることも実施してきた。2023年度には、地域のニーズから、サロンの名前を募集し、投票により「みんなのひろば☆きらり」と命名した。また、地域の方から下案とともに、「ゆるキャラあさごんを作りたい」との声があった。そこで、B地区だけではないとの理由から「ゆるキャラあさごん」を考案することにした。「あさごん」の作成においては、地域の方の下案を本学社会情報デザイン学科の学生がキャラクター化し、8つの案をもとに、住民投票を実施した。そして「幸せ（四葉のクローバー）」で「愛情（ハートの目）」にあふれた、「地域に愛される（人参フォルム）」あさごんが誕生した。喜ばしい活動に反して、住民参加型の「☆きらり」ではあるが、新しい顔ぶれの参加者が増えにくく参加者が固定化し、“多様性”には程遠い状況にあった。これらの経過を踏まえ、2022年度の活動状況を報告書（佐藤：2023）にまとめた結果、課題もあることがわかった。

そこで本研究では、①「学生運営委員の実践活動状況」、②「学内連携における活動実践の効果」、③「地域のニーズを反映した活動」の3点に着目し、「☆きらり」の今後のあり方を検討していくこととした。

2 2023 年度「☆きらり」の活動内容

2023 年 4 月は、第 12 回の活動から開始した。毎月の活動等について以下にまとめる。

回	活動日	テーマ	活動内容
12	2023/04/22	子どもの日	五月人形飾り コースター作り
13	2023/05/27	梅雨を先取りしよう	てるてる坊主づくり
14	2023/06/24	七夕	七夕飾りの作成 笹への飾りつけ ぷっくり星の作成（折り紙）
「☆きらり」ののぼり旗制作			開催目印の「のぼり旗”あさごん”」を作成した
15	2023/07/29	みんなのひろば☆きらり in あたご祭り	ゲームコーナーの出店 射的、ひもくじ
16	2023/08/19	水墨画	楽しく水墨画を書いてみよう 健康体操でリフレッシュ
17	2023/09/16	お月見	お月見ゲーム プラ板キーホルダーづくり
18	2023/10/21 ・ 10/22	みんなのひろば☆きらり in 十文字（桐華祭）	活動報告 あさごん缶バッチづくり フェルトキャンディーづくり しおりづくり スタンプラリー
リーフレット（秋）作成 250 部			「☆きらり」で配布
19	2023/11/18	〇〇の秋	クリスマス会準備 飾り作成 切り絵 読み聞かせ
20	2023/12/16	クリスマス会	クリスマスツリーの飾りつけ ビンゴ大会（地区より景品）
21	2024/01/20	からだを動かす ポスター展及び優秀ポスター投票開催	レクリエーション：輪投げ 先取り節分：鬼退治、張り絵
22	2024/02/17	バレンタイン ポスター展及び優秀ポスター投票開催	お雛様飾り 大きなハートを作ろう 大好きな人へのメッセージ （手紙、カードづくり）
23	2024/03/16	お花見 ポスター展及び優秀ポスター投票開催	ネイルケア 生活コーディネーターによるハンドマッサージ 満開の花を咲かせよう 読み聞かせ
2023 リーフレット（秋）作成 650 部			「みんなのひろば☆きらり」及び地域で配布

【第12回 子どもの日】

5月人形や兜を飾った。初めて5月人形の意味を知った学生もあり、地域の方から学ばせていただく機会となった。



【第13回 梅雨を先取りしよう】

梅雨を先取り、たくさんのおでんをガーゼで作成した。ガーゼを使用することで小さな子どもたちも丸く包み込むことができた。最後にガーランド様のオブジェを作成し、ひろばに飾らしていただいた。



【第14回 七夕飾り】

地域実行委員が地域の方と大きな竹を切り、2本トラックで運んでくださった。笹の葉に飾ることのできる飾りをたくさん作り、願い事を書きながら、飾りつけをおこなった。商店街のアーケード下を明るく飾りつけてくださり、道行く人が立ち止まって見ていく姿が見られた。



【第15回 お祭り・のぼり旗】

C祭りに参加し421人が、「☆きらり」で出店したゲームに参加した。ゲームの内容は、「射的」と「ひもくじ」であった。慣れないテント張りや電気の装着など、地域の方の協力があり、出店することができた。

また、これまで「サロン活動を行っているか外から分からない」「見えない」という課題があり、のぼり旗を作成した。2022年度に地域のニーズから誕生したゆるキャラ「あさごん」をモチーフにした。日頃、「☆きらり」に参加したことのない方の目にもとまるのぼり旗となった。以降、毎回の「☆きらり」では開催の案内として使用している。



【第16回 水墨画・第17回 お月見】

地域運営委員（社協B三丁目支部）が中心となり2回開催した。第16回では、地域の方が「講師」となり、水墨画や健康体操を楽しんだ。第17回では、手作りした「お月見団子」をバトンにグループ対抗戦を行い子どもからシニアまでの縦割りグループとなり盛り上がった。さらに、オーブンを使用したプラ板キーホルダーづくりを行い、小さな子どもには難しいと思われる「焼く」部分を大人がフォローしながら行うことができた。大人が子どもたちを見守ることで、キーホルダーを作ることができ、そのお礼に、子どもたちは2回りレーをするなど、お互いの気持ちがつながり、新たな活動を生まれる楽しみがある。



【第18回 ☆きらり in 十文字（桐華祭）】

地域のみな様を十文字学園女子大学にお誘いし、「☆きらり」に参加していただくことを企画した。桐華祭では、①活動報告、②フェルト飴作り、③しおり作り、④缶バッジ作り、⑤スタンプラリーを行った。各ブースには、地域運営委員も学生運営委員（活動）と一緒に参加した。「はじめて大学に来た」と笑顔で参加する地域運営委員や「大学だと雰囲気が変わるね」と楽しむ参加者もいた。「顔なじみ」の参加者が足を運んでくださる一方で、「C ひろば」からの「足がない」という課題もあった。地域の方からは、年齢や安全性を考え「自動車への乗り合いをしないように話し合った」ことを伺った。移動手段の確保がC地区の課題であることがわかり、「☆きらり」の「C ひろば」での開催には、意味があることも理解された。



【第19回 ○○の秋】

様々な“秋”を楽しむ回となった。読書の秋にちなんで“読み聞かせ”を行うなど工夫していたが、子どもたちには今一つ伝わり切れないものがあつた。そんな時、大人世代（母）が、読書の秋や四季について子どもに語りかけていた。小さなきっかけから新たな交流がうまれている。

また12月のクリスマス会に向けた準備も行つた。地域の方々が、継続的に参加できるよう、1回でも楽しめ、2回、3回と続けて参加するとさらに楽しめるような企画も考えられている。



【第20回 クリスマス会】

今年度は、地域の方に大きなクリスマスツリーを提供していただくことができた。子どもたちが巣立ったあとの思い出のあるお品であることを地域の方に伺った。子どもたちは大きなツリーに楽しそうに飾り付けをしていた。

地域の方の協力で、“景品”をかけたビンゴ大会もおこなった。世代問わず盛り上がった。日頃控えめな子どもたちも、部活の休みに参加してくださった中学生の勢いに元気さをもらい、「ビンゴ」と飛び跳ねていた。大きな景品は中学生が独占していたが、“本気”で戦う様が、小さな子どもたちに伝わっていた。



【第21回 からだを動かす】

お正月で休めた体を動かそう！と絵合わせ輪投げや壁画の鬼退治など、子どもが大喜びした節分となった。「家で物を投げたら怒られちゃうものね」との声を受け、思い切り身体を動かしていた。



【第22回 バレンタイン】

大きなハートを作ろう！と特大ハートを作った。大好きな人へのメッセージカード作りでは、子どもたちだけでカードを作る姿がみられた。スーパーへ親が買い物に行った時間をねらって、家族には「内緒」と感謝の気持ちを言葉にしたり、まだ文字が書けない子どもたちは、思い思いに絵を描いたりした。それぞれが、家に帰ってからの楽しみを持ち帰り、帰宅後の様子を想像する楽しみもうまれた。



【第 23 回 お花見】

ハンドケア、ネイルケア、読み聞かせ、満開の花を咲かせよう（壁画）を行った。

ハート型の花びらに思い思いの気持ちを書き、花を咲かせ 1 本の木ができた。地域実行委員によるハンドケア、ネイルケアでは、少し深刻なお話をされる方もおり、リラックス効果があった。また、ネイルは大人の女性のものだけではなく、子どもや男性だれもが楽しむことができた。



3. 2023 年度の活動成果

「☆きらり」の特徴は、実行委員と運営委員、地域の方々との連携にある。地域実行委員（商店街会長、C ひろば管理者、B 地区会長）と教員実行委員（本学教員 3 名）が連携し合い、活動全体の検討と調整を行う。活動の中心は、学生運営委員（活動）と学生運営委員（広報）、地域運営委員（社協 B 三丁目支部）の 3 つの運営委員が担い、活動当日には、地域住民が集まる。

1) 地域の一員としての学生運営委員（活動）

「☆きらり」の活動の中心は、学生運営委員（活動）のメンバーである。2023 年度の 1 番の成果は、月に 1 回の「☆きらり」の活動を継続できたことである。この、月に 1 回の活動は、学生運営委員（活動）が、前回の振り返りからの企画、準備、活動の実施、振り返りと絶えることなく継続してきた賜物である。毎週木曜日の昼休みには、運営委員（活動）の学生が集まり、委員会を開催しており、時間をやりくりしながら、主体的に取り組む面が多くみられた。またそのことと同時に、地域の方々にご理解をいただきながら、「☆きらり」の活動が少しずつ受け入れられている結果と考える。今後も地域への感謝の気持ちを忘れずに、地域の一員として何ができるのかを学生運営委員（活動）と考えていきたい。

学生運営委員（活動）について、実践報告（山口：2023）の中で、円滑な情報共有の必要性や学生自身の「地域の一員」「多様性のある人」の自覚が求められることがわかった。そして、活動の学生たちは、ある一定のプロセスを踏みながら、毎月の活動に臨んでおり、役割意識や主体性の必要性を感じながら活動していたと理解するが、今後は、更に明確なプロセスを踏まえながら、目標をもって実践していくことで、意義のある持続可能な活動へとつながることを期待している。学生運営委員の活動状況については、十文字学園女子大学紀要に実践報告として掲載された。また、2024 年度（第 38 回）日本地域福祉学会年次大会で 2024 年 6 月に発表予定である。

2) 地域の一員としての学生運営委員（広報）

2023 年度は、活動の企画、準備、当日の運営、振り返りを行う「学生運営委員（活動）」に加え、「☆きらり」の活動を広める「学生運営委員（広報）」のメンバーを新たに採用した。ポスターやチラシの作成は、学生運営委員（活動）と教員実行委員が、活動準備に追われながら、何とか行ってきたが、慣れている作業ではないため負担が大きかった。そこで社会情報デザイン学科の学生にその役割を引き受けていただく形で、毎月のチラシ&ポスターが作成されている。活動開催日に地域に持参すると「素敵ね」「これいいわね」など会話が弾み、地域の方々の関心を寄せ、それぞれが楽しみにしている様子がうかがえる。ポスターからは、作成者の「顔」は見えないものの、「☆きらり」の活動には欠かせない重要な存在であり、単なる広報だけではなく、コミュニケーションツールの一つとなっていると感じる。実践報告（山口：2023）では、学生運営委員（広報）も地域活動の役割を担い、地域への貢献の一助となっていることが示唆された。

また、学生運営委員（広報）が、毎月の案内を作成し、間接的に地域活動に参加する形をとることにより、良い影響があった。最も影響を受けたのは、学生運営委員（活動）であろう。活動日の翌週には、次回開催の活動について検討するが、その際に詳細まで計画し、ポスター作成に必要な情報を学生運営委員（広報）に伝えるという新たな役割が生まれた。このことにより、学生運営委員（活動）には、主体的な取り組みと責任をもった話し合いが求められるようになった。時には、スムーズにいかないこともあったが、「期日」を意識した準備活動が、前述したような毎週木曜日に委員会を開催するといった主体的な行動をうみ、活動内容を明示したことにより、準備すべきことも明確になったといえる。

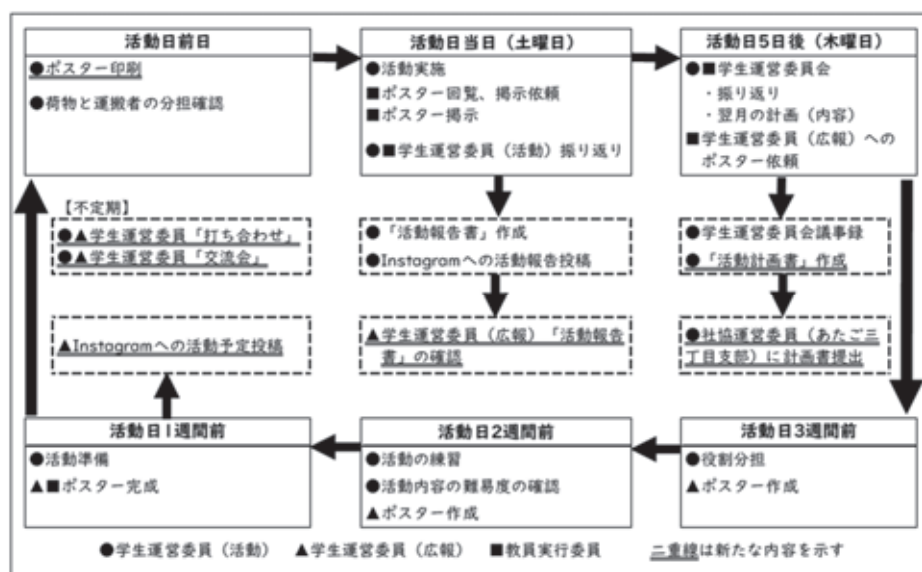


図1 2023 年度（3 月時点） 学生運営委員（活動）の実践プロセス（目標）
実践報告（山口：2023）より引用

3) 学生運営委員（活動）と学生運営委員（広報）の交流会

2023年度は、学修上、顔を合わせる事のない学生同士が、顔の見える関係を作ること意識した。時間調整の都合上、1回しか実現できなかったが、学生運営委員（活動）の学生が、学生運営委員（広報）の学生に日頃の感謝の気持ちを伝えることができた。学生運営委員（広報）の学生は、自分たちの広報活動がどのように受け入れられているかを知らずに活動していたため、地域の方々の声や学生運営委員（活動）の思いを知る機会となった。

学生運営委員は、互いに忙しい時間を割いての活動であるため、希望や意見を交換するには至っていないが、「☆きらり」開催日の活動終了後に学生運営委員（活動）が作成する「活動報告書」にポスターの画像とポスターに関する感想を一言加筆することとした。たった一言ではあるが、活動の楽しい雰囲気と重なる温かい一言は、活動と広報との連携を可視化するよい手段となっている。今後は、活動の継続とともに定期的な交流会を実施することで、学生同士互いの思いや意見を確認し合いながらすすめていきたい。

4) 地域の一員としての地域運営委員（社協B三丁目支部）

2023年度は、地域からも運営委員を採用した。これまでは、地域住民の一人として「☆きらり」に参加してくださっていた社協B三丁目支部より委員として活動したいとの希望があった。運営委員との話し合いの結果、地域運営委員として、学生運営委員（活動）と一緒に運営することになった。

地域のニーズは、毎回の活動の中での交流を通して情報を得るようにし、活動内容に反映するよう努めているが、地域を熟知する地域運営委員からは、活動上の工夫や知恵をお貸しいただく機会が多い。また、本学の学生たちは「実習」が多く、参加が難しい時期が生じやすい。そこで、実習中心となる、8月・9月・2月・3月の活動を地域運営委員にお任せすることにした。

一見名案に思った計画ではあったが、「☆きらり」の活動は、地域住民、学生、だれもが集える居場所づくりであり、日々のいわゆる活動に依るものではない。そのようには言っても、参加者たちが活動を楽しみ笑顔がみられること自体は、地域の大きな力である。今後は、「☆きらり」の目的をしっかりと共有し、目的を果たせるようなサロンを一緒に目指していきたい。

5) 地域参加型活動

これまで、「☆きらり」の団体名称募集にはじまり、ゆるキャラあさごん誕生など、地域住民のニーズに応えながら、地域住民と本学学生とのコラボレーションにより、様々な人とのつながりから創造性ある活動を実現している。本来の目的である、地域住民、学生、だれもが集える居場所づくり、ぶらっと立ち寄れる場所には至っているとは言いがたい。「☆きらり」で行う制作等の活動はあくまでも「きっかけ」に過ぎない。物を作ることや身体を動かし、健康を維持すること、様々なゲームで楽しむことにとどまらず、活動を通し、人と人とのつながり、「顔なじみ」の関係を築き、サロンに来て笑うだけではなく、ほっと一息つけることも大切な役割だと考えている。現状では、「きっかけ」を活用し、参加者を募っている。

また、「☆きらり」は、子どもたちにとって「チャレンジ」することや「自宅ではできないこと」を可能としている。「針を使って縫うこと」や「オーブンを使用して焼くこと」、「壁に向かって新聞紙を投げつけること」などがあげられる。企画の段階では、学生から「危ないですよ」と必ず相談がある。「やってみないとわからないよね」「できなかった時にどうするかを考えておくといいよね」と教員実行委員が助言すると、学生自身にも「チャレンジ」になる。学生が企画した内容で、難しかったことはあったかもしれないが、できなかったことはなかった。年齢問わず参加でできる「☆きらり」では、大人たちが温かく見守ってくださる。時には、子どもたちが大人たちへ提案したり、“今”を大人たちに知らせたり、重要なパイプ役としてのつながりもある。今後も地域の中で多世代多様な方々が交流し、可能性を広げていける場として継続していきたいと考える。

2023 年度の新たな取り組み「ポスター作り」は地域の方が毎月心待ちにするアイテムとなっている。「どれも素敵なポスターね」「どれがいいかと聞かれたらたくさんあり過ぎて困ってしまう」という参加者の声から、ポスター展を開催した。3 か月間「C ひろば」に掲示させていただきながら、地域の方々に気に入った作品を選び投票していただいた。日頃、サロン活動当日にはお越しになれない方も、通りすがりに鑑賞してくださり、いつでも投票できるようにした。限られた活動日以外でも、地域の方々とつながりながら、企画運営することで、住民のライフスタイルに合わせながら可能な形で参加を実現していきたいと考える。



6) リーフレット（秋）（春）の作成

2023 年度は、2 回のリーフレット作成を行った。毎月の案内を出す一方で、「早く日程を知っていればよかった」「情報をまとめて欲しい」との声が聞かれた。毎月の参加は難しくとも、日程を見ながら都合の良い日に参加してくださっている方がほとんどである。簡単な活動報告を兼ねたリーフレットは、「☆きらり」の目的である、誰もがぶらっと気楽に立ち寄れる居場所づくりを意識させられるものであった。リーフレットは、「☆きらり」の中で配布したが、参加者の固定化がみられるため、学生の提案のもと、地域実行委員と相談し、B 地区約 600 軒、一軒一軒に学生たちが配布することになった。即日配布には至らなかったが、このような機会がなければ地域の中に入り込むことも少ない。地域の方とあいさつを交わし、一人でも多くのなじみの関係をつくることのできる、穏やかな居場所づくりを目指していきたい。

4 おわりに

手探りで初めた、「☆きらり」であるが、学生、地域の連携のもと、今日まで活動を継続することができた。

「学生運営委員の実践活動状況」では実践プロセス（目標）を踏まえ、学生のより主体的な活動をめざしていく。「学内連携における活動実践の効果」では、間接的な地域活動として学生の意識はもちろんのこと、地域の方々にも学生運営委員（広報）の存在を十分に認識されたことと考える。「地域のニーズを反映した活動」では、調査中ではあるが、知り得た参加者のニーズを聴取し、反映させている。

今後も地域の人々との連携を図りながら、「☆きらり」がだれもがぶらっと立ち寄れる多様性交流サロンとしての活動を継続できるよう地域と協力し合いながらすすめていきたい。

【参考文献】

- 1) 佐藤陽, 山口由美, 人見優子他 (2023)「2022 年度（令和 4 年度）地域連携共同研究所研究プロジェクト多世代交流を可能とする地域の居場所づくり報告書」. 十文字学園女子大学 -令和 4 年度ボランティアセンター「地域ボランティア活動」事業報告. 33-48
- 2) 山口由美, 人見優子, 川瀬基寛 (2023)「多様性交流サロン『みんなのひろば☆きらり』活動状況と課題」十文字学園女子大学紀要第 54 号 127-139

地域の外国人児童が日本語と日本文化を学び、交流できる場の創出 ～「はっちぽっちひろば」と交流イベントの実施報告～

Creation of a place where foreign children living in the community can learn Japanese language and culture and interact with each other

稲田朋晃¹⁾
Tomoaki INADA

新嶋良恵¹⁾
Yoshie NIJIMA

松永修一¹⁾
Shuichi MATSUNAGA

1) 十文字学園女子大学教育人文学部文芸文化学科

キーワード：多文化共生、外国人、日本語教育

要旨：近年、新座市とその近隣の市町で在住外国人が増加している。来日して間もない児童たちの中は、日本語力が十分でないことが原因で、学校や地域社会への適応に困難を抱える児童も多い。そこで、筆者らは、国際交流に関心を持つ本学学生の力を生かし、新座近隣の外国人児童とその保護者をサポートするプロジェクトを企画した。一つは、外国人児童を対象とした定期的な日本語学習の場である「はっちぽっちひろば」（毎月第1・3・5火曜日開催）である。もう一つは、日本文化体験と友だち作りの場を提供する交流イベントである。2つのプロジェクトを通して、児童たちに日本語学習や文化体験の機会を提供することができた。また、保護者たちの間で互恵的なネットワークが生まれていく様子もうかがえた。プロジェクトに参加した本学学生たちは、異文化接触、日本語教育の機会を得ることができ、さらに学生自らが教室やイベントを企画・運営することを通して、自律性、企画力、協働性などを身につけることができたと考える。

1 はじめに

少子高齢化による労働力不足を背景に全国的に在住外国人数が増加しているが、埼玉県南西部地域もその例外ではない。新座市の統計によると、2013年から2023年にかけての20年間で市内の在住外国人数は2,276人から3,994人へと増加し、外国人比率も1.4%から2.4%へと上昇している^[1]。本プロジェクトのメンバーらが、2022年度に行った野火止小学校および新座小学校への聞き取り調査においても、コロナ禍にもかかわらず、ここ数年で外国人児童数の急増と国籍の多様化が進んでおり、学校側はその対応に苦慮していることが明らかになっている。

大学近辺には、日本語ボランティア教室やNPO法人といった地域に根差した教育の場所を提供する団体は存在するが、外国をルーツとした子ども向けの日本語学習支援は存在しない。関連団体への聞き取りを行ってわかったことは、問題の背景には、外国人児童・生徒や、その家庭にサポートの情報が十分に共有されていないこと、子ども向けの地域日本語教室がほとんど開かれていないこと、地域日本語教室を運営する人材の不足、高齢化など、いくつかの問題が複合的に関与していることである。

十文字学園女子大学は、近年、これら多文化共生にかかわる地域課題に関心を向け、さらにそれらの解決に向けて行動できる学生の育成につとめている。2020年には日本語教員養成課程を新設し、文化庁の「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」の助成を受けながら、日本語教育や多文化共生の領域で活躍できる人材の育成を進めている。さらに、2022年には、国際交流に関心を持つ学生たちがさまざまな活動に主体的に取り組めるよう、国際交流センター傘下に「国際交流サークル Hotch Potch」を結成した。現在、約40名の学生が活動している。

筆者らは、これら学内の人的リソースを生かしながら、地域がかかえる社会課題を解決するために、2つのプロジェクトを企画・実施した。一つは、外国人児童の日本語習得を支援するための定

期的な日本語教室「はっちぼっちひろば」である。もう一つは、日本語学習よりも文化体験や友だち作りに重きを置いた交流イベントである。

以下の節では、これら2つのプロジェクトについて報告する。

2 外国人児童のための日本語教室「はっちぼっちひろば」の計画と実施

2.1 計画

新座市内の小学校における外国人児童に対する日本語教育は、日本語指導員の配置や取り出し授業の実施などを通して充実しつつあるが、それでもなお、一部の児童にとっては十分な学習時間が確保されているとはいえない状況がある。そこで、筆者らは、学外でも日本語が学べるよう外国人児童のための日本語教室を企画・実施することにした。運営スタッフは、本学教員（筆者ら）および、本学の日本語教員養成課程履修者、および国際交流サークルに所属する有志メンバーである。

会場は、NPO 法人新座子育てネットワークが所有するイベントスペース「Dropin」を利用することとした^[2]。曜日と時間は、児童たちが放課後に来やすい時間、大学生スタッフの授業がない時間を考慮し、毎月第1・3・5火曜日の16:30から18:00とした。2023年4月4日から開始することとした。

2.2 広報

4月の開始に先立ち、大学から最も近い小学校である野火止小学校を訪問し、校長先生に本教室の趣旨を説明する場をいただいた。また、本教室のチラシを在籍する児童に配布していただいた。さらに、新座市教育相談センターを訪問し、職員の方から新座市内の小学校にチラシを配布していただいた。

2.3 実施

2023年4月から2024年3月の間に、全23回実施した。のべ人数にして、児童28名、保護者30名が参加した。スタッフは、おもに本学の日本語教員養成課程と国際交流サークルに所属する学生で、のべ73名が参加した。

児童は就学前～小学校1・2年生が多く、日本語の学習がほぼ初めてで、ひらがな、カタカナから学習する児童が多かった。90分のうち最初の60分程度を日本語学習の時間にあてた。市販のひらがなカードを用いた文字や語彙の学習、『おひさま』^[3]を用いた語彙・文法の学習などを行った。児童が学校の宿題を持参している場合は、それらと一緒に取り組んだ。

後半の30分程度は、ゲームやおもちゃを使った遊びの時間とした。遊びを通して、他人とのコミュニケーション力が養われることをねらった。

中国がルーツのAくんとベトナムがルーツのBちゃんは継続して通ってくれていた児童であるが、2人とも回を重ねるごとに着実に日本語が上達し、自然なコミュニケーション力がついてくのがわかった。また、最初は内気で口数が少なかったが、徐々に大学生スタッフにも物怖じせずに話せるようになっていった。

教室の成果としては、継続的に通ってくれていた子どもたちの日本語上達に確実に貢献できたことが挙げられる。また、学生スタッフの日本語指導力の向上、教室を自律的に運営していく能力の向上などにもつながったと考えられる。

一方で、参加児童数が思ったよりも増えなかったという課題もある。新座市では、各小学校内で「ココフレンド」という放課後の居場所を提供しており^[3]、利用する外国人児童家庭も多いと聞く。今後、曜日・時間の再検討、広報の方法の見直しなどを行う必要がある。



図 1：はっちぼっちひろばの様子。ひらがなの学習（左）、おやつタイム（右）

3 外国人児童と保護者のための交流イベントの計画と実施

定期的な日本語教室「はっちぼっちひろば」の開催と並行して、外国人児童に日本文化体験と交流の機会を提供することを目的としたイベントを年度内に 4 回、企画・実施した。これらのイベントは、新座子育てネットワークとの共同で開催し、「令和 5 年度彩の国さいたま国際協力基金」の助成を受けながら進めた。

イベントを開催する目的は、第一には外国人児童たちに日本の文化に親しんでもらったり、友だちを作ってもらったりすることであったが、同時に、保護者への情報提供と保護者間のネットワーク作りのサポートも目的とした。そのため、「サマーキャンプ」をのぞく 3 回のイベントでは、保護者向けのプログラムを準備した（詳細は後述）。

実施したイベントの名称と参加者数は表 1 の通りである。児童のルーツは、中国、ベトナム、ネパール、ルーマニア、アフガニスタン、ウガンダ、香港、イギリス、日本など様々であった。

広報は、図 2 のように多言語で記したチラシを用意し、新座市教員相談センターから新座市の各小学校に配布してもらった。また、志木市で活動する「志木国際交流会」、富士見市で活動する「子ども日本語学習クラブ」にもチラシを配布し、広く参加者を募った。

以下、3.1 節～3.4 節では、全 4 回のイベントについて報告する。

表 1：交流イベントの参加者数

	児童	保護者	通訳	講演者	学生 スタッフ	その他
サマーキャンプ (2023 年 8 月 12 日)	19 名	7 名	0 名	0 名	16 名	7 名
秋まつり (2023 年 11 月 4 日)	15 名	11 名	1 名	1 名	10 名	6 名
ウィンターキャンプ (2024 年 2 月 3 日)	20 名	14 名	1 名	0 名	11 名	5 名
春の夕べを楽しもう (2024 年 3 月 14 日)	11 名	9 名	1 名	1 名	4 名	6 名



図 2：チラシは日本語、英語、中国語、ベトナム語の 4 か国語を用いて作成した

3. 1 外国から来た子どものための サマーキャンプ 2023 年 8 月 12 日（土）

外国ルーツの家庭は、夏祭りや夏らしいイベントに参加する機会があまりなく、子どもたちが日本の夏を体験する場が限られているという。また、保護者たちから、夏休みの宿題をみんなで一緒にやる場があるといいという声も聞いていた。

そこで、夏祭り、かき氷など日本の夏の風物詩を楽しみながら、同時に夏休みの宿題も進められる「サマーキャンプ」を企画した。学生スタッフは、文芸文化学科の授業である「多文化共生ワークショップ」の受講生と、国際交流サークル Hotch Potch のメンバーを中心とする有志メンバーで構成した。夏祭りを模した遊びの内容は、学生スタッフらが 6 月下旬からいくつかのグループに分かれて検討し、「射的」「ヨーヨー釣り」「うちわ作り」の 3 つを準備した。射的は、埼玉県南西部地域振興センターが所有する光線銃式のライフル「ねぎライフル」を借りて実施した。

イベント全体の実施内容とタイムテーブルは下記のとおり。

- | | |
|-------------|-------------------------------|
| 10:00-10:30 | 自己紹介、アイスブレイク |
| 10:30-12:00 | 夏休みの宿題タイム（保護者は書道体験） |
| 12:00-13:00 | 昼食 |
| 13:00-14:30 | 夏祭りを模した遊びの体験（射的、ヨーヨー釣り、うちわ作り） |
| 14:30-15:00 | かき氷を食べる |



図 3：サマーキャンプの様子。宿題支援（左）、ヨーヨー釣り（中）、保護者向けの書道体験（右）

以下に参加者の感想の一部を掲載する。書道、かき氷など日本文化の体験が新鮮だったようである。

- 今日は最初来たときは少し緊張していたけどお姉さん達が優しく接してくれてたから、たくさん勉強できて、最後に楽しくみんなで夏祭りができてよかったです。日本に来たのは5～6年前だったけど、夏祭りは初めて。毎年どこでやってるかわからないし行ったことなかった。全部はじめてですごく楽しかった。本当にありがとうございました。（児童）
- すごく楽しかったし全て忘れられない日になった。漢字も勉強してダンスもして。私もまた十文字へ行って漢字を勉強したい。先生も生徒もみんな親切で、またあなた達に会いたい！漢字に興味を持った！みんながハッピーありがとう！（保護者）
- お昼から来たけど、みんなを見て楽しそうだったし子ども達も楽しかったって。あと、かき氷がすごくおいしかった！人生でかき氷は2回目。なんであんなに氷がキレイなの？ 本当においしかったよありがとう。（保護者）

以下は、学生スタッフの振り返りの一部である。学生たちが企画から実施、振り返りまでの一連の流れを経験することで、困難にぶつかりながらも、多くのことを学んだ様子が見えてくる。多言語による配慮の重要性を感じた学生もいた。

- ヨーヨー班として企画運営をしました。発表に至るまでの準備の中で様々なトラブルや難点が発生し、イベントを計画・運営すること、最後までやり切ることの難しさを感じましたが、同時に多くの達成感を得ることが出来ました。（中略）日本語、英語、中国語といった複数の言語表記で言葉の配慮をすること、身振り手振りや同じ目線で寄り添う姿勢を意識して接するなど当日出来たのではないかと感じます。
- イベントを企画する場合、実際にやってみないとわからないことや当日にしか分からないことなどがあるので、様々な場合を想定して準備をする必要がありました。また、企画を作っていくメンバー内での情報共有が大切だと思いました。当日は、沢山のハプニングや予想していなかったこと、準備不足など多くありましたが、先生方の協力やメンバーの臨機応変な対応でイベントでは多文化の親子に楽しんでもらえたと思います。

3-2 秋まつり 2023年11月4日（土）

日本の秋の味覚と、秋ならではの遊びを体験してもらうためのイベントを企画した。学生スタッフは、文芸文化学科の授業である「多文化スタディーズ」の受講生と、国際交流サークル Hotch Potch のメンバーを中心とする有志メンバーで構成した。

午前中は、本学キャンパス内にある豊かな雑木林を生かし、親子で林を散策しながら写真を撮る写真大会を開催した。親子らは、学生スタッフと一緒に、きれいな色の葉を見つけたり、カブトムシの幼虫を見つけたりしながら、思い思いに楽しんでいた。また、本学からほど近い三芳町や川越ではさつまいもが名物であることから、日本らしい秋の味覚としてやきいもを焼き、ランチタイムに提供した。午後は、大学生が考案した「落ち葉スタンプ」「どんぐり人形作り」などを楽しんだ。タイムテーブルは下記のとおり。

- 10:00-10:30 自己紹介、アイスブレイク
- 10:50-11:30 さつまいもとゲーム、やきいもの準備
- 11:30-12:30 雑木林で写真大会
- 12:30-13:20 昼食
- 13:20-14:30 落ち葉やどんぐりを使った工作と遊び（保護者は講演会と交流会）



図4：秋まつりの様子。雑木林で写真を撮る活動（左）、どんぐりを使った工作（中）、落ち葉スタンプを使った絵画制作

●保護者向けプログラム

先述したように、本プロジェクトは児童だけでなく保護者へのサポートも目的の一つとしていた。秋まつりでは、志木国際交流会の荻島亜紗美さんから、志木市における日本語教室開設の経緯や、お母さん同士のネットワークを作る取り組みなどについて講演してもらった。志木国際交流会は、長年、外国人保護者と日本人保護者が連絡を取り合える SNS 連絡網を構築したり、日本語教室や各種イベントを通して外国人保護者同士が交流できる機会を提供している。講演を通して、先進的な取り組みを知るよい機会となった。



図5：志木国際交流会の荻島亜紗美さんによる講演

以下に参加者の感想の一部を掲載する。それぞれの活動は好評であったが、学生スタッフと子どもたちの関わりがやや少なかったという指摘があった。

- 森の中で植物、虫等の体験面白かった。焼き芋、すごい美味しい。（保護者）
- 子供の笑顔を見て、とても楽しくて、感動でした。ありがとうございました。（保護者）
- とても有意義で、ゲームの楽しさを体験し、さつまいもを焼くことに参加し、コミュニケーションを促し、とても恥ずかしがり屋ですが、もっとコミュニケーションを取ると良いと思います。先生の指導のもと、いろいろな植物を見分けるだけでなく、葉っぱを使ったゲーム、自然に親しむこと、自然を体験すること、とても面白く感じました。先生方、お疲れ様でした。（原文中国語、保護者）

- もう少しお姉さんたちと子どもたちの距離が近くなるゲームやコミュニケーションがあるといいと思いました。(保護者)
- 学生さんと子ども達がもっと交流できると良いなと思いました。(保護者)

下記は、学生スタッフの感想の一部である。外国人児童と実際に触れ合うのが初めてという学生たちにとっては、実際に関わってみて気づいたことが多かったようである。

- 言葉が通じなくて不安になっていたり、限られた人しかコミュニケーションがとれなかったりする子供がいたので、色々な人と関わる機会を作ったり、関係を構築するための手助けをする必要があると考えました。また、外国人児童への支援と外国人との共生のどちらにも、日本に住む人の外国人への理解と、外国人の日本に住む人への理解が必要だと考えました。そのため、日本人というくくり、外国人というくくりで考えるのではなく、偏見を持たずに関わるなかで知り、理解に繋げていくことが大切だと考えました。
- 秋まつりで様々なルーツを持つ子供達と実際に関わってみて、人見知りだけど笑顔が可愛い子や、やんちゃで明るい子、年下を気遣う優しい子など一人ひとり様々な魅力的な個性があるととても感じました。「外国人」や「外国人児童」と一括りに考えずに、ステレオタイプを捨ててそれぞれ個性を理解し合うことが外国人との共生において重要だと学びました。
- 保護者の方の中には宗教に関係がある服装をしていた方がいたと思うので、イベントではなく深く関わる場合は宗教についての知識を深めることや、その方と何が宗教的にできないのかを話し合う必要があるだろうと思いました。私は無宗教だと思うので、宗教に関することは詳しくないと思います。なので十分注意して考えて接しないといけないだろうと思いました。

3-3 ウィンターキャンプ 2024年2月3日(土)

節分の日に開催し、楽しみながら節分の文化に触れられるイベントを企画した。学生スタッフは、国際交流サークル Hotch Potch の中から有志メンバーを募り、構成した。

当日は、まず、学生スタッフたちがスライドを使ったり、「玄関に飾られる鬼が嫌いなものは何？」などのクイズを出しながら、節分とは何かについて解説した。その後、学生スタッフの指導のもと、子どもたちが色画用紙とペンでオリジナルの「豆ケース」を作成した。昼食後には、教員が扮した鬼が登場し、子どもたちは歓声を上げながら豆を投げ、豆まきを体験した。その後、スプーンで豆を運ぶリレー、ジェスチャーゲームなどを行い、交流をはかった。タイムテーブルは以下のとおり。

- 10:00-10:40 自己紹介、アイスブレイク
- 10:40-11:10 節分について知ろう(大学生による発表とクイズ)
- 11:10-12:10 節分の豆ケースを作ろう(保護者は同時刻に防災に関するワークショップ)
- 12:10-13:20 昼食
- 13:20-13:50 鬼に豆を投げよう、ゲーム(スプーン豆リレー、ジェスチャーゲーム)
- 13:50-14:15 一日の感想の発表、記念撮影



図6：学生スタッフによる節分の解説（左）、豆ケースの制作（中・右）

●保護者向けプログラム

2024年1月1日に、能登半島で巨大な地震があったことから、外国人保護者と一緒に防災について考える会を企画した。埼玉県が作成した「イツモ防災」の各国語版を配布し、これに沿って家具の転倒防止方法、食料の備蓄法などについて解説した。同じ母語話者同士で不安なことなどについて話し合う機会を設け、その後、全体でのディスカッションを行った。



図7：松永修一教授が防災の心得や要点について解説した

以下に参加者の感想の一部を掲載する。保護者へのさらなる多言語対応の必要性、安全な椅子の使用など、改善のためのヒントが得られた。

- こどもたちも大満足で、改めて節分の習わしを知ることができました。保護者向けの防災講座もとても良かったです。心構えができたと思います。（保護者）
- 外国人の子どもとその親が地域の人々と交流できるイベントは素晴らしいと思いました。学生さんの企画・進行も素晴らしかったです。（保護者）
- 当日はありがとうございました。工作の時間が楽しかったようで、家でも同じように作品を作っていました。食堂への移動も探検のように感じたようで、とてもワクワクした気持ちだったようです。「学校探検したよ!」と、すごく喜んで話していました。我が家の子どもたちは”お姉さん達と会える場所、お友達と遊べる場所”と、感じているようでした。
- 地震の知識から得るものは多かった（原文中国語、保護者）
- 全く日本語がわからないメンバーもいるので、そちらのフォローもできたら嬉しいです。（保護者）
- 動く椅子に座っている幼児の子どもが、椅子から落ちそうになっていた場面がありました。タイヤが付いていない椅子を用意した方が、怪我防止になると思いました。（保護者）

3-4 春のタベを楽しもう 2024年3月14日（木）

春の交流イベントは、平日にしか時間がとれなかったため、17時から19時までの短い時間での開催とした。学生スタッフは、ウィンターキャンプと同様、国際交流サークル Hotch Potch の中から有志メンバーを募り、構成した。

前半は、列を作って新聞紙の上をジャンプして進んでいく「新聞紙リレー」や、各自が新聞紙の上に乗って、じゃんけんをしたら負けると足元の新聞紙が半分になっていく「新聞紙島」などのゲームを楽しんだ。後半は、学生スタッフの指導のもと、ランタン作りを楽しんだ。プラスチック製のコップに色とりどりのセロファンを貼ったり、ペンで模様を書いたりして、その中に LED ランプをセットした。最後に教室の電気を消すと、子どもたちが手に持つランタンが一斉に光り、部屋中が幻想的な雰囲気に包まれた。タイムテーブルは下記のとおり。

- 17:00-17:15 開会式、自己紹介
- 17:15-17:30 アイスブレイク
- 17:30-18:10 ゲーム（新聞紙リレー、新聞紙島）
- 18:10-18:50 ランタン作り
- 18:50-19:00 閉会式、記念撮影



図8：「新聞紙島」を楽しむ子どもたち（左）、子どもたちが作ったランタン（中）、教室の電気を消すとランタンがきれいに光った（右）

●保護者向けプログラム

保護者らの中には、日本の教育システムについて知識が不足している方も多い。そこで、富士見市の「子ども日本語学習クラブ」で活動し、長年、外国人児童の進学を見守ってきた松尾恭子さんから、中学校に進んだあとの学習・生活の心得や、高校受験のシステムについて講演してもらった。



図9：松尾恭子さんによる日本の教育システムについての講演

4. まとめと今後の課題

筆者らは、外国ルーツの子どもたちとその保護者たちが抱える課題を解決するために2つのプロジェクトを実施した。

一つは、定期的を開催する日本語教室「はっちぼっちひろば」である。2023年4月から2024年3月の間に全23回実施した。参加児童の日本語力を向上させることができ、また学生スタッフが日本語教育を体験する場としても機能したと言える。一方で、参加児童数が思ったよりも増えなかった点は今後の課題である。開催曜日・時間を考慮する必要はあるが、2024年度も引き続き実施する予定である。

もう一つのプロジェクトは、外国人児童に日本文化の体験と交流の機会を提供することを目的としたイベントである。2023年8月、2023年11月、2024年2月、2024年3月の計4回実施した。毎回、季節ごとの文化や行事をテーマにし、学生スタッフたちがゲーム、工作、文化プレゼンテーションなどを企画した。どの回も児童たちには好評であり、繰り返し参加してくれる児童も多かった。保護者向けのプログラムもおおむね好評だった。アンケートには、特に防災や進学についての講義が有用だったという意見が多くあった。また、初めて会う保護者同士で連絡先を交換したり、おしゃべりを楽しんでいる様子も見受けられ、イベントが保護者間のネットワーク作りの場として機能して様子がうかがえる。

本学学生への教育効果としては、教員に頼らずに学生中心で進めることによる自律性の涵養、社会課題を念頭に置きながら企画を最初から考える企画力、学科を超えた複数の学生たちと対話を重ねながら実行していく協働性などが養われたと考える。

2024年度も引き続き、新座子育てネットワークと協力しながら、年4回程度のイベントを実施する予定である。

[1] 新座市：統計情報 <https://www.city.niiza.lg.jp/site/toukei/list934-3699.html>

[2] NPO 法人新座子育てネットワーク：ドロップイン

<https://sites.google.com/ccn.niiza-ksdt.com/ccn-top/ドロップイン>

[3] 新座市：子どもの放課後居場所づくり（ココフレンド）事業

<https://www.city.niiza.lg.jp/soshiki/44/kokofure-4.html>

[4] 山本絵美ほか（2018）『おひさま［はじめのいっぽ］子どものための日本語』 くろしお出版

朝霞市公立保育園×十文字学園女子大学
遊んで学ぶ・探求して遊ぶ「おさんぽ プラス」活動報告
—初年度の取り組みと課題—

“Osanpo Plus” activity report where children can play, learn, explore and have fun
- Initiatives and challenges in the first year -

渡邊 孝枝¹⁾
Takae WATANABE

名達 英詔¹⁾
Hideaki NADACHI

1) 十文字学園女子大学 教育人文学部 幼児教育学科

キーワード：地域連携、園外保育、散歩、子どもの遊び、子どもの主体性

要旨：「おさんぽ プラス」は、朝霞市と十文字学園女子大学の共同事業である。朝霞市の様々な地域資源を活用した子どもたちの散歩に「大学の専門性」をプラスし、子どもたちの遊びと学びの場をつくることを目的としている。さらに、朝霞市の地域資源そのものが持つ、子どもの遊びと学びを育む潜在的な可能性と魅力を明らかにしていく。2023年度は朝霞市立本町保育園と協同し、朝霞の森で「おさんぽ プラス」を実施した。本学教員と保育者が語り合いながら当日の準備をし、「おさんぽ プラス」当日は学生も参加して子どもたちと一緒に遊び、自発的な遊びにおける子どもの興味関心の芽生えを見つめ、「おさんぽ プラス」後も保育観察と振り返りを丁寧に続けた。このような前後のプロセスも踏まえた「おさんぽ プラス」の実施によって、保育記録の改善や要録作成の際の視点の明確化、日々の保育の見直しへとつながっていった。さらに、「おさんぽ プラス」をきっかけとして朝霞市立朝霞第六小学校との保幼小連携の模索も始まり、本取り組みは朝霞市の保育者の資質向上、および保育の質向上に寄与すると考えられた。

1. はじめに

埼玉県新座市に所在する十文字学園女子大学は、2013年6月、新座市に隣接する朝霞市と相互協力協定を締結している。この協定は、「お互いが有する人材や資源や人材を活用し、連携協力していくことで、地域の発展や大学の教育・研究機能を高めること」⁽¹⁾を趣旨としており、「おさんぽ プラス」もこの協定に基づいて2023年度より開始した。「おさんぽ プラス」は、朝霞市の公立保育園と本学の教員、学生が協働し、本学の多様な専門性をプラスした散歩を計画・実施するものである。

2023年度は「おさんぽ プラス」の初年度であり、どのように「おさんぽ プラス」が実施できるのかについて検討を重ねた1年であった。朝霞市公立保育園は全部で9園あるが、2023年度は朝霞市立本町保育園（以後本町保育園と記載）と共に、11月30日に「朝霞の森」で「おさんぽ プラス」を行った。「おさんぽ プラス」自体の実施は1回であったものの、「おさんぽ プラス」の実施前後には子どもたちの姿について本町保育園保育者らと本学教員が何度も語り合い、子どもの興味関心を中心に据えた遊びと学びについて話し合いを繰り返した。さらに、「おさんぽ プラス」以後も本学教員が保育の観察や保育者との語り合いを繰り返す中で、「おさんぽ プラス」が1回だけのイベントに留まらずに、「おさんぽ プラス」での経験が子どもたちの遊びを充実させ、プロジェクト的な保育が展開する等、毎日の保育へと波及していく様子を見ることができた。また、朝霞市立本町保育園に通う多くの子どもたちが進学する朝霞市立朝霞第六小学校にこの取り組みを伝える機会を得て、来年度以降は保幼小連携に向けた取り組みのひとつとして「おさんぽ プラス」を活用していくことを模索し始めている。

本稿では、「おさんぽ プラス」の取り組みを朝霞市内の公立保育園の保育者をはじめとする教育・保育関係者に知ってもらうために作成した地域向けの小冊子⁽²⁾の内容をもとに、初年度の取り組みと課題について報告する。

2. 朝霞市こども健康部・保育課および朝霞市公立保育園との連携のはじまり

朝霞市こども健康部・保育課および朝霞市立公立保育園との連携のきっかけの一つは、筆者が朝霞市で子育てをし、公立保育園に子どもを通わせる保護者であったことだ。公立保育園に子どもを通わせる保護者として、ある保育園の年長児が「だじゃれ」に興味を持ち、だじゃれの本を沢山作っていることを知った時、本学の専門性によって子どもたちの興味をより深めることが出来るのではないかと考え、朝霞市保育課長に地域連携の打診をしたことが始まりである。

そこで、朝霞市こども健康部・保育課、朝霞市内の公立保育園一園、文芸文化学科・星野祐子准教授の協力を得て、2023年3月20日に、本学の雑木林「十文字の森」で、最初の「おさんぽ プラス」を実施した。そこではまず、星野准教授よりなぜだじゃれは面白いのかについてお話いただき、その後、子どもたちは「十文字の森」で思い思いに遊んだ。この取り組みについては、本学のホームページに「プラスワントピックス」として公開されているので、下記に引用⁽³⁾する。

朝霞市の公立保育園の子どもたちが本学の森を訪れ「おさんぽ プラス」を実施しました

3月20日（月）に、本学と朝霞市の地域連携の一環として「おさんぽ プラス」を実施、朝霞市の公立保育園年長クラスの子どもたち27名と保育者7名が「十文字の森」へ遊びに来ました。

「おさんぽプラス」の企画は、幼児教育学科 名達英詔教授と渡邊孝枝講師が中心となり、本学が保有する森を活用し、保育園で行っている子どもたちの毎日の散歩に「大学の環境」と「大学が持つ専門性」をプラスし、子どもたちの遊びと学びの場をつくるのが目的です。

日頃より保育園の子どもとの関わりを大切にしている渡邊講師。保育園の先生方とのやりとりのなかで、子どもたちが「だじゃれ」に興味を持ち、自分たちで「だじゃれ」の本を作っていたことから、「森の中で遊ぶだけでなく、そのような環境の中で、『ことば』をテーマにした青空教室をしてはどうか」という企画に発展しました。

当日は、文芸文化学科 星野祐子准教授による青空教室「だじゃれのおはなし」からスタート。子どもたちは、様々な絵が描かれたカードを見ながら、次々とだじゃれを発表し、「なぜだじゃれは面白いのだろう？」という星野先生のお話に興味津々の様子でした。

その後、グラウンドの奥にある森で「森の先生」となった名達英詔教授が森の中を案内し、子どもたちは自由に遊びました。それぞれが興味のあることを見つけ、遊びに熱中する子どもたちの姿が見られました。「先生は日本語の先生だから、「へ」と「く」の枝をあげるね！」と星野先生に枝を渡す子ども、「落とし穴があるらしい！」と、藪の中を探検する子ども、ふかふかの落ち葉の上をトランポリンのように跳ねる子ども、学生の造ったツリーハウスを見つけて「テントがある！」と飾り付けをする子ども、切り株を掘って感触を楽しむ子ども…など、それぞれに楽しみを見つけていました。

本学は新座駅から徒歩10分という立地にありながら、子どもたちが遊ぶことのできる大きな森があります。その環境を活かし、さらに今回は「ことば」という子どもの興味をより深めることの



できる本学教員の専門性や、支援に参加した学生の活躍もプラスすることで、子どもの遊びと学びが豊かになることを実感した一日となりました。

参加した子どもの保護者の方からは、森の中で大きく身体を動かして沢山の発見をしたこと、ダジャレについてわかったこと、目を輝かせながら、帰宅後に沢山お話をしてくれました！お姉さん(学生)と遊ぶのも楽しかったそうです！などうれしい反響をいただきました。



「森の先生」(名達教授)と森の中へ



ツリーハウスに興味津々



切り株の穴に関心を持つ子どもたち



長いついで学生と綱引き



「へ」と「く」の枝をもらった星野准教授



「またねー」と手を振って、元気に帰って
いきました

ホームページで取り上げた子どもたちの遊びの姿には、小学校入学を見据えた年長児だからこそこの育ちと探究の姿を捉えることが出来た。

切り株の穴に興味を持った児童は、穴を触ってみるとふかふかな感触に気づき、最初は指で、次は木の枝で掘り、掘った後の木くずは両手いっぱいを持ち帰った。木が柔らかいことの不思議さ、木くずの感触の心地よさを堪能し、その面白さを友達や保育者に嬉しそうに伝えていた。なぜ穴が開いているのだろう、この木はどうして柔らかいのかな、柔らかいころはどこまで続いているのだろう、と、「自然の不思議さに触れて感動する体験」⁽⁴⁾をし、その不思議について、全身で探究している姿であった。

「先生は日本語の先生だから、「へ」と「く」の枝をあげるね！」と、星野准教授に木の枝を渡した児童の姿は、保育所保育指針に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の

「ク、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」に相当する。言葉や文字への関心の芽生えは子どもの遊びや生活の中にあり、このように自分で見つけた喜びを伴った関心は、小学校以降の学習に積極的に取り組む姿勢へとつながり、文字の学習が「実感を伴った理解」⁽⁵⁾ともなるだろう。

このような遊びの姿を見つめ、子どもの興味・関心を見取り、指導・援助をする保育者には、さまざまな遊びと探究の姿を想定した丁寧な準備が必要となる。共同執筆者の名達は、掘ることを想

定してさまざまな種類のシャベルを準備していたが、切り株の穴を掘った児童にシャベルを渡すことはしなかった。この段階では、まずは自分の手で、次は枝で、と身体での探究が大切だと判断したからだ。また、切り株の穴を掘る児童のそばにいて、その子の遊びを援助していた本学教授・桶田は、木くずを「持って帰る」と言った児童にビニール袋を手渡している。これも森の中で何か集めるかもしれない、という子どもの姿を想定した準備の一つである。準備をしても、準備した道具などを使用するかしないかは保育者の判断になる。この判断は、それぞれの子どもの興味に応じて遊びが充実するために必要であり、高度な保育スキルの一つだ。遊びを中心とした保育では、子どもと共に遊びながら、保育者がどのような指導・援助をするか、常に考え続けているのである。

準備段階では、保育園の保育者らと語り合いながら何を準備するか相談をし、事後には子どもの遊びの姿とそれを支えた本学教員の援助の様相を保育園の保育者らに伝えた。「おさんぽ プラス」で見ることができた子どもの遊びには、さまざまな探究や学びの姿があり、その姿と本学教員の援助などを保育者とともに語り合うことは、保育者の資質向上にも繋がると考えられた。

このような「おさんぽ プラス」の試験的な実施を踏まえ、2024年度は朝霞市と共同し、継続的に取り組むことを打診することとした。

3. 「おさんぽ プラス」の背景と目的

「おさんぽ プラス」を共に実施する埼玉県朝霞市は、「私が暮らし続けたいまち朝霞」という将来像を掲げており、その基本概念のひとつに、「子育てがしやすいまち」がある。第5次朝霞市総合計画後期基本計画では、「子育てがしやすいまち」について、前期基本計画期間中、市民の満足度が横ばいか低下で推移していると書かれており、「子どもたちがのびのびと成長し、学び、遊べる良好な環境を整えていく」⁽⁶⁾ ことが求められること、特に、「すべての子どもが健やかに成長できる地域の環境づくりの推進」および「急激な社会変化に対応するための教職員の資質向上や教育内容の充実」が重点課題⁽⁷⁾ だと述べられている。2023年度の「おさんぽ プラス」の成果から、「おさんぽ プラス」を通じた保育者らとの語り合いが保育者の資質向上に繋がると考えられた。「おさんぽ プラス」は、子どもたちの興味関心に応じて朝霞市内のさまざまな場所で行うことを想定しており、朝霞市の自然と文化といった地域性を生かしながら、子どもたちの心豊かな成長を支える質の高い保育の一助になることができると考える。そして、朝霞市公立保育園と大学が協働して子どもの遊びと学びを育むことは、「暮らし続けたいまち」としての魅力を発信することにもなると考える。

また、このような取り組みに本学の学生が参画することで、近隣地域の保育者を目指す学生に実践的な学びの場も提供することができる。朝霞市の子どもたち、保育者、本学の学生、それぞれの学びの機会ともなるだろう。

このような背景を踏まえて、「おさんぽ プラス」の目的を下記のように設定した。

朝霞市のような様々な地域資源を活用した子どもたちのおさんぽに「大学の専門性」をプラスし、子どもたちの遊びと学びの場をつくることを目的とする。また、朝霞市の地域資源そのものが持つ、子どもの遊びと学びを育む潜在的な可能性と魅力を明らかにする。

十文字学園女子大学の教員、学生に留まらず、多様な専門家や地域の方々と連携し、下記①～③がプラスされたお散歩が「おさんぽ プラス」である。

①おさんぽにプラス

それぞれの子どもたちの知りたい！遊びたい！に応えます。

子どもたちの姿や興味関心について、保育園の先生方と本学教員が語り合います。

そして、本学の専門性と朝霞の地域資源を生かしたおさんぽの内容を考えます。

②毎日の保育にプラス

本学教員が見つめた子どもの姿を先生方へフィードバックし、子どもたちの遊び・学びを深める提案等も行います。そして、次のおさんぽの内容にも生かしていきます。

③地域と学生にプラス

将来、近隣地域で保育者を目指す学生に実践的な学びの場を提供します。

図1：「おさんぽ プラス」が目指すこと（地域向けに作成した小冊子⁽⁸⁾より引用）

4. 2023年度 「おさんぽ プラス」の取り組みと成果

2023年度 地域連携推進プロジェクトの採択を受けて、表1のように「おさんぽ プラス」の準備と実施、振り返りを行った。まずは朝霞市保育課へ再度協力をお願いを行い、次に朝霞市にある公立保育園園長会において「おさんぽ プラス」の説明を行った。そして、朝霞市立本町保育園が「おさんぽ プラス」の実施を受け入れてくれて、本年度の本格的な実施が決定した。

9月28日以降、実地踏査を含めて2度の事前準備を行った。この時、年長児が「キャンプごっこ」を楽しむ様子が見られることから、キャンプへの興味が深まる場所が良いという保育者の願いもあり、朝霞の森を実施場所とした。朝霞の森は、「市の中心部に残された基地跡地（国有地の留保地）の一部（約3ha）について、

国と市が管理委託契約を締結し、2012年11月から開放した広場」⁽⁹⁾である。図2の朝霞の森マップの中央部には、木立や笹原などが広がっており、自然が豊かな場所であると同時に、近隣の保育園がおさんぽに来たり、小学生が授業の一環として観察に来るなど、朝霞市で育つ子どもたちには馴染みのある場所である。

「キャンプごっこ」への遊びの興味が深まり、その後の保育への展開も視野に入れた「おさんぽ プラス」の実施という保育者らの希望があったが、「おさんぽ プラス」の当日までキャンプという興味が継続するか、また、「おさんぽ プラス」の当日に「キャンプごっこ」が展開するかどうかはわからない。そのため、「おさんぽ プラス」当日の子どもたちの遊びを、保育者と本学教員で共に見つめることとした。



図2：朝霞の森マップ
（朝霞の森のホームページ⁽¹⁰⁾より引

日付	内容	場所
6月21日(水)	「おさんぽ プラス」実施について	朝霞市保育課
8月23日(火)	朝霞市公立保育園園長先生方への説明	朝霞市保育課
9月28日(木)	「おさんぽ プラス」初回打ち合わせ	本町保育園
11月13日(月)	「おさんぽ プラス」第2回打ち合わせ	本町保育園
11月30日(木)	「おさんぽ プラス」実施当日	朝霞の森

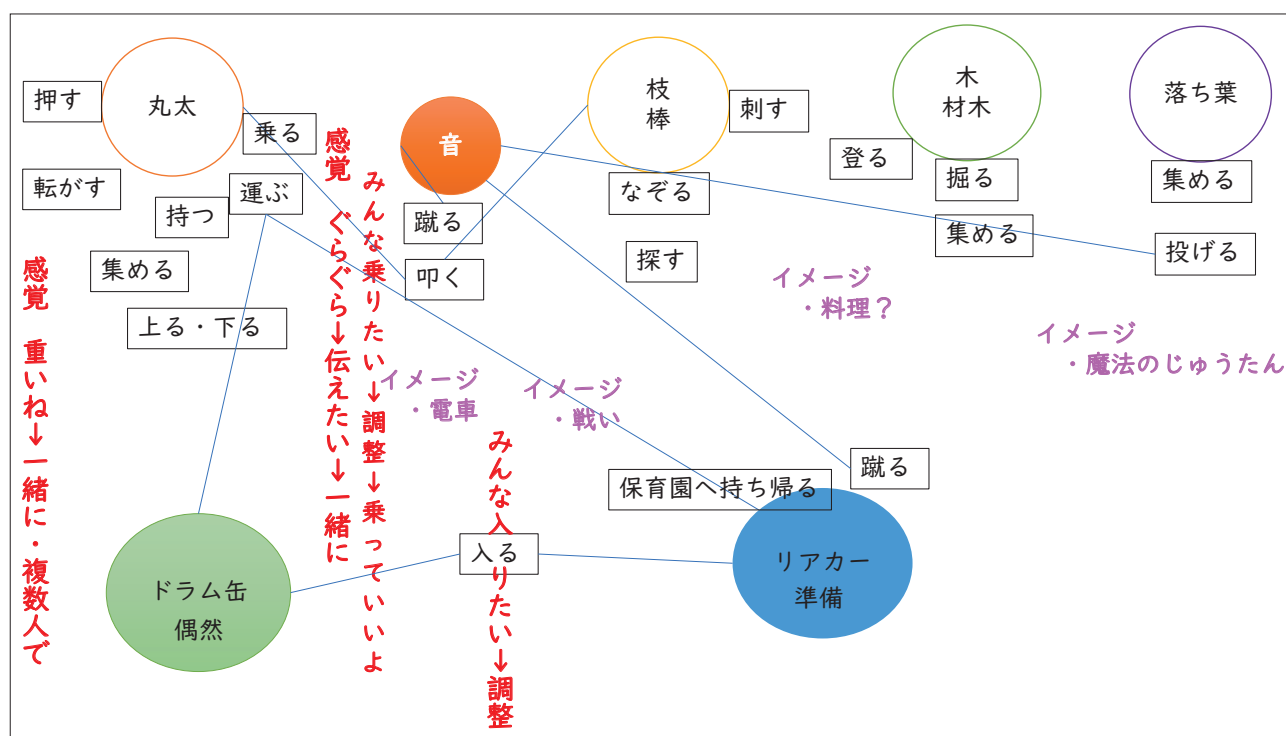
12月1日(金) 4日(月)	「おさんぽ プラス」後 保育観察	本町保育園
12月18日(月)	「おさんぽ プラス」振り返り①	本町保育園
12月21日(木)	年長組 お楽しみ会 観察	本町保育園
1月29日(月)	「おさんぽ プラス」振り返り②	本町保育園
2月29日(木)	「おさんぽ プラス」振り返り③	本町保育園
3月6日(水)	朝霞市立公立保育園園長先生方への報告	朝霞市保育課

表1：2023年度「おさんぽ プラス」の取り組み（地域向けに作成した小冊子⁽¹¹⁾より渡邊改）

2023年11月30日9時過ぎ、本町保育園年長児16名と保育者3名、本学からは渡邊、名達、幼児教育学科4年生4名が参加した。先に到着していた4名の学生が中央にある木立で遊んでいると、子どもたちが次々に走り寄り、学生と共に遊び始めた。

朝霞の森は他の保育園の子どもたちも遊びに来る場所である。そこで、本町保育園の子どもたちが最初に朝霞の森へ到着し、自分たちの遊びを見つけることが出来るように到着時間は早めに設定した。また、森の丸太、枝等は持ち帰りができることを事前に確認していたため、集めたものを保育園に持ち帰りたいと子どもたちが思った時に実現できるよう、本町保育園からはリヤカー、大学からは様々な大きさのビニール袋を準備した。

この日は、木立に作ってあった枝を組み合わせたツリーハウスのそばに、たまたまドラム缶があった。朝霞の森に来るや否や、子どもたちは偶然あったドラム缶を蹴り、蹴ることで響き渡る音に誘われて子どもたちが集まってきた。ドラム缶では、中に入って転がる、石を入れて運ぶ、枝で叩いて音を出すなどさまざまな遊びが展開した。またドラム缶だけではなく、丸太、切り株、枝、棒、落ち葉、そして持参したリヤカーといった、さまざまな「もの」に関わり、その「もの」自体の面白さを探究するような遊びが多様に展開した。その遊びの様子をまとめたのが図3である。「もの」と関わり遊ぶ中で、複数人の友達で協同して探究する様子も見られた。



11時半分頃、昼食のため青葉台公園へと移動し、昼食後は青葉台公園の遊具で遊んだ。そして13時前、森から持ち帰りたい「もの」を沢山積んだリヤカーを引いて朝霞の森を出発し、保育園へと戻った。



次に、地域向けに作成した小冊子⁽¹³⁾より、「おさんぽ プラス」当日のエピソードを2つ引用する。

エピソード①丸太を運びたいー丸太の向きを変えるには

朝霞の森の中央の木立には、枝をテントのように組み合わせたツリーハウスがありました。そのツリーハウスから少し離れた木の根元に、大きな丸太がありました。何人かの男児が、木の根元から坂を下ったところにあるツリーハウスに丸太を転がそうとしますが、なかなか動きません。蹴ったり、押したりしてもなかなか動かないので、何人かがその場を離れました。1人の男児だけがその場に残って動かそうとしますが、やはり全く動きません。そこへもう1人の男児が、「俺が手伝うね」と一緒に動かし始めました。丸太がツリーハウスの方を向いていないので、丸太の向きを変えようとするのですが、丸太は動かすとツリーハウスとは反対方向の斜面へ転がり落ちてしまいます。そこで二人は試行錯誤し、転がり落ちないように丸太を押さえながら、ツリーハウスとは反対の下り斜面に丸太を少し転がして丸太の向きを変えました。そして、丸太を転がしながら、方向転換のために下った斜面を上った後、ツリーハウスに向かう下り斜面に沿って丸太を転がすことに成功しました。すると、また複数人の子どもたちが一緒に丸太を転がし始め、「大物ゲット!」と、丸太を運ぶことができた喜びを共有していました。

エピソード②切り株を運びたいードラム缶の活用法

ツリーハウスの根元にあったドラム缶を見つけると、子どもたちはまず蹴り始めました。公園にドラム缶の良い音が響き、さらに子どもたちが集まってきます。ドラム缶を枝で叩いたり、中に入ったり、転がしたりと、さまざまな遊びが展開していました。

複数人の男児がドラム缶を転がしていると、エピソード①の木から少し離れた木の根元に、丸太のような切り株がありました。ある一人の男子が「あれ（切り株）をこれ（ドラム缶）に入れて運ぶぞ!」と、4人の男児が協力して切り株をドラム缶に入れようとなりました。切り株は重くてなかなか動かないので、ドラム缶の入り口を切り株ギリギリまで近づけて、3人の男児が力を合わせて切り株をドラム缶に押し入れました。切り株をドラム缶に入れた後、ドラム缶を転がしてツリーハウスの根元まで運びました。ツリーハウスの近くまでドラム缶を転がし終わると、ドラム缶の中から切り株がごろっと出てきました。ドラム缶を活用し、切り株を運ぶことに成功しました。

この二つのエピソードは、重くて運ぶことの出来ない丸太や切り株をどうにかして運ぼうと、子どもたちがアイデアを出して運び方を工夫し、協同する点が共通している。協同する時、子どもた

ちは会話だけでアイデアや工夫を共有するのではない。エピソード①では、丸太の向きを変えるために、一度反対斜面に丸太を転がして方向転換し、丸太を押し上げてからツリーハウスの方へ転がしているのだが、この時、言葉よりも友達の動きからその考えに気づき、理解し、協同するための振る舞いをしていた。またエピソード②では、ドラム缶に切り株を入れて運ぶという友達の発言から4人で協同するのだが、ここでも友達の動きからその意図を汲み取って動いている様子が見られた。

この二つのエピソードに見られる子どもの姿は、保育所保育指針に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」⁽¹⁴⁾の「ウ 協同性」「カ 思考力の芽生え」「キ 自然との関わり・生命尊重」「ケ 言葉による伝え合い」が育っている姿と捉えることができる。そして、このような姿は、自分のやりたいことを思う存分発揮できる自発的な遊びの中で、総合的に育っていくのである。

「おさんぽ プラス」を終えて、子どもたちは丸太や枝などを大量にリヤカーに積んで持ち帰った。その持ち帰ったものでどのような遊びが展開するのか、「おさんぽ プラス」翌日と翌週、3週間後に保育観察を行った。持ち帰った枝を並べて飛び越えたり、丸太でバランスを楽しんだりしながら、サーフィン遊びが展開したりしていた。さらに、卒園までの間に持ち帰った木材を生かした海賊船の遊びが広がり、卒業制作へつながるなど、プロジェクト的な保育展開もあった。本町保育園の保育者と本学教員（名達・渡邊）が複数回、「おさんぽ プラス」後の子どもたちの遊びと学びを語り合うことを続けた。

この語り合いの経過の中で、映像記録を用いて共に遊びの姿を見つめ、子どもの興味・関心を見取り、指導・援助の工夫について検討することができた。そして、子どもから始まる遊びを大切にすること、「子どもにとってどうか」という視点で考えることが共有された。本町保育園の園長 伊地知先生は、「おさんぽ プラス」は、まず森での出会いから始まることを見つめるものであったと振り返り、この実施を踏まえて保育記録を変えていきたいと、保育の改善に向けて取り組みを始めている。また、年長児の担任 藤井先生は、「おさんぽ プラス」の実施以後の子どもの成長を丁寧に見つめており、子どもたちそれぞれの興味関心をウェブ記録にして保護者に伝えることで、保護者が積極的に保育に関わってくれるようになったこと、小学校に渡す要録で書きたいことが明確になったことを3月6日に実施した朝霞市園長会で報告した。

語り合いの際に使用した映像は、保育実習を終えた4年生4名が「おさんぽ プラス」当日に子どもたちと遊びながら、自分たちが面白いと感じた遊びを録画し続けたものである。映像記録は、当日に自分たちが見ていなかった遊びも共有し、詳細に子どもの発言等を聞き取ることができるので重要である。^(注1) 子どもたちに関わりながら、子どもたちの興味関心の芽生えを捉えると、少し離れて録画をするという学生の姿に、保育者として遊びの中の興味関心を見取る力の育ちを感じることができた。

5. 「おさんぽ プラス」の課題と今後の展望

「おさんぽ プラス」は、当日の実施だけではなく、その前後の取り組みを含め、保育者と本学の教員と学生が子どもたちの遊びと育ちを見つめるプロセスそのものであった。準備と振り返りを丁寧に行ったため、「おさんぽ プラス」の実施が1回にとどまったこと、学生の参画機会と参加人数が少なかったことは課題である。丁寧に保育園の先生方と関わって実施を検討していくため、複数園での実施は難しいが、来年度以降は、本町保育園での「おさんぽ プラス」の実施を複数回検討し、子どもたちの育ちを語り合う場面などに学生が参加することを検討するなど、学生の学びを深める機会を設けていきたい。

また、来年度以降も本町保育園と共に「おさんぽ プラス」実施予定であるが、朝霞市公立保育園9園の保育者が「おさんぽ プラス」に参加するなどの機会を設け、市内の保育者が共に子どもの育ちを見つめ、考える機会ともしていく。そして、朝霞市の保育記録の改善等に役立てたいと考えている。

さらに現在、朝霞市立朝霞第六小学校との連携を進めるために、低学年の担任教諭と「おさんぽ プラス」での子どもたちの様子を共有し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と朝霞第六小学校での学びの連続について共に考える機会を設けるなどしている。来年度は、保育園の保育者と小学校の先生方が「おさんぽ プラス」の場に集い、共に子どもの遊びを見つめ、遊びのなかの子どもの育ちを語り合うなど、保幼小連携の機会を設定していきたいと考えている。

以上のような課題と展望を踏まえて、2024年度も朝霞市の先生方と本学教員、学生、地域と共に、「おさんぽ プラス」をきっかけとして、朝霞市の保育・教育の質向上に少しでも寄与していきたい。

6. 終わりに

「おさんぽ プラス」を終えて保育園へ帰る時、丸太や枝、落ち葉がいっぱいに入ったリヤカーを押す様子を見て、「そんなに持ち帰ってどうするの？」と地域の方々が声をかけてくださった。その後、広報あさかと朝霞市のホームページ⁽¹⁵⁾でも取り上げていただいたことで、地域の方が保育に関心を寄せてくれたと考えている。散歩は、地域に出向いていく園外保育であり、「おさんぽ プラス」をきっかけとした地域との交流も活性化されると良いと期待している。

また、「おさんぽ プラス」の実施に際しては、幼児教育学科 桶田ゆかり教授・二宮紀子教授・横井紘子准教授が関わり、子どもの遊びを見つめてくださった。特に桶田教授は、3月と11月の実施の両方に参加し、詳細なエピソード記録等も寄せてくださった。幼児教育学科の教員だからこそできる子どもの姿の記録等を生かしながら、子どもたちの興味関心に応じて学内の様々な専門の先生方にもご協力いただき、子どもたちの探究をサポートしていただきたいと考えている。

引用文献

- (1) 広報あさか 2013 年 8 月号 p、47
- (2) 2023 年度 十文字学園女子大学地域連携協同研究所 地域連携推進プロジェクト報告書
朝霞市公立保育園×十文字学園女子大学 遊んで学ぶ・探究して遊ぶ「おさんぽ プラス」、令和 6 年 3 月.
- (3) プラスワントピックス <https://www.jumonji-u.ac.jp/outline/press/plusonetopics/>
- (4) 厚生労働省編、「保育所保育指針解説」、p76、平成 30 年 3 月、株式会社フレーベル館.
- (5) 同上、p79
- (6) 第 5 次朝霞市総合計画 後期基本計画 概要版、p27. 令和 3 年 3 月、朝霞市、
- (7) 同上
- (8) 前掲 (2)、p3
- (9) 「基地跡地暫定利用広場「朝霞の森」」<https://www.city.asaka.lg.jp/site/kosodate/asakanomori-kaien2021.html>
- (10) 同上
- (11) 前掲 (2)、pp4-5.
- (12) 前掲 (2)、p6
- (13) 前掲 (2)、p6-7
- (14) 前掲 (4)、pp62-83.
- (15) 朝霞市と十文字学園女子大学の共同企画「おさんぽプラス」を実施しました。
<https://www.city.asaka.lg.jp/site/kosodate/hoiku-jumonji-u.html>

脚注

注 1：映像および写真での記録と広報誌や活動報告等での写真使用に関しては、朝霞市保育課長、本町保育園園長、名達、渡邊の連盟で保護者宛のお便りで周知し、同意を得た上で実施した。

こどもの貧困に対するフードパントリーによる支援活動の実践と効果

Practice and effectiveness of food pantry support activities for children in poverty

星野 敦子¹⁾

Atsuko HOSHINO

1) 十文字学園女子大学教育人文学部・児童教育学科

キーワード：子どもの貧困、フードパントリー、子育て支援、ひとり親、コスメパントリー

要旨：2022 年 12 月から大学において、継続して行っている「ひとり親・多子世帯フード・コスメパントリー」の実践報告と成果の検証を行った。単に支援品を配布するだけでなく、居場所としての機能を高めることに力を注いできた結果、今回調査により一定の成果が得られていることが明らかとなった。主な成果は以下の 5 点にまとめることができる。

①参加者はリピーターが多く、8 割以上を占めている。そのため、支援者との関係も深まり、課題や現状についての聞き取りもしやすい状況となっている。②子どもは未就学児や小学校低学年が多く、遊びコーナーなども幼児向けのものや小学校低学年でも出来る製作などが好ましい。現状に合わせてコーナーづくりをしており、参加者の満足度も高い。③支援品の内容は高く評価されている。新鮮な野菜や旬の果物、コスメなどは得に評価が高い。④大学での実施ということで「安心感」が高く、また学生に子どもを任せられる点も評価が高い。⑤学生やスタッフの対応の良さについて「優しい」「明るく接してくれる」「親切」等の声をたくさんいただいている。

1. はじめに

2023 年 4 月に「こども基本法」が施行された。「子どもの権利条約」批准から約 30 年後に、国内法にあたる法律が制定されてことになる。「こども基本法」の 6 つの基本原則は以下の通りである。

- ①基本的な人権が守られ、差別されない。
- ②大事に育てられ、生活が守られ、愛され、保護される権利が守られ、平等に教育を受けられる。
- ③年齢や発達の程度により、意見を言えたり、社会のさまざまな活動に参加できる。
- ④意見が尊重され、こどもの今とこれからのにとって最もよいことが優先して考えられること。
- ⑤子育てはサポートが十分に行われ、家庭で育つことが難しいこどもも、家庭と同様の環境が確保される。
- ⑥家庭や子育てに夢を持ち、喜びを感じられる社会をつくる。

これらの基本原則のうち①から④は「子どもの権利条約」の以下の 4 原則と一致している。

- ①差別の禁止（第 2 条）
- ②生きる権利・育つ権利（第 6 条）
- ③意見を表す権利（第 12 条）
- ④子どもにもっともよいことを（子どもの最善の利益）（第 3 条）

特に「④意見を表す権利」については、これまで我が国において重視されているとは言えない状況であったのに対し、第 11 条において、以下のように定めている。

第十一条 (こども施策に対するこども等の意見の反映)

国及び地方公共団体は、こども施策を策定し、実施し、及び評価するに当たっては、当該こども施策の対象となるこども又はこどもを養育する者その他の関係者の意見を反映させるために必要な措置を講ずるものとする。

子どものいる世帯の相対的貧困率は、ここ数年改善傾向にあるものの、11.5%と、国際的にみると厳しい状況である。さらに、以前から国連より指摘をうけている「ひとり親世帯の貧困率」は44.5%であり、全体の半数近い世帯が相対的貧困状態にある（厚生労働省、2023）

本論文においては、子どもの貧困に対する直接的な支援方法としての「フードパントリー」の実践と、特に「ひとり親」「多子世帯」に対象を限定した場合の効果について検証することを目的としている。

2. 子育て支援フードパントリーの経緯

子育て支援フードパントリーについては、2021年6月の新座市内の栄4丁目商店会における学生のフィールドワークから活動準備を行い、2021年7月18日に、同商店会のフリースペースにおいて1回目のパントリーを開催している。これを含めて、2021年度には4回開催し、計260世帯に対して支援品の配布することができた（星野他、2022）。活動には、児童教育学科の学生以外に、人間福祉学科の学生有志団体である「しあわせ居場所ネットワーク」の学生がサービスラーニングの一環として参加し、子どものための遊び場づくりや環境づくりを行った（大山他、2022）。

2021年に開始した、商店会における「子育て支援フード・コスメパントリー」は、広く子育て中の方を支援することが目的であり、申込不要で、無記名で参加できる「コミュニティ型」の支援活動である。2022年度からは「こどもの未来応援基金」から助成金をいただけることになり、安定した活動につながったとともに、活動範囲を拡大し、多様な主体との連携により実施することができた。「コミュニティ型」のフード・コスメパントリーの継続により、貧困世帯に限定せず、子育て中のすべての方たちを対象とした「居場所としてのパントリー」が実現し、支援する側、される側という立場の違いを超えた多様な主体による地域コミュニティの創造が図られた。

その一方で、補助金の目的や子どもの貧困という地域課題解決の重要性を考慮すると、「本当に支援を必要としている人のみを対象として行うべきではないか」という疑問も明らかとなってきた。商店会における「子育て支援フード・コスメパントリー」において、明らかに余裕のありそうな保護者が連れ立って参加している様子もあり、スタッフ間で検討した結果、2023年7月より「無記名式」をあらため、住所、氏名、連絡先等を記載していただく形に変更した。その結果、参加者が約10名減少し、何らかの形で支援を必要としている方が残られたという印象を持っている。

2023年度の「子育て支援フード・コスメパントリー」の参加者数は以下の通りである。

①埼玉県新座市 栄四丁目街仲マルシェ（たまりば）	計6回	延べ数	653人	実数	191人
②埼玉県志木市 志木小学校レインボーガーデン	計1回	延べ数・実数	175人		
③埼玉県新座市 十文字学園女子大学 （ひとり親・多子世帯限定）	計5回	延べ数	382人	実数	86人

3. 「ひとり親・多子世帯フードコスメパントリー」の実践

「本当に必要としている人に対する支援」という意味では、2021年12月に実施した「ひとり親・多子世帯対象 クリスマスケーキ配布」が1つの契機となった。公式LINEアカウントに登録しているひとり親または多子世帯（高校生までの子どもが3人以上）を対象として限定し、計20世帯に対して、支援団体からいただいた支援金でクリスマスケーキのプレゼントをお届けした。この時、「クリスマスが近づいてきて悩みの種が1つ減りました」「こんな立派なケーキを買ったのは数

年ぶりです」といった感想や、うれしそうな子どもたちの画像をいただき、子どもの貧困問題に対する手ごたえを感じた。

「クリスマスケーキ支援」により、我が国においてひとり親・多子世帯が特に厳しい状況におかれていることを実感し、いずれ直接的かつ継続的な支援をしたいと思っていたため、2022年12月より十文字学園女子大学を会場としてほぼ2カ月に1回の頻度で「ひとり親・多子世帯フード・コスメパントリー」を開催することになった。支援を対象としている方にお届けするために、事前申し込み方式をとり、氏名、電話番号、メールアドレス、ひとり親・多子世帯の区分など詳細に記載していただいている。大学を会場とした理由は以下の5点である。

- ①週末の空き教室をつかうことで、広々とした会場を用意することができる。
- ②たくさんのパントリー品の持ち帰りや幼い子どもを連れてくることで車を利用される方が多いが、大学なら駐車場を利用できる。
- ③広い教室を利用してカフェスペースや子どもの遊び場をつくることもでき、居場所としての機能を高められる。
- ④学内での開催ということで、学生ボランティアも参加しやすい。
- ⑤大学の敷地内は住宅街や商業地からは独立しており、周りの目を気にすることなく過ごすことができる。

表1は2023年度までに開催した「ひとり親・多子世帯フード・コスメパントリー」を示している。2022年12月11日から2024年3月2日まで、計7回開催し、配布世帯数の合計（延べ数）は172世帯分である。参加者の多くが「クリスマスケーキ支援」の対象者であったことは、想定外であったが、その結果、継続的な支援が実現した。

表1 2023年度までに開催した「ひとり親・多子世帯フード・コスメパントリー」

年	月日	配布世帯数
2022	12月11日	23
2023	2月19日	25
	5月21日	18
	7月16日	22
	10月14日	24
	12月10日	30
2024	3月2日	30
計		172

出典：著者作成

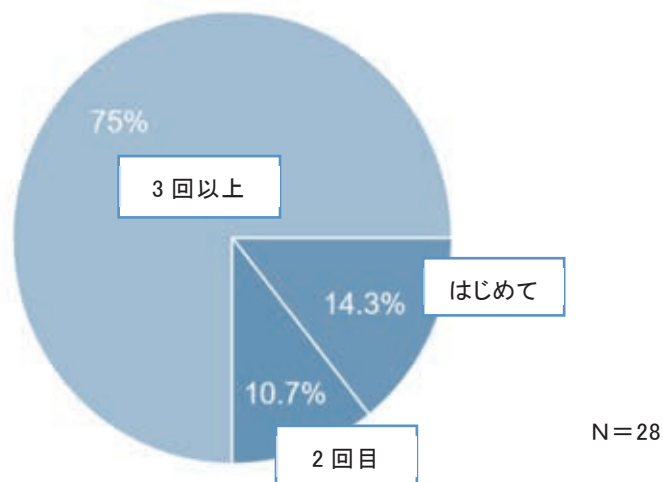
4. 「ひとり親・多子世帯フードコスメパントリー」の成果と課題

2024年3月のパントリーを開催するにあたり、当事者を対象としたアンケートを実施した。パントリーの申し込みフォームにアンケートを設定する形で実施したところ、事情により電話で申し込みを行った2名を除く28名より回答を得た。

①参加回数

図1は参加回数を示している。3回以上が最も多く、75%、次いで2回目10.7%となっている。クリスマスケーキ支援を含め、継続的に参加している当事者が多いことがわかる。

図1 十文字「ひとり親・多子世帯フード・コスメパントリー」の参加回数



②子どもの人数と学年

図2と図3は子どもの人数と学年を示している。人数は3人が最も多く、42.9%、次いで1人32.1%、2人14.3%となっている。多子世帯が対象となっていることから、全体の約1割は4、以上という回答であった。また学年（複数回答）は、未就学が最も多く53.6%、次いで小学校1年から3年50%、4年から6年39.3%となった。会場でも若い子どもたちの姿が目立ち、そのような子どもたち向けの遊びコーナーに人気がある。

図2 子どもの人数

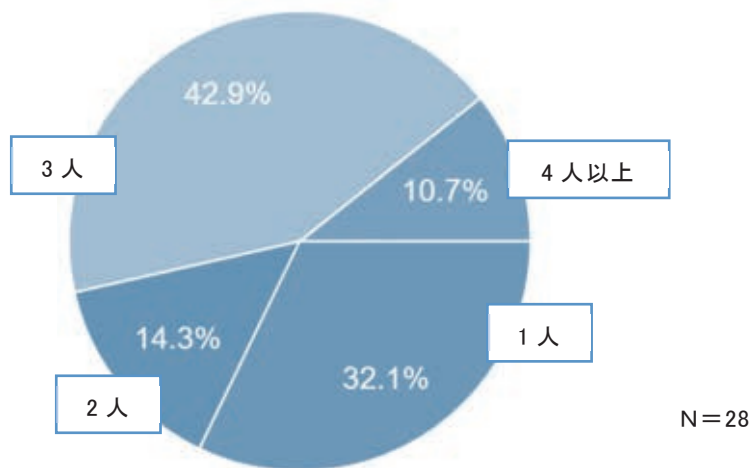
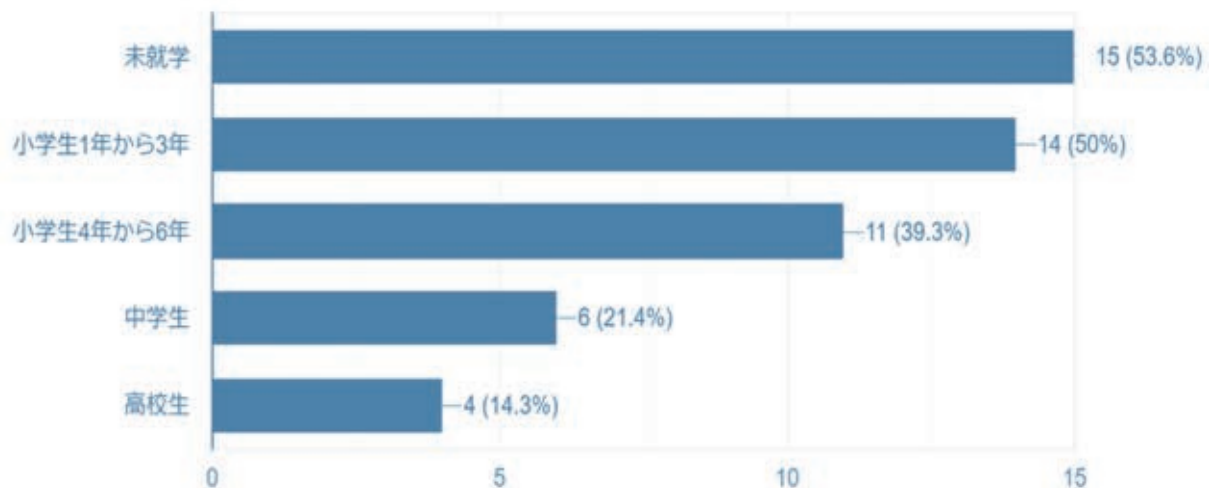


図3 子どもの学年（複数回答）

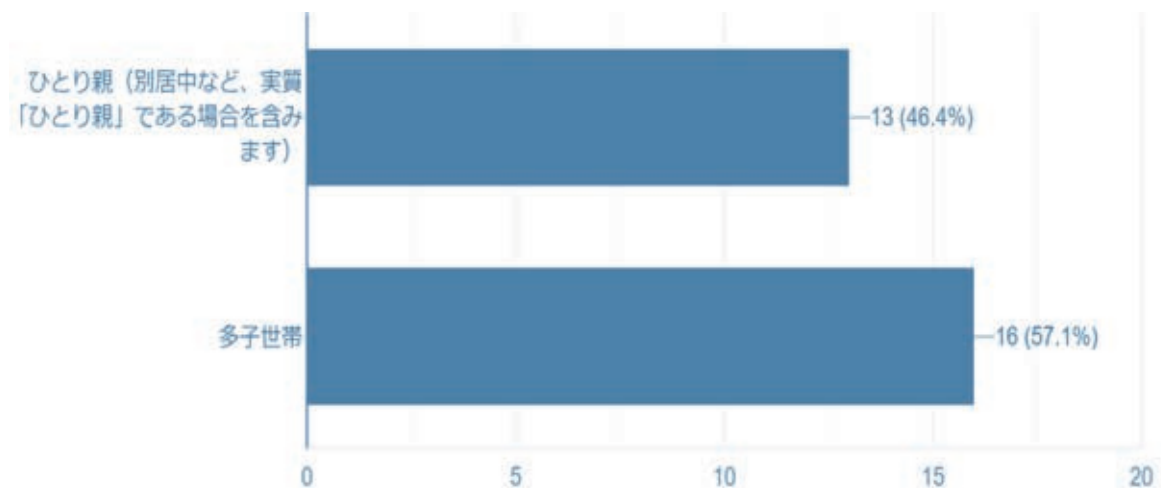


N=28

③ひとり親・多子世帯の区分

図4は「ひとり親・多子世帯」の区分を示している。ひとり親が46.4%、多子世帯が57.1%で、構成としては多子世帯が上回っている。このうち、1名はひとり親かつ多子世帯である。

図4 「ひとり親・多子世帯」の区分（複数回答）



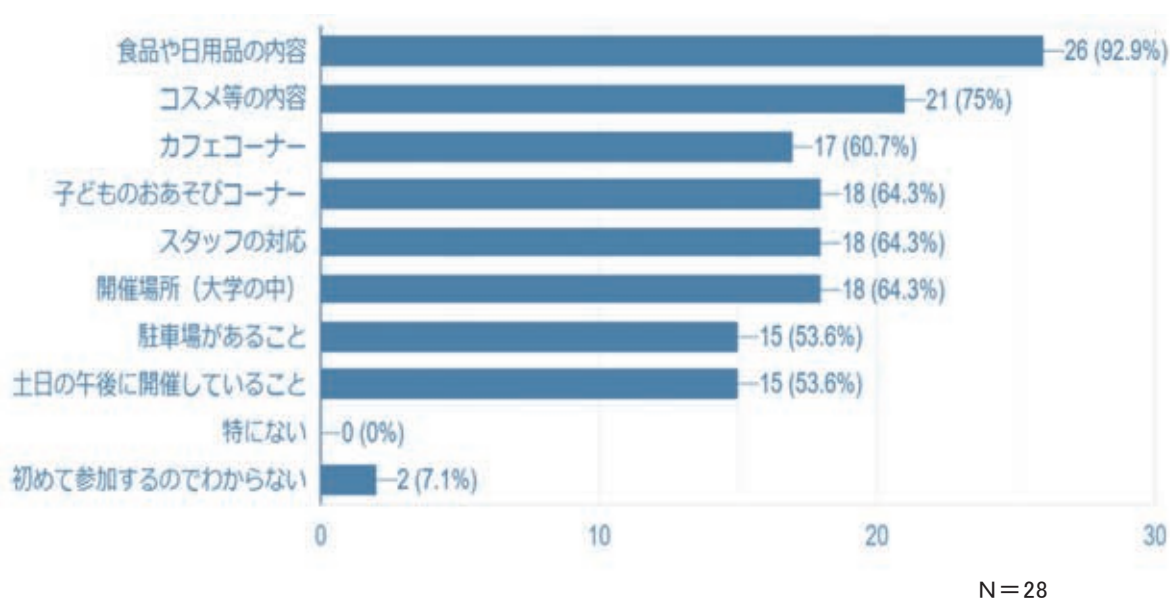
N=28

④良いと思うこと

図5は十文字の「ひとり親・多子世帯パントリー」で良いと思うことを示している。最も高かったのは、「食品や日用品の内容」であり、全体の92.9%が該当すると回答している。次いで「コスメ等の内容」75%と、配布品の内容についての評価が高い。また「カフェコーナー」や「こどものおあそびコーナー」「スタッフの対応」「開催場所」についても6割以上の方が良い点として挙げている。このほか、具体的には以下のような意見が得られた。

- ・ありがたく利用させて頂いています。スタッフさんや学生さん方が親切ですし、米や果物、野菜はもちろんありがたいですが、子ども向けのおやつを子どもたちが楽しみにしていて嬉しいです。ありがとうございます！
- ・学生の皆さんの対応が良いので、子供も輪投げなど楽しみにしていて助かります。
- ・こどものお遊びコーナーは楽しんでいるお菓子の輪投げや遊びコーナーなど、子供が毎回楽しみにしています。
- ・お茶が出来るのがありがたい。
- ・質の良い、お米や野菜、果物を頂けてありがたいです。子供は、お菓子のつかみ取りやカフェコーナー、工作コーナーを楽しみにしています。大学生のお姉さんが優しく接してくれることも嬉しいようです。子供が増えると自分のコスメを買う余裕(金銭的、時間的)が無くなったので、コスメも頂けてありがたいです。
- ・旬の果物、コスメ、お米を頂けるのは嬉しいです♪
- ・学生さんと遊びながら制作するイベントを楽しみにしています
- ・娘がお姉さん達と遊ぶのを楽しんでいる。学校の中なので安心して目を離して学生さん達にお任せできて、親の私はご用意してくださったコーヒーを飲みながらホッとした時間を数十分過ごせるのが嬉しい。あと、フルーツ等の生鮮食品がとても助かる。
- ・子どもが遊べる輪投げなどが楽しく、スタッフの方も優しく子どもも喜んでいます！
- ・皆さんが明るく接し、子供たちと遊んでくれるのでそんな様子を見て癒やされます!!
- ・全て
- ・数回、利用させて頂いています。毎回頂く内容も本当に助かるものばかりで、大変に有難いですが、それ以上に、先生方をはじめ、若い学生さん方皆さんが本当に親切で、優しく接して下さい事が一番素晴らしいと感じています。
- ・物価高などで本当に有りがたく助かっております。コスメなど自分の物は購入しないので…嬉しいです。

図5 十文字の「ひとり親・多子世帯パントリー」で良いと思うこと

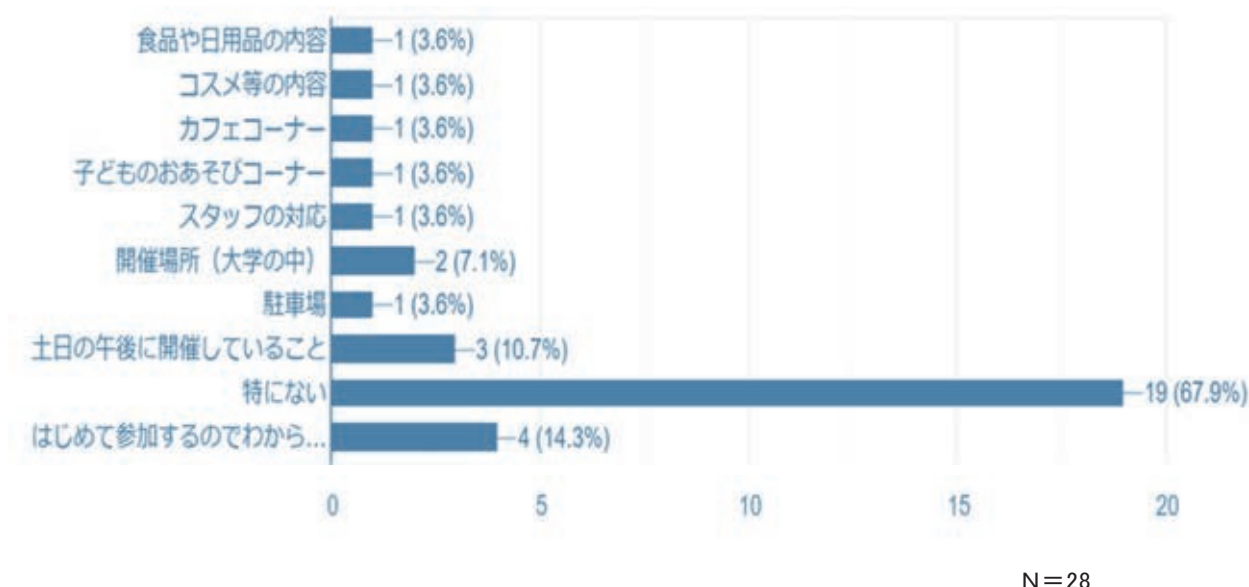


⑤改善してほしいこと

図6は十文字の「ひとり親・多子世帯パントリー」において「改善してほしいこと」を示している。「特にない」が67.9%と最も多いが、開催時期についての意見（土日の午後に開催していること）が約1割、その他についてもわずかではあるが意見があった。具体的には以下のような意見をいただいている。

- ・不慣れでわからないことが多いのもう少し声かけていただけるとありがたいと感じます。声かけてくださる方もいますし、対応が悪いと言うわけではないですがもう少しアットホームな感じだと嬉しいなと思います。誰とも話さずに帰ってくるとなんだか少し寂しい感じがします。
- ・お茶してる時に子供とスタッフさんが遊んでくれるとありがたい。または、キッズが座れるシートが敷いてあると小さい子連れはありがたいです
- ・もう少し早めに日程を教えて頂けると助かります。
- ・もし可能でしたら午前中の方が助かります
- ・自分の家から遠いので、また近くで開催していただけたら、午前中だと午後の予定を立てやすいかなと思いました。

図6 十文字の「ひとり親・多子世帯パントリー」で改善してほしいこと



おかし輪投げを楽しむ親子



思い思いに過ごす子どもたち

5. まとめ

2022 年 12 月から継続して行っている「ひとり親・多子世帯フード・コスメパントリー」の実践報告と成果の検証を行った。成果は以下の 5 点にまとめることができる。

- ①参加者はリピーターが多く、8 割以上を占めている。そのため、支援者との関係も深まり、課題や現状についての聞き取りもしやすい状況となっている。
- ②子どもは未就学児や小学校低学年が多く、遊びコーナーなども幼児向けのものや小学校低学年でも出来る製作などが好ましい。現状に合わせてコーナーづくりをしており、参加者の満足度も高い。
- ③支援品の内容は高く評価されている。新鮮な野菜や旬の果物、コスメなどは特に評価が高い。
- ④大学での実施ということで「安心感」が高く、また学生に子どもを任せられる点も評価が高い。
- ⑤学生やスタッフの対応の良さについて「優しい」「明るく接してくれる」「親切」等の声をたくさんいただいている。

一方、改善点についての指摘も見られた。このうち、「幼児用のシート」の必要性についての指摘に対し、すぐにマットを設置したところ、幼い子どもも安心していられる場があるということで、大変喜ばれた。その他の改善点として、以下の 2 点があげられる。

- ①日程を早めに決定することで、参加者の予定調整がしやすくなる。
- ②リピーターが多いなか、慣れていない方に対する気配り、声かけが必要

「ひとり親・多子世帯フード・コスメパントリー」は、単に支援品を配布するだけでなく、来場する子どもたちの発達段階に合わせた遊びの提供、ゆったり過ごせる空間としてのカフェコーナーの設置など、居場所としての機能を高めることに力を注いできた。今回調査により一定の成果が得られていることが明らかとなったが、継続するためには支援品や補助金の継続確保が必要となる。

< 参考・引用文献 >

星野敦子、矢野景子、大山博幸、大内巖児（2022）地域コミュニティの創造を目指した子育て支援のためのフードパントリー、児童教育実践研究 第 15 巻第 1 号、pp98-106

大山博幸、矢野景子（2022）子ども・地域の居場所支援を対象とするサービスラーニングのデザイン ～「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開（2 期）～、地域連携共同研究所年報 第 7 号、pp73-86

厚生労働省（2023）「2022（令和 4）年 国民生活基礎調査」



十文字学園女子大学

地域連携共同研究所年報 第9号（2023年度）

発行日 2025年2月

発行 十文字学園女子大学 地域連携共同研究所
〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
TEL 048-477-0555（代）

印刷・製本 株式会社たじま
〒357-0045 埼玉県飯能市笠縫353-3



